
THE MARVELOUS APES

比奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE MARVELOUS APES

【Nコード】

N1961D

【作者名】

比奈

【あらすじ】

明るい・真面目・元気。至って普通な女子高生「大和要」とロツクバンド「THE MARVELOUS APES」のメンバーは、文化祭に向けての練習中に奇怪なプラズマ現象に巻き込まれる。目を覚ました先は、夢魔クロムネフューの生み出した夢幻空間だった。クロムネフューの放つ刺客の手をかくぐり、要達は脱出の糸口を探す。

第一話「THE MARVELOUS APES」

「天高く、馬肥ゆる秋」

その日は丁度そんな日だった。

長く緩やかな坂が続く駅前からの大通りを。眼前には真つ青な太平洋が大パノラマで広がって、港に停まっているヨットの群れの上を、カモメの集団が白く輝いている。

吹き付ける潮風が気持ちいい。

少しいい気分になった私は、ペダルを少しだけ強く踏み込むと、秋の太陽の中を風になって駆け下りていった。

私達の通う学校は、海に隣接した丘の中腹にある、ヌーヴォー様式を取り込んだちよつといい感じなとこだ。創立70周年の記念年にあたり、今年は毎年この時期に行われる文化祭も、この地区一帯を巻き込んで盛大に開かれるという話し。

そついった事を抜きにしても、純白の校舎や手入れの行き届いた桜の並木道、そして目の前に望める煌く海たちが、私はお気に入りだ。学校はあんまり好きじゃないって人も多いと思うけど、私は悪くないと思ってる。

毎朝、この通りを滑るように下りて行って、風を切りながら広い校門に流れ込み、色んな花や木の匂いを嗅ぎながらチャリを置いて、グラウンドを横切って校舎まで散歩。けっこう素敵な朝を送れる気がしてるんだけど。

まあ勉強も嫌いではないし、成績も悪くはない。別に嫌いな人もいないし、そんな人には最高の場所だと思っただよね。

そして、何より友達がいる。

それって私にはすごい最高の事だ。ほんと。

今日は土曜日。本来なら学校はお休み。

いつもだったら、友達と買い物に行ったり、カラオケしたりちよつと気取ってクラブなんか行ったりして。バイトとかしてない分、少し苦しかったりするけれど、何とか楽しくやっていける。

今、友達とって言ったけれど、いつも一緒にいる友達がひとりいる。彼女とはいつも一緒にいた。学校でも、放課後でも、休みの日でも。彼女は親友だ。

まあ、彼女の話はとりあえず置いて、また後でという事にして。

私はそんな貴重な休日、わざわざ学校まで出向いたわけなのだ。

私の家は、この雨海市の丁度ど真ん中に居座る丘の中頃、何年か前の好景気の時代に出来た少し高級な住宅街の一角にある。学校からは真裏にあたる位置関係だ。

そんな感じだから、丘をぐるりと回る道が最も楽に通える道なのだが、いかにせん距離がある。けっこう大きな丘なので、回り道を通ると実に30分はかかる。せつかな性質の私は、そんな時間をかける位なら、丘を越えた方がマシ。

って感じでいつも通る坂道を、今日も下りながら、広い校門をすり抜けようとした。が、閉まっていた。

ああ、今日は休日ね。

私はでかかと掲げられた

「雨海界政高校」

の看板？を見上げながら、裏門へと回る事にした。

さつきも言ったけど、うちの学校は今度、文化祭がある。

正確には明後日の月曜からだ。

三日間に渡り開催される今年の文化祭は、生徒や学校関係者のみの催しではなく、模擬店に地元商店街の店が出店してきたり、小中学校の子達が出しものをしたりと、文化祭と言うよりは夏祭りといった地元主催のイベントみたいなノリのものになるようだ。そんなうちの学校は私立校だ。

無論、他校の生徒も出入り自由。そして、出しものをやるのも、

申請さえあれば自由にできるのだ。驚きだね
そこで本題。

私は、バンドを組んでいる。

基本はロックなんだけど、やりたいときはジャズもやるしスカとか
ロカビリーとか、なんでもやる。

メンバー構成は5人で、まずV.O.が私。他にはトランペットがち
よっと出来るかな。今はギターを練習中。

ギターとサイドヴォーカルの男の子がひとり。

ギターがもうひとり、女の子。彼女は他にV.O.をとったりする。
ドラムスでリーダーの男の子がひとり。

そして、ベース担当の女の子がひとり。

これで5人。

んで、いま挙げた5人のうち、ドラムスとベースの子は他の学校に
通ってる子達なのだ。

んまあ、本来ならイカしたライブハウスでやるんだけど、それは地
元もあるし、東京の方に出てって演奏する事もある。私たちはそれを
G I Gと呼ぶ。

今回は、文化祭が派手にやるって事と、他校生も自由参加って事も
あり、私達のG I Gをいつも観に来てくれる友達ファンの熱いリクエスト
も伴って、わざわざ学校でG I Gる運びとなったわけ。

（本当はダサイ場所でG I Gはしたくないんだけど、最近いつも使
ってるライブハウスでちよっとしたモメ事が起きちゃって、しばら
く演奏するところが見つかなかったからってのが一番の理由。これ内
緒）

んで、今日は機材搬入からセッティングまで終わらせなくちゃな
ないってスケジュールだから、元気に登校したわけなのです。

いつもの場所にチャリンコを置いて鍵をかける。

この一連の作業って癖にならない？他のチャリとか原付とか乗ると、

ついついいつもの動きで鍵を閉めようとしちゃうんだよね。

振り返って校舎に向かって歩き出そうとした時、ふと二階のまどに目が留まった。

何か黒い影のようなものが、スツと横切った気がしたのだ。

あそこって音楽室だったかな？

今日はうちら以外に学校で準備してる人なんていないはずなんだけど。だとしたら、音楽室以外に人はいないはず。

「誰？」

私は何気なく呟いていた。

「おいっすー！」

背後からの突然の声と共に、誰かの手が私の肩を強く叩いた。

あまりの唐突さと、集中していたところの不意を突かれた事も重なって、私の身体は驚きでビクリと跳ね上がった。

それをみてなのかどうかは知らないが、笑いの入った踊る声が更に投げかけられた。

「あたしだ、あ・た・し！」

聞き覚えのある声。何となくホツとする、心地いい声だ。

その声の主には心当たりがある。なんてったっていつも聞いているお馴染みの声だから。

振り返る私の目の前には、予想通りの顔。

ニンマリという表現がよく合う満面の笑みを浮かべた少女。

いや少女と言うよりはもはや大人の女の顔つきだ。

少女の名は、和戸 聖わと せいといった。

ワンレングスの長い黒髪に、対照的な白くて艶やかな肌。

私より少し高めの170弱といったところの長身、スラリと伸びた四肢。かつ凹凸も少ない細長い身体は、モデルと見間違っ程完成さ

れている。

どこことなく妖艶な雰囲気醸し出す綺麗なアーモンド型の瞳の中に、私の顔が映りこんでいるのがはっきり見える。

笑顔だ。

「おはよ、聖」

私は右手を軽く挙げる。

「おはよっ」

彼女は言いつつ、自分の右手を私の手に勢い良く叩きつけた。乾いた気持ちいい音が生まれる。

「あたしに言っただの？」

聖はそう問いかけた。

一瞬、何のことだか分からなかったが、少し考えればすぐに納得出来た。

彼女は、私が独り言で言った「誰？」という言葉に対して訊いたのだろう。

「うっん、違う違う。独り言」

笑いながら言う。

「何だ、そつか。あたしはてつきりあんたが気配とか、殺気を感じるとか、第六感に目覚めたのかと思ったよ。」

「えへえ？何それ？」

あんまりにも真面目な顔で言った聖に、私は思わずツッコミ入れてしまった。

「あれよ、あれ。幽霊が見えたりするやつ。シックスセンスよ。ほんとに自分が幽霊だったんだよ！？あれ」

「あ！知ってるよー、それえ。」

「シックスセンスってのは、霊感だけじゃないんだぞ。鍛えれば、そういう気配とかまで感じられるようになるんだってさ」

「へえー、そうなんだ。聖はできるの？」

「いやいやいや、あたしがあんたは出来るんじゃないのかと思って

訊いたんじゃない。出来てたら訊かないし。感じるし」

「あ、そうか」

私は思わず笑ってしまった。

聖も笑っている。

それから私たちは話しながらチャリ置き場を後にした。

これが私達の日常。

つまらない話をして、意味もなく笑って、ブラブラして。

私はそれで幸せだった。私達にも色々あるけど、少なくともふたりでこうしている間は忘れられた。

日常っていうのはそれが大切なんだと思う。

何も考えずに、ただ楽しくすごしてられる。

別に逃げたりとか、避けたりとか、大変なことが全くないわけじゃないのは知ってる。

でも、そういうのに立ち向かうには、ボーっと過ごす、充電期間みたいなのが必要なんだ。日常って、そんな時間。

私はそう思う。

「そつえば、もうみんなきてるのかな？さつき二階の廊下に誰かいた様な気がしたんだけど。あそこって音楽室だったっけ？」

「ん？八神から聞いてない？G I Gるとこ、体育館に代わったんだよ。なんかうちの軽音もライブやるってんで、広いとこ使わせてもらえることになったんだってさ。それに、音楽室は三階じゃん？」

正面入り口から入って、下駄箱で上履きに履き替えながら、私は少し大きな声で話しかけた。

私達はクラスが違ったから、下駄箱も一列離れている。

背の高い金属ロッカーを挟んだ形で、聖の答えが返ってきた。

私の下駄箱は入り口側の日が当たる場所。

この時間、朝日が入り口上のステンドグラスを通過して下駄箱を照

らすため、私の場所は丁度紫色の蝶々がぼんやりと映しだされ、幻想的に浮き上がるのだ。

うん、今日もいい感じ。

「だよねえ、何か誰かいた感じがしたんだけど。気のせいかな。つか、体育館になったの？何か一気にでかいG I Gになりそうだね」「そうなんだよ。他のが軽音の連中つてのがダサいけど、でかい分にはモウマンタイじゃん？逆にやる気でるっつか。」

聖がもう私が見た人影に絡んでこなかったから、私もそれ以上その事について考えることもなかった。

上履き（ムーンスター）に履き替え聖の方へ回り込むと、彼女も丁度履き替え終えたところで、黒髪をさらりとかき上げながら顔を上げるところだった。

女の私から言うのも何だが、うーん、綺麗・・・。

「今日は海と桜が車で機材を運び込んでくれるらしいから、こちらはそれを降ろしてセッティングする係りだね。」

「あ、そうなんだ。海くん、もう18なんだもんねー。んで、何時くらいに来るんだって？」

「んー、10時くらいだつて言つてたような気が・・・」

廊下の時計を見上げると、9：50を指していた。

「あ、けっこうジャストな時間だね」

聖も時計を見上げ少し頷くと、軽く手を振り私を促がす素振りをみせる。

「とりあえず体育館行つて、すぐに機材運べる様にしとこーか。ちやんと段取り組んどかないと、海はそういうところさからね」

「ああ、そうだね」

自分の気に入らないことがあった時、口とんがらせて文句ブーたれてる海の顔を想像すると、小さな笑いがこみ上げてくる。

海という人は、私達のリーダー的な存在ではあるのだが、けっこう我儘な子だ。我儘というのはちよつと語弊があるかな。

基本、とても責任感があって、頭の回転が速い。根が真面目なだ

けあつて、物事は常にキチンとこなさないと気に入らない人なのだ。だけど、キャラ的なもの？ 普段の性格的なものが、あんまり人を付いて来させないってのがある。ま、細かいことは後にして。

そのギャップで、どうしても彼が思うようには物事が進まなくて、ブーたれる。

だから一見すると、彼は我儘だ、という風に映ってしまうのだ。だけど私達だつて、決して彼を軽んじているわけじゃないんだよね。ただ、からかいたくなるキャラだから。

一階の廊下を通り、一年の教室の前を横切つて奥へと進むと体育館がある。うちの学校は一学年およそ6、7クラスあり、それがずらーっと一列にならんでおり、さらにその他の教室が並んでいるため、非常に長い造りになっている。さらに私立独特の何のためにあるかよく分からない教室が多く、一辺の両端から直角に教室群が伸びていて、要はでかい正方形の校舎なのだ。

私達は、その廊下のうちの一本、最も体育館に早く到着するところを進んでいった。

体育館がそろそろ見える辺りまで歩いた時、

「あれ、体育館に誰がいる？」

不意に聖が足を止め、振り返るなりこう言った。

「あ、ほんとだ」

見ると、確かに体育館のドアが開いていた。

「やつぱ誰かいるのかな」

また私の頭の中に、さっき見た廊下の影を思い出していた。

「誰がいる？」

私は自然と正面に見える体育館の入り口を凝視していた。

「あれ？ あいつかな。早いな」

隣で聖が呟くのが聞こえる。

あいつ

聖がこう表現する人間は一人しかいない。

私は容易にその（あいつ）を思い浮かべることができた。

「八神君？」

聖は頷いた。

「多分ね。まさかあいつが定時にきっちり来るなんて思えないけどね」

やれやれ、といった感じに頭を振りつつ私に言った。

私達は少しだけ開いた体育館のドアに手をかけた。

ひんやりと冷たい感触が掌に伝わる。

金属に、キルティングされた牛革の打ち付けられた重たい扉。

けっこうな体重をかけなければ開かないそのドアを押し開けると、少しづつ広がりつつある隙間から暖かい太陽光が漏れだしてくる。

ふんわりとした優しい光。

仄暗い廊下に柔らかな光の絨毯が生まれた。

「よお」

光と共に、声が現れた。

心地いい声。

私はこの声を誰よりも知っていた。

どちらかと言うと低い、私の中にすうつと入ってくる声。

私が常に求めているものは、この声以外の何物でもないのだ。

「やっぱりあんたか」

聖がその声に向かったそうというのが聞こえる。

どうやら一瞬ではあるが、私は自分の世界に入り込んでいたらしい。はっと気づき、無意識にたるんでいた表情を引き締めようと努める。

「どうしたんよ、時間通りにあんたが来るなんてさあ。珍しいこと

もあるもんだね」

「たまにはな。今日は単車で来たから」

「え？学校まで？」

「まさか。レノに頼んで店に置かせてもらったよ。さすがに単車が教師に見つかると思んどーだしな」

私は聖の隣を歩きながら、二人の会話を聞いているだけだった。かすかに軋んだ音のする板の床の上。真正面奥に見えるステージの端に腰掛けた少年。彼に向かって、私達は歩を進めていた。

「よお、要」

彼まであと数歩と迫ったところで、彼がこう言ったのが聞こえた。

「あ・・・、お、おはよ」

私にとっては不意な出来事。

一瞬口ごもり、それを誤魔化すように私は笑顔を作り直すと、出るだけ爽やかを心がけ挨拶を返した。

「ははは。朝から噛み噛みだな。寝不足か？」

にやりと頬を上げ、彼はからかうようにそう問いかけてきた。

「え・・・？い、いや、ちゃんと寝たよ。昨日は」

ああ、また噛み噛み・・・

マジ最悪。

彼はほんとに楽しそうに少し声を出しながら笑っている。

私って、なんでこう本番に弱いのか。

いつもこう。

何か大切な、決めなくちゃ、ここが決め時って時に限ってどうしようもないポカミスをやらかしてくれる。ほんと、つくづく嫌になるよ。

「何だよ、どーした？何を慌ててんだ」

彼の名は和宮^{かすみや} 八神^{やがみ}。

いかにも高校生然とした、緩やかに逆立ったアッシュヘア。ちよつとだけ釣りあがった目尻と、目の下をすつと走る微かな皺が特徴的な、美しく整った顔立ち。身長は180ちようど。

制服の上からでもうつすら分かる、広い肩幅と厚い胸板。

野球をやっている割には、小さく引き締まったセクシーなヒップ。そしてその肉体から美しく伸びる、すらりと長い手足。

それはさながらイチローか新庄。

いや、彼のセクシーさ、かつこよさはそんなもんじゃない。

言うなれば、完璧なスタイルを手に入れた木村拓哉。現在の色気をもったまま若返ったブラット・ピット。むしろニコラス・ケイジ。

いやショーン・コネリーか。

とにかく彼の持ち味は、十代とはとても思えない、高校生離れたその色気にあつた。

「どうしたよ？要。今度はボーっとしてよ」

ああ、八神君の声がこんな近くから……

私は舞い上がった。

むしろ我を忘れて浸った。

八神君……

ああ、八神君……

私は八神君が、好きだ。

私は八神君が、大好きだ。

私は八神君を、

愛している。

のだらう。

甘い。気持ちいい。芳しい。柔らかい。

でも

辛い。気持ちが悪い。汚い。痛々しい。

痛い。

痛い。

痛い。痛い。いたい。いたい。

いたい………

………いた………い………

「おい、どうしたんだ？要のやつ」

「ああー、いつものことジャン？秋だしさ」

「そりゃ春だろーが」

「そうだっけ？どっちにしろ過ごし易い良き季節だからねー。いいんじゃない？」

「何がいいんだよ」

「いや、何となく。えへへ」

「えへへ。じゃねえよ。カワイコぶんな」

「カワイコぶってねーよ。わたしはどっちかてーと綺麗なタイプだし」

「自分で言うかね、そういうことを」

「そお？ま、たまにはね」

「何かいつもそんなこと言ってる気がするけどな」

「いつもって。いつ言ったよ、わたし。最後にいつ言ったよ？」

「いつも言ってるよ、お前。昨日も言ってたよ、家でさあ」

「え！？ちょ、お前」

「ん？何慌ててんだ？お前」

私の耳はその会話を聞き逃さなかった。

胸が痛くなった。

小さな針が刺さったみたいに。

聖が、私に気を使ったのが分かったから。

聖と八神は付き合っていた。

パッパー！！

景気のいい音が、体育館中に鳴り響いた。

瞬間、現実呼び戻される私がいいた。

「お、やつと来たな」

八神が、やれやれだぜ、といった感じで聖や、多分私にも声をかける。

どうやら機材運搬班の二人が到着したらしい。

「ナイスタイミング・・・」

そう聖の弦きが耳に入る。

その時には、八神は既に非常口に向かって、何歩か歩き始めていた。だから、今の聖の言葉が聞こえたのは私だけだったに違いない。

もちろん聖は私に今の弦きが聞こえたとは思ってはいないだろうが・・・。

だが、実際は私も彼女の意見に大賛成だった。

既に聖は私を意識してしまっていたし、それは私も同様。

もしあれ以上、八神君に突っ込んだ質問をされていたら、今の私達

の状態では何のリアクションも起こせないし、気まずい空気に汚染されてしまっただけだっただろう。

そのタイミングでのあのクラクション。

まさに計ったかのごとき絶妙なタイミングだ。

私はひとつ息をつく、八神の後を追って歩き出した。

そして私に続く聖の姿を横目で捉える。

表情は見えなかった。

多分、いつも通りの涼しげな微笑を浮かべているに違いない。

私には分かる。

私達は確かにこんな関係だが、心が通じ合っている事だけは、何より強く信じられる。

私は、この世の中の誰よりも聖を信じている。

だから私は、敢えて彼女の顔を見ることなく歩き出したのだった。

「待たしたみたいだな。わりい、わりい」

八神の背中越しに軽い調子のいい声が聞こえてきた。

「オーイエー。お待たせー、ごめんなりー」

続いてちよつと舌つたらずな子供っぽい声で、ひとつも反省してない侘びの言葉も届いてくる。

それを聞き終えたところでちょうど私と聖も、八神と同じ校庭側に面した非常口へとたどり着いた。

「おつ、ヒジカナ。待たせたね、すまんすまん」

「くわんくわん」

ふたりの男女が代わる代わるに全く反省感のない侘びを繰り返している。

「おはよー」

私はとりあえず、何はともあれ挨拶してやった。

案の定、自分の可愛いボケを無視された少女は顔を膨らませていた。

少年の名前は いずみ 和泉 かい 海。

少女の名前は てるわ 照和 さくし 桜 といった。

海のほうは、典型的なプレイボーイだ。

八神より更に高い長身。少し面長だが、癖のない美しい顔立ちはまさに美少年。八神もかっこいいのだが、少し癖があるため万人から好かれる顔はしていない。

だが海は違う。

更に彼は自分がかっこいいのを知っていたし、何よりも最高の武器として利用している。

かっこいいからこそ自分の個性を主張しても、女はちゃんと着いてくるのも知っている。

海の個性。

髪は、背中まであるストレートの長髪を真っ白な白銀に染めぬいている。

サーフィンをやっているから、肌は綺麗な小麦色。

ちなみにサーフィンの腕はいいらしい。（見たことはない）

何より、自分に着いて来させる言葉や気遣いのテクニックを知り尽くしている。

それこそ最大の個性だった。

海はこんな人。

桜はいわゆる天然キャラ。

言うこと成すこと全てズレている。

見た目的には普通に可愛い女の子だ。

木村力エラよろしく、綺麗な栗毛色のミディアムボブ。

ちょっと下膨れ気味の柔らかなラインの顔立ち。

聖とは逆の大きなたれ目。

どちらかといえば童顔と言える、可愛い作りをしている。

身長も私達に比べて10センチは低く、155前後といったところか。

こんなビジュアルで天然キャラ。

はつきり言って、ずるい位に完成されたハ妹キャラと言える。

だが、この子をあなどるなかれ。

実はメンバーの中で一番のキレモノな場面がちらほら。

更には、この子。音楽一家のサラブレッド。

担当するベースに関しては、いつプロになってもおかしくない腕前との評価を頂いたこともあるのだ。(多くのけっこう有名なバンドがインディーズ時代に演奏していた老舗ライブハウスのオーナーがそう言っていたのを聞いた覚えがある)

まあ、彼女の家族の事とかは今は関係ない。

うちらはうちのやる事をやる！ってことで、私達はあんまり桜の家族のことには触れないようにしているのだった

海がどこから借りてきたのか、紺のハイエースのドアを閉めながら誰にもなく声を発す。

「ったくよー、まさか俺らが出禁になるとはなー」

続いて桜もシートから滑り降りそれに続く。

「ふとーだよなー。ふとーな判決ってゆーやつ？」

ふたりは機材を降ろすため、車体の後部へと回り込む。

私達三人も、それを手伝おうと非常口から外へ出た。

無論、上履きのままだ。(これが教師に見つかるそとまたくどくど説教を食らうはめになる)

「確かに不当っちゃあ不当だったよな」

「そつだよ。あたしらにしたら人助けだし、あれ」

先に海が車に乗り込んで、馬鹿みたいにでかいスピーカーやらアン

プやらを外に押し出してくる。

そいつらを受け止めながら、八神と聖が言葉を交わしている。

「あんなに長く拘束しやがってよー。お前だってちゃんと説明したんだろ？海」

更に八神が問いかける。

「したよ。お前らは五時間で済んだからいいけど、俺はあの後から更に三時間もおんなじ話ばっか繰り返えさせられたんだぞ」

「えー。海、そんなにいたの？」

「そーだよ。一応、年長者だからな。お前らが若いのがいけないんだ」

ボーっとした感じの桜の質問に、海はいかにも楽しそうに答えている。

うちのリーダー役ってのをなんだかんだで結構楽しんでる様子。

「とりあえず早くお前は二年になれ、桜。そしてお前らは早く三年になれ」

「そしたらあんたは卒業ジャン、海。おっさん、おっさん」

聖が嬉々として海を茶化し始める。

「うつせーなー。大体お前が原因なんだぞ、分かってんのか」

ダルそうな声で、今度はドラムセットのタムタムを聖に手渡ししながらピシヤリと締める。

「しょーがないじゃん。あんな見たら誰でもああなるっしょ？」

「あー。んー。何ともいえねーよ、それ。確かに気持ち分かるけどなー」

「いやいや、あれはしょーがない。ねえ？要もそう思うでしょ」

タムタムを私に手渡ししながら、聖がこう振ってきた

続く

第二話「激しい夜」

あれは八月の最後の土曜の事だった。

うちらは休みをフルに活かし、毎週2回を目安にいつも使っている「BORN IS DEAD」というライブハウスでG I G 漬けの夏を送っていた。

その最終G I Gにあたったのが、ちょうどその土曜日の夜だった。観客も満員状態で、およそ70人といったところか。

いつも通りオリジナルの楽曲を中心に、たまに受けのいいコピーをやったりと、その日も結構いい感じに進んでいて、もうそろそろクライマックスというところに差し掛かっていた。

そんな時だった。

私は汗だくになってアップテンポなロカビリーナンバーをがなりたてていて、聖も八神も、海も桜も、そしてフロア全体を巻き込んでみんな一気に最高潮まで達しようとしていた。

Bメロを歌いきり、今から懇親のサビへとなだれ込む。

私は思い切り息を吸い込んで、サビの最初の歌い出しを頭の中に思い浮かべていた、その時の事だった。

私の視界に、何だか分からないが何かおかしい。

そんな映像が入り込んできたのだ。

フロア向かって右奥の隅。

私の位置からはトイレの小汚いドアが見える場所。

そこから制服を着た女子高生が、扉に手をかけ身体をひきずる様に現れてきた。

うちのとは違う制服。だが、その制服のブラウスは半分肩からずり落ち、ところどころ破れて穴が開いている様子。

靴も片方しか履いてないし、靴下は半分脱げかけていた。

更には口の端が、何か黒いもので汚れているように見えた。

暗くてよくは分からない。が、直感で分かった。
血だ。

その後ろ、トイレの中から更に数人の、男と思わしき腕が伸びてきて、その女子高生の腕や胸、肩、頭を鷲掴みにした。
必死で抵抗する様子が伺えた。
が、虚しくも女子高生の身体は再びトイレの中に消えていった。

瞬間だった。

サイドでリズムを刻んでいた聖のギター音が、パツタリと聞こえなくなっただの。

と思うと同時。

いや、むしろ思ったときにはそれは起こった後。

私の目の前を、黒い影が光速ですり抜けていったのだ。

あまりにもテンションが上がった会場は、聖がステージから消えた事すら気がつかなかったと思う。

そして次の刹那、

めぎきつ！

硬いものがぐしゃりと踏み潰されるような、耳障りな音がフロア中のスピーカーからたたき出されていた。

一瞬の静寂。

私は自分の目を疑った。

聖のリッケン620が、トイレの入り口で男のうちひとりの顔面を、中のタイル床に向かって殴り倒した瞬間だった。

殴られた男の仲間らは当然怒り狂った。

我を忘れて聖に殴りかかってくるのだが、聖はその拳ごと振り回し

たギターでぶん殴る。

当然、大振りのギターは関係のない観客をなぎ倒す。それからもう大乱闘。

ステージにいたうちら他のメンバー達にもトイレの男達が襲い掛かってくるし、メンバー達はそれぞれ相棒片手に次々とそいつらを壇上から叩き落していく。

聖は混乱の中、トイレの男達の顔面をひとりずつ丁寧にフロアに沈めていく。

そのうち何が何だか分からなくなり、メンバー全員フロアへと飛び込み、だれかれ構わず殴り倒していったし、観客達もとりあえず手近の人間に殴りかかるとけといった始末。

気がついた時にはライブハウスにいた全員が、警官の手によって血まみれのフロアに身体ごと押さえつけられている状態だった。

当然うちらはそのまま雨海署へと連行された。

ライブハウスから出るとき見たのは、張りめぐらされた黄色い結界と無数の赤色灯、そして膨大な数の野次馬の群れ。

警察署に着いたとき、連行された人数がほんの十人程度に減っているのに気づいた。

それもそのはず。

警察になんかに来るよりも、何はなくともまず病院。

ほぼ八割の人間が病院送りにされていたのだから。

残ったのはメンバー五人、従業員が三人、客が何人か。

その中でもっとも人を殴ったであろうと思われる聖が最も汚れもなく、体力の消耗が少なく見えた。

それからうちらはみんなバラバラの取調べ室に押し込まれ、日付も

変わった午前三時まで、延々五時間に渡る取調べを受け続けた。顔も身体も、返り血でがさがさだった。

三時を回った頃、海だけを残してもう帰っていいと言われた。

海だけを置いていく事に多少の罪悪感があったが、海は

「そんな格好で帰ったら父ちゃん母ちゃんが腰抜かしちゃうだろう。帰りに銭湯でもよつて、今日は聖に泊めてもらえ」

そう言ってくれた。

後は、海から聞いた話。

うちらメンバーは、何であんな乱闘が起きたのかの経緯や説明を出来たが、他の連中は違ったらしい。

署でも病院でも、全員が全員何も分からなかったと証言した。

気がついたら誰かに殴られてたから、殴り返した。

みんなそんな程度の認識。

ライブハウスのスタッフや他のバンドの連中すら、気がついたらもう乱闘は始まっていた状態だった。

そんな状況の中で、きちんとした証言をしたのがA P E Sのメンバーだけ。

これでは警察も判断のし様がない。

午前二時。そこで出た新証言。

病院に運ばれていた、被害者の女子高生。

その日彼女たちは、友達二人連れでうちのG I Gを観に来ていた。ふたりは典型的なギャルだったが、聖の大ファンだということで、純粋にG I Gを楽しみに来たのだという。

だが本人がどんなつもりでも、ライブハウスにギャルが制服で現れたら、嫌でも目をひいてしまう。

どんなに声を掛けられても、G I G目当ての彼女らは無視を決め込むつもりでいた。

そんな中、執拗にナンパしてきたのが聖が殴り倒した男たちだった。彼女らは五人で来ていたその男のあまりのしつこさに、いい加減頭にきて激しく罵倒したという。

結果があれ。

ふたりは無理やりトイレへ連れ込まれ、しこたま殴られた拳句、まわされそうになった。

一瞬できた隙をみて、ひとりトイレの外に逃げ出したその瞬間を、私が目撃し、同時に聖が助けに入ったという事だった。

ギャルふたりは、全身を打撲しており、頬骨や肋骨など数箇所を骨折する大怪我を負った。

目を覚ました時には、聖が自分たちを助けてくれた事だけは覚えていた様で、状況を聞くと、青ざめた顔で警察官に今の話を申し出たという。

そして午前三時。

私達は無事解放されたというわけだった。

その後も色々あった。

ここまで大きな騒ぎになったのだ。

まずは学校。次に親。

親にはとりあえずのところ言い訳して誤魔化せばよかったただけだが、問題は学校。

私立校だし、そういう問題には敏感。

見つければ即退学。

更には学校から親に連絡されるのが痛い。

ただでさえバンドをやるのを反対していて、成績さえ落とさなければいいという約束を守る事で何とか許可を得ていた。

それに何よりこんな乱闘なんかに関わったのを知れば、ママは卒倒しちゃうだろうし、パパは「不良に育てた覚えはない」なんて言っ

て、きっと家から出してもらえなくなる。
それは絶対に勘弁だ。

私はしばらくの間、いつバレるかとかビクビクしながらの生活を強い
られた。

警察から解放されて聖の家で昼まで寝て、その後家に帰ろうと思っ
た時だった。

海からの着信。

私達は再び雨海署へ呼び出された。

そこで私達が昨晚、海を担当した刑事に言われた事がこうだ。

「お前ら、今回の事はがっこや家族には言わないでといてやるから
な」

ラッキー！

理由は、

まずはギャルとうちらの言い分が認められた事がひとつ。

次に聖に半殺しにされた男たちは、警察が前々からマークしてい
た薬の売人で、ちょうどその日のG I Gにも商売で来ていた事が分
かったから。

三つ目は、乱闘の直接の原因が、聖が男たちに殴りかかったから
と立証されなかったから。要は自然発生として処理されたのだ。

最後は一番簡単。海や八神と顔見知りの刑事が何人かいて、
今回の経緯を聞いて取り計らってくれたからだった。

とりあえず刑事的には事なきを得た。

傷害に関しても、正当防衛で通してもらえたし。

その時はとりあえずハッピーでこの話は幕を降ろした。

めでたしだ。

それから何日かして何となく私と聖は、まわされそうになってたギヤルのお見舞いに行く気になった。

病室に入ると、ふたりはベッドを仲良く隣に並べてファッション誌かなんかを見ながら、馬鹿みたいに大笑いしていた。

肋骨を折ってる割にはやたらとデカイ声。

格好だけはひとりはまだ病院の浴衣を着ていたが、もう片方はダブダブのスウェットの下。

病室にも関わらず、何故か完璧なばつちりメイク。（目の周りをもう真っ黒だ！）

本当に典型的なギヤル。

ふたりは私達、というより聖の姿に気がついたようだった。

鼓膜が破れるかと思うくらい悲鳴。むしろ絶叫。

ふたりとも足はやってなかったみたいで、雑誌を放り出すとベッドから飛び降りるようにして駆け寄ってきた。

口々に

「ぎゃー！マジで聖ジャン！」

「うおー！すげえ、来てくれたの！？」

喚きちらしている。

タフなやつら。

聖の方にちらりと目をやると、私同様にもう勘弁といった表情。

別に私達としても、ギヤルだからどうか言うわけじゃない。

普通にうちの学校にもそういう趣味の子はたくさんいるし、何人かは友達付き合いもある。

ただ、この狭い空間のこの距離でのこのテンションが勘弁願いたいだけなのだ。

「チョーサンキュー！聖ってマジカッケーよ！」

「まさか来てくれるなんて思わなかったし。マジで嬉しい」

「えー？しかもお見舞い！？その花！？ケーキ！？」

「すげえ優しいし」

「うああー！テンション上がりまくりだし！」

うああ、ほんとに勘弁だよ。

私からしてみりゃ、テキトーに話し合わせてさっさと帰りたいだけなのに。

私が胸中、毒づいていると

「あんたらねえ・・・」

聖が口を開いた。

「うつせーんだよ、さっきからさあ」

一瞬何を言われたのか理解できなかった様で、ふたりともキョトンとした表情だ。

「これお見舞いだから、食いな」

そう言っと、持っていた花をぶつきらぼくに片方の胸の辺りに押し付ける。

「行くよ、要」

くるりときびすを返すと、聖は出口に向かってさっさと歩き出した。私も持っていた花をもう片方のギャルに手渡すと、聖について出口に向かった。

聖がちょうど出口に差し掛かったときだった。

「ちよっと待ってよ！」

ケーキの方が声をあげた。

「ねえ、もっと話していつてくれないの？せっかく来てくれたのに」

「そうだよ。うちら、あんたのすげえファンなんだ！今日会えてすごい嬉しかったのに」

「まだちゃんとお礼も言ってないじゃん」

聖が立ち止まった。

出口の壁に手をついて、半身だけ振り返り

「あたしのファンだっていうならさあ、もっとそれらしい振る舞いをするんだね。ケツが軽いんだよ」

それだけ言つと聖はさつさと病室から出て行つた。
私もこれ以上気まずい病室に留まるつもりはない。
出口から顔だけ出して振り返つた。

「じゃ、早く治るといいね」

それだけ言つと、すぐに聖の後を追つていった。

それから何日か後のことだつた。

とりあえずみんなでライブハウスのオーナーに謝りに行くことになった。

あの夜、覚えてるイメージだけでも、フロアは血みどろのグチャグチャだつた。

これで謝らないわけにはいかない。

例え刑事的に何もなくても、こちらが迷惑かけたことには変わらない。

そして言われたのが、出入り禁止だつた。

うーん。オーナー、顔も見てくんなかった。

というわけで、うちのホームは使用出来なつた。

どうにかしてG I Gをしたい。

だが、そういう警察沙汰の噂はすぐに広がる。

どこのライブハウスへ行つても門前払い。

いつの間にか、雨海市内のほぼ全ての場所がこちらの出入り禁止体制をしいてしまつていたのだつた。

そこで初めの話に戻るわけだ。

あ、そうそう。

先週、街であの時のギャルに会った。

ふたりはもうギャルは辞めたんだって。

そう言うふたりは、ふたりそろって

ストレートの黒髪のワンレンに、うっすらとのったナチュラル系のメイク。

ソックスも腿までの黒いタイツに変わっていたし、靴も制服に力カトのあるミュールをはいていた。

「うちらこれからはこれで行くんだ。聖も言ってたじゃん？

ファンらしくふるまえてさあ」

そう、それは聖の制服の着方そのままなのだ。

「これからはギャルはダサいっしょ。うちらが最初のひじラーってやつ!？」

どうやら聖の言った意味はこの子達には伝わらなかったらしい。

これ以上は何か言わないほうがいいだろう。混乱しちゃうし。

でも、ひとつだけ言える事がある。

うーん・・・すげえカリスマ性。

続く！

第三話「私たちの群像。それから」

うーん。難しい質問だね。確かに聖がやったことは正しいとは思
うけど」

「けど？」

眉を下げ、唇をとがらせた、聖お得意の変顔を作りながら私の顔を
覗き込んでくる。

ちなみにちつとも変顔じゃない。

私の方がもつと変顔できる！

桜の方がもつとすごい。犯罪的ですらある。

ふう、と一息ついて

「方法がまずった」

言った。

聖を抜かした一同、いつせいに相槌。

「何で？あれが正解じゃないの？違う？」

意外な反応だったのだろう。

うるたえた様子でみんなの顔を見回している。

その表情は100点だと思って提出したテストの答案が、50点の
採点だった時と同じくらいの狼狽。

中の下ほどのうるたえか。

「もつと方法はあつたさ」

アンプを体育館のステージまで運び終えた八神が、車まで戻って来
た。

「重いな。台車ねーの？」

肩と首をグリグリ回しながらに股で歩いている。

「ん？どうした？」

八神がキョトンとした顔をして立ち止まる。

海が機材を運び出す手を止め、何かしら考え込んでいたし、私もタムタムを抱えた突っ立ったままだったからだ。

「八神はどう思う？あの夜、他にどんな方法だったらあのギャル達をどうにかできた？」

私達も同じ質問を投げかけられたのだ。

全員作業を止め、その場で考え込んだ。

しばらくの間。

そしてまず海が口を開いた。

「ステージから叫ぶ。やめろって」

「そんなん、あんな盛り上がってたらかき消されちゃうじゃん」
次が私。

「オーナーが誰かに頼んで警察を呼ぶ」

「そんなまどろっこしい事してたら、あいつらとっくに孕んでるよ」
そして八神。

「とりあえずG I Gが終わるまで待つて、後で締め上げる」

「要と同レベル」

最後に桜。

「無視する」

「っざけんな」

惨敗。

「ほら、結局あの時はああするしかなかったんだよ」
勝ち誇った顔で胸を張る。

「さて仕事仕事！ほら要、早く持って行きい」
おおっと、何も言い返せない。

「ほら、海も。次は何？」

聖がきびきびと海に指示しているのを後ろに、入り口の段差に足を掛けた。

「あれ？これフェンダーじゃん」

聖の声が聞こえた。

「あたしのリッケンバッカーは？」

「うつせーな」

海の本気でうざい感爆発の声も届いてくる。

軋む板床の上を歩いていると、八神と聖の会話が聞こえてきた。

「大体おめーにリッケンなんて贅沢だったんだよ」

「えー、いいじゃん！あたしあれ好きだし」

「生意気だな、ギター暦半年のくせしてよー」

「まずは形からじゃん？」

「まずは腕からだ」

「んだってー。とりあえずフェンダーはやダ。安いもん」

「馬鹿いつてんじゃねーよ。音は値段じゃねえ。フェンダーは素人には使いやすい、いいメーカーだ」

「けっ！」

声が途絶えたと同時に、二人分のドタバタした走る足音が近づいて来て、そのまま通り過ぎた。

ステージには既にアンプが四つ、エフェクターやフットペダル等の機材、海のドラムセットが半分ほど運び込まれていた。

組み立ては海がやるだろうし、私はタムタムをテキトーなアンプの上に置く。

「おい要、そこ不安定だから床に置いた方がいいぞ」

「うん」

聖もギターを奥の壁に立てかけているところを八神に注意される。倒すような置き方すんなって。

三人でぶらぶらと歩きながら、またハイエースまで戻った。

これで三回目の往復だ。

外へ出ると、秋とはいえまだまだ日差しが眩しかった。

海が車から降りて、大きく背伸びしている。

その隣では、桜が自分のベースを大事に背負うところだった。

「これで全部だなー」

「うちは準備OKだよ。」

桜が嬉しそうに海の方に振り返る。

「見りゃわかるよ」

「・・・・・・・・」

「分かったよ！そうだな、準備万端だな！」

むくれる桜。

海も大変だなあ、しみじみ思う。

「これで最後だから、みんなで運んでくぞ」

気を取り直して、海は私達にそう言った。

それぞれ身体に見合ったサイズの機材や楽器を手にとると、そろそろと再びステージに向かって歩き出す。

体育館の中頃辺りまでたどり着いた頃、

「そっぴやこの機材、どっから借りてきたんだ？」

八神がそう問いかけた。

「そうそう、私もそれ気になってたんだよね」

何ともナイスなタイミング。

ほんとに私もちょうどその事を考えていたところだったのだ。

ハイエースはまあ友達とか知り合いに借りてきたのだろう。

伊達に18年間この街で遊んできたわけじゃない。

海の顔の広さは尋常ではなかった。

「どうしたの？ライブハウスだけじゃなくて、スタジオとかも私達には使わせてくんなかったのに」

あの後、出入り禁止になったのはライブハウスだけじゃなかったの

だ。

別に練習するだけのスタジオのくせに、
へ他のバンドとモメゴトを起こしかねないから
だそうだ。

どんだけ危険人物だ。

先頭を歩いていたら桜が顔だけ振り返る。

一瞬何か言いたそうだったが、そのまま海のそばまで移動するだけ
だった。

「え？それは・・・あれだよ」

私の隣で海が口を開いた。

「まあ、色々な。ちよつとしたコネがあつたんだ」

何だか歯切れの悪い物の言い方。

「コネって？俺も知つてるところか？」

八神の問いが私の頭上を通りこえていく。

八神がこう聞くのも分かる。

うちのバンドの創設者は、海と八神のふたりだったと言うし。

一応バンドの活動は、最初からふたりで相談しながら今まで進めて
きたのだ。

「あー・・・いや知らないかな。市内じゃねえんだよ。地元の方
で借りてきたから」

「地元？鎌倉でか？」

海と桜の地元は鎌倉だった。

そのいいとこの子供たちが通う金持ち専用みたいな高校、

《私立陽鳳学園》に通っているのだ。

「ん、まあな」

「何て店だ？」

「いや、店じゃねえんだけどよ。おい桜。重いもの運んでる時にチ
ュッパチャップなめるな。もし転んだらアブねーだろうが」

「ふーん、そうか」

納得したのかどうかは知らないが、八神はその話しはそこでもう充

分な様子だった。

私もそれで何となく話しが読めたし。

多分この機材は、桜の家の私物なんだろう。

どうしても機材の調達が困難だったのだと思う。

いちお、こちらは親には頼らない方針で活動しているし、今更親に泣きついて貸してもらいました。

なんて言えるわけもない。

正午。

搬入を始めてから二時間弱。

やっとこさステージの上は「体育館」から「ライブハウス」へと変貌をとげた。

私達は一息つくため、とりあえず食事に行くことにした。

帰ったら、早速練習を始める予定。

ここ一ヶ月、全員があわせる機会がまるでなかったから。

今日、明日の二日間で本番に間に合わせなければならない。

私達は、体育館を後にした。

「いらつしゃいませ〜！こんにちは！」

この挨拶はどこでしょう？

そう、マックでした。

学校をでて、通りをはさんで少し登ったあたりにあるマック。

昼休みなんかにはちよくちよく利用する、こちら定番の休憩所だ。

今日は土曜日。

買い物に來た家族やら、若いカップルなんかで店内は混み合っていたし、レジも行列ができていた。

最近はや100マックなんてキャンペーンをやりはじめ、ますます

低価格戦争の泥沼にはまりつつある印象だが、貧乏な高校生にはありがたい泥沼だ。

ごたぶんには漏れず、うちらもそれぞれ¥300程度の注文。メニューを眺めて思ったのだが、最近はスマイル¥0はなくなったのかな？

「あとスマイルひとつ！」

隣のレジでは、大学生といった感じの少しふっくらとした店員さんに向かって、桜が堂々とそう注文していた。

「にこっ」

とまどう店員を尻目に、自分でにっこりと笑顔を作っている。後ろを振り向くと、聖も満面の笑顔で私を見つめている。どんなボケだ。

私が注文を終え、列からはずれる。聖と、桜の後には海が注文している。

「スマイルひとつ」

真っ先に海がそう言ったのが聞こえた。なんて迷惑な奴らだ。

混雑のため、全員の注文が揃うまで少し時間がかかった。

二階にあがると、フロアは満席状態。

その時ちょうど家族連れが席をたつたため、五人分の席は確保できたが、タイミングがずれてたら今日は持ち帰りになっていたとこだ。

席に着き、それぞれ自分の昼食をとりはじめた。

私も、新製品のチキンサンドにかじりつく。

待っただけあって、作りたて。ほかほかのサクサクだ。

この時だけは、いかにジャンクフードでもおいしい。

「あー、変な人だっ！」

どこかの子供がうちのテーブルに顎をのせ、誰にともなくこう叫んだ。

4、5歳といった感じの男の子。

誰の事を言ってるのか。まあ、海だろうが。

「何だ？誰が変だった？」

一番そばに座っていた海が、男の子の額に自分の額をこすりつけている。

「お前だー」

子供も嬉しそうに海のほっぺたに指を押し付ける。

「あとお前と、お前と、お前だー」

順番に、桜、聖、八神を指差していく。

他の客がくすくす笑い始めるのが聞こえる。

「何だ？こいつ、親はどこだ」

と八神。

「あたしのどこが変だった？」

「うちも海みたいに変じゃないやい」

女衆も口々にブーたれる。

「お前おっぱいがないじゃん！お前は変な顔」

「はあ？お前だってちんこちっせえだろうが！」

「鼻水垂れてる奴に言われたくない！」

をいをい……

何を子供相手に……

こいつらとどこか出かけるといつもこうだ。

大体、見た目からしておかしいのだ。

ロン毛の銀髪だとか、へらへらした小娘、目つき悪い黒髪女、がた

いのいいすかし顔とか。

単体では苦にならないルックスだが、揃って公共の場にでると、やたらと無駄に目立つ。

どこにいつても、まず大人には避けられるし、子供には馬鹿にされるか泣かれるかの二択だ。

はつきり言って、見た目がまともなのは私ひとり！

これはけっして誇大ではありません！

ひとしきり子供と騒いだ頃、トイレから出てきた母親らしき女がこの現場に気づき、風のように子供をかつさらって店を出て行った。

「くそ。覚えとけよ」

舌打ちしてこう言ったのは、八神だった。

うおい！いつの間にお前もキレてんだ！？

食事も済み、壁掛け時計の針はPM12:40をさしていた。

「さて、そろそろ戻って練習するか」

海からこう切り出してきた。

「そうだね」

私はそれに激しく同意した。

「えゝ、まだ早いよゝ」

とこねるのは桜。

ふざけんなっ。

こっちはさっきおまいらが騒いだせいで、30分間も好奇の目にさ

らされてるんだっ。

「桜、今日は早く終わらせようよ」

おっ、ナイス聖！

これには桜もしぶしぶ納得するしかない。

桜は何故か聖を実の姉のように慕っていた。

「今朝見たんだけど、今日は午後から雨が降るらしいんだ」

珍しく聖の口から時事的情報が出たきた。

彼女は学校や遊び以外のプライベートでは大体バイトに入っているため、そういう情報には疎い方なのだが。

「え？雨降んの？」

と、海。

「何だ、今日は早く終わったらちよつと乗りに行こうかとおもったんだけどなあ」

ぶつくさ呟いている。

どうやら今日は大きい波に乗るテンションじゃないらしい。

「あれ？八神君、バイクできたんでしょ？雨平気なの？」

ふと気になって、私は八神に尋ねた。

「ん？ああ、レノの店に預けたからな。単車は濡れねーと思う。ま、降り降ってたら電車で帰るよ」

レノ、とは八神の友達だ。

高校には行かず、バイク屋で働いている子で、私も何度か会ったことがある。

頭の回転の速い、いい子だ。

「ま、とりあえずもどろうぜ」

みんな八神の言葉について、マツクを後にした。

その日の練習はグダグダだった。
と言っても、主に私が、だが。

「おい、要。お前ちゃんと詩い頭ん中いれてきたのかよ？」

不機嫌そうな海の声。

「歌詞を理解しろ。覚えるだけじゃダメなんだよ。唄うな。表現しろ。何度も言ってんだろーが」

「ごめんなさい」

私もそれに関しては謝るしかなかった。

「もう一度、頭からだ」

そんな事が十回も続いた。

私は汗だくになっていた。

他のみんなも、いい加減この曲に飽きがきているのも分かった。

ほんと、申し訳ない。

「少し休憩だ」

海の声と共に、一斉に楽器を降ろすと、それぞれ座ったり、ステージから降りたり、休みやすい場所へ移動を始める。

私は気落ちしていた。

と同時に、ものすごいイライラが募っていた。

この場合、頭では分かっているけど、それが出来ない自分への不満ではなかった。

海への怒り。

確かに、出来ない自分への怒りもなくはない。

だがそれ以上に、何故分かってくれない？、不満の方が大きかった。イラついた。

実際問題、私は下手くそだ。

歌が、ではない。

海の言う、表現として、がだ。

「お前は赤を見て赤だと言う。だがそうじゃない。赤にも色んな色がある。エンジだったり、紅色だったり、紫がかったり。お前の赤は赤だけなんだよ」

海が言うにそういう事らしい。

それは分かる。

だが、分かってても出来ないのだ。

努力はしているさ。

でも、どうしても出来ない。

考えてもみて欲しい。

私は、つい半年前まではそこらへんに転がっている、普通の子高生だった。

歌は好きだったが、カラオケ位でしかまともに唄ったことなんてない。

ましてや楽器に合わせて唄うなんて、学校の音楽の授業や合唱コンクールでしかないような人間だった。

それを、ちよつと歌がうまいからって言って、いきなりバンドのメインヴォーカルに据える方がどうかしている。

結局、八神に誘われていい気になって、ふらふらOKだした自分にも問題はあるのだが・・・

いかんせん海は厳しすぎる。

私は爆発寸前だった。

「ほら、要。こつち来いよ」

八神が、さつき搬入した非常口から私を呼ぶ声が聞こえた。その声で、少し頭から血が下がった気がした。

「少し涼めよ」

そう言われて初めて気がついた。

雨だ。

体育館は、雨音をよく伝える。

この広い空間は今、激しい雨音で充満していた。

「ありがと、八神君」

差し出されたタオルを受け取ると、私は笑顔を強く心に意識しながら彼に会釈をした。

「すげえ雨だな。台風みたいだ」

今にも落ちてきそうな空を仰ぎながら、彼は呟いた。
風も強い。

ちようど反対からの風のため、この非常口には雨はかかっていなかったが、外を見渡すと、一面の木々が激しく揺さぶられている様が目に見え込んでくる。

「座んなよ」

八神に促がされて、私は彼の隣に腰を下ろした。

「すごいね、ほんと。嵐みたい」

「ああ」

どこから来たのか、破れたトタン屋根の破片がグラウンドの真ん中を通りすぎていった。

「お前、あんまり気にすんなよ」

私は彼の方へ振り返った。

彼の視線は外を向いたままだった。

「海もさ、お前が今すぐ出来ると思って言ってるわけじゃない。
だが、出来ないとも思ってるじゃない」

「……………」

「お前に意識して欲しいのさ。どうしたらいいかってのをさ」
「……………うん」

私はうつむいた。

八神に顔を見られなくなかった。

こんな泣き顔・・・

「できねえもんはできねえ。それは仕方ない。だが、絶対に出来るようになる。そう思っていれば、きっと何とかなるさ！」

ポンッ

八神の大きな手が、私の肩を優しく叩いた。

「・・・つけた・・・・・・・・・・」

私は思わず顔を上げた。

妙な耳鳴りがした気がしたから。
だが、八神も私の顔を見ていた。

「お前、何か言ったか？」

私はぶんぶんと首を振った。

八神にも聞こえた？

「見・・・つけた・・・・・・・・・・」

「まだだ」

八神が呟いた。

二人とも、背後を振り返る。

「あいつら？」

「じゃないみたいだね」

見ると、ステージ辺りで座っていた三人も、こっちを向いたり、辺りをうかがっている様子だった。

ゴロゴロゴロゴロ……

隣街の方で、稲妻が走るのを感じた。
それから少しの間の雷鳴。

「雷の音か？」

八神と目があった。

直感。

「多分、違う」

「おい！お前らも聞こえたのか！？」

八神が声を張った。

「ああ！」

海が同じトーンで返す。

ピカッ！！！！

また稲光。

私は怖くなって、中へ戻ろうと立ち上がった。

バリバリバリ・・・

「見つけた・・・」

バリバリバリバリ！！！！！！

ビクリッ！

私は身体を震わせた。

聞こえた。

今度はさっきより全然近く、速く、強い雷鳴。

その中に、確かに聞こえたのだ。

八神も立ち上がった。

「行こう」

八神が私の腕を掴んだ。

「見つけた！！！！！！！！！！」

ゴウン!!!!!!!!!!!!!!

頭が張り裂けんばかりの、悲鳴にも似た叫び。
金属の擦り合わさるような不快感。
真上で起こった雷鳴。

そして走ったのは、すさまじい電気の衝撃だった。

「きゃあああああああ!!!!!!!!!!」
私は思わず叫んだ。

全身を、初めて味わう感覚が駆け巡る。
引き裂くような痛み。

痺れ。そして血が沸騰するのではと思うほどの熱。

体育館中を、青白い電撃が狂い踊っている。
電撃。いや、これはプラズマだ。

ふっ・・・

一瞬の間。

電撃が途切れた。

「見つけたぞ!!!!!!」

再びあのおぞましい叫び。

次の瞬間、

私は目の前の体育館と、大好きなみんな、そして自分の身体がいつ
ぺんに爆発するのを目撃した。

続く!!!!!!

第四話「目覚め」

青。

青だった。

灰色、黒。

額縁の中に納まる青。

それが「空」だと気がつくのには、しばらくの時間が必要だった。

雲ひとつない晴天。

高く、抜けるような、澄みきった空。

青を切り取る額縁は、そびえるビル街の群れ。

私は、硬いアスファルトに寝転びながら、それを眺めていた。

身体が痛い。

しばらくして、私にそんな感覚達が目覚めてきたのを感じた。

ここはどこだ？

頭はまだ動かない。

脳裏に甦るのは、私を励ましてくれた八神の優しさ。

それだけだった。

眠い。

私は、もう一度だけ目を瞑りたかった。

視線の先にある額縁の中、高い、高い場所に一羽の鳶が迷い込んできた。

空。

「空……だ」

私は呟いていた。

声は出る。

そう意識できた。

そう意識した途端、私の頭は急速に回転を始めた。

空・ビル・鳶。

ここは……

外

だ。

「えっ!？」

私は上半身だけ跳ね起きた。

まだまだ鈍い五感を最大限に活用し、私は状況の把握だけを最優先に辺りの様子を探った。

目の前には長く走る、二車線の大通り。

私はそのうち、右側の車線に座っていた。

すぐ先の交差点では、青信号が点灯している。

視界の隅にかすかに映る植え込み。

中央分離帯だ。

少し遠くに見える並木。

歩道。

その脇にそびえるビルの群れは、眼前の道路見守るように遙か先まで連なっていた。

私はここを知っていた。

「駅前通り？」

雨海市の中心街。

神原区の中央を南北に縦断する、主要な幹線道路で、雨海市で最も交通量の多い道だ。

丘の麓と港の間に位置する雨海駅前から始まり、界政高校の前を通り丘の頂上に達する。

そのまま私の住む住宅街を通って丘を下り、そのまま国道と合流する。

私が眠っていた場所は、そんな通りの本当に中心地。

駅前から500m程進んだ、企業や飲食店が最も集中する、日中最も人が往来するようなところだったのだ。

「嘘!？」

私は飛び上がった。

ここは車道の本当に真ん中なのだから。

「うわわ・・・! ひ、ひかれる」

慌てながら歩道まで移動を試みる。

なんだか身体が浮ついて、うまく歩くことができない。
ふらふらと蛇行を繰り返す。

「うえっ!」

何歩か進んだところで私はバランスを崩し、私は再びアスファルトへと倒れこんだ。

頭だけは覚醒したものの、私の身体はまるでその命令を受け付けなかった。

やばい

それだけが脳裏に繰り返される。

さっき信号は青だった。

今は車が来ていないみたいだが、いつばかみたいな猛スピードで突っ込んでくるか分からない。

私は本気で焦っていた。

何とか立ち上がって歩道へ避難しなくては。

焦りつつ気持ちとは裏腹に、身体はまだ眠りの中にいるようだった。
やばい!

私はもう一度目だけで辺りの状況を確認した。
車道に車はまだない。

まだいける！

私は再び身体に力をいれる。

今度は多少だが、動けるらしい。

ゆっくり立ち上がると、よろけながら歩道を目指した。

「はぁ・・・はぁ・・・」

何とか歩道までたどりつく。

肩で息をしながら街頭の柱に手をつき、何とかなんとか生き延びた事を自覚できた。

「まじでやばかったし・・・」

心臓に手を当てる。

鼓動は早く、私の身体中を血潮がかけめぐっているのが分かった。そのまましばらく私はその姿勢を保っていた。

ようやくドキドキが止まり始めた頃、少しだけ周りにも注意を払えるだけの余裕が出始めた。

さっきまで私がいた場所、車道の上に目をやった。

まだ、そこに車が走ってくる様子はない。

信号は、今黄色になったところだった。

歩道には、通行人の姿はない。

「よかった」

ちょうどタイミングが良かったらしい。

普段なら土曜のこの時間、確かに歩道に人はまばらだ。

ここから少し駅側へ下ると、デパートやらショップやらと、休日の人がごった返す街に様変わりするのだが、ここらまで来ると落ち着きが生まれる。

が、その分駅へ向かう車はこの道へと集まってくるのだから。

「ふう……」
一息つく。

そこで気がついた。
普段車道の脇には違法に駐車してある車がずらーっと並んでいるものだ。

確かに人は少ないが、大通りなりの人口密度はあるはずだ。

それがなかったのだ。

一台の車もない。
誰ひとりとして人もいない。

辺りは、風の作り出す音以外は全くの無音。
静まり返っていた。

異様だった。

無意識に私はスカートの左ポケットから携帯を取り出した。

好きなブランドのロゴをジャケットにはめ込んだ、お気に入りの二つ折り携帯。

ワンタッチで画面を開く。

電波がない。
圏外だ。

「うそぉ。今月ちゃんと振り込んだじゃん。なんだよ……ん！？」

そこで気がついた。

携帯は月曜の午前を示していた。

「二日間も・・・？寝ていた・・・？」

それは、あの体育館にいた日から、二日後の月曜の日付だったのだ。

路上。しかも車道に二日間！？

おかしい。絶対おかしい。

きつと携帯がぶっ壊れてるんだ。

電波ないし。

絶対に何かおかしいんだ。

そうだ、これは夢だっ！

きつと夢よっ！

路上で二日間寝て過ごしたという夢なのだ。

じゃないとこの状況は説明つかないだろうが・・・！

私はもうそう確信していた。

ええ、確信しましたとも。

やっぱね、夢なんですよ。

夢ってのは、深層心理のイメージなんですよ。

イメージが脳内でヴィジュアル化されてみるのが夢という事なんですよ。

ええ。

私はイメージが乏しいんですね。
想像力がないんですよ。

だからなんですね。

街のイメージはあるんですよ。

街は。

でも、街だけなんですよ。

人とかねー、車とかねー、音とかねー、

そういうのは難しいんですよー。

人はねー、たくさん居すぎて細かく想像できないし。

車はあんま興味ないから、あってもなくても同じだし。

音はねー、これもたくさんありすぎるからねー・・・

ひよおおおー！

スカートの裾が風にたなびく。

あつ。

風はね、イメージ出来るんですよ。

自然なものですからねえ。

ひよおおおー！

「あいたつ！」

さつきより少し強い風に飛ばされてきたらしい。

木屑みたいなのが私の頬に直撃した。

痛い。

小さい木屑だったが、なんかひりひりする。

私は歩きだした。

とりあえず、歩こう。

どこに行こうか……

あんま考えてない。

でも、なんとなく行く方向は決まっていたような気がする。

無人のオフィス街。

普段は何故かFMラジオが大音量で流れている証券会社の電光掲示板。

ビルの谷間、やたらと店内放送の激しい薬局。

かなりたてる正義を掲げた街宣車。

こう改めて考えると、オフィス街とはいえ街には色んな音があふれている。

人の歩く音。車のエンジン音。信号の警告音。

普段、無意識に囲まれている音。

それがない街。

気持ち悪かった。

長く緩やかな坂を上り続ける。

いつもなら、この時間は超満員の牛丼屋チェーン店。

数百メートルに渡って横断がないため、利用者の絶えない歩道橋。

誰も居ない街。

私は歩き続ける。

向かう先は学校。

確かに私はそこにいた。

明後日から文化祭で、バンドの練習してて、
聖がいて、桜がいて、海がいて、

八神がいた。

海に怒られて、落ち込んで。

八神が慰めてくれて・・・

あそこに戻ろう。

もし携帯が壊れてないなら、今日は文化祭の当日だ。

きっと皆いる。

皆、文化祭にいるはずだ。

街に人が居ないのは、きっとそのせいだ。

ポタリ・・・

私は足を止めた。

雫が、私の足元を濡らした。

ポタ、ポタ、ポタ・・・

そんなはずないのは分かってる。

きっと誰もいない。

どうしたらいい？

ここはどこなの？

何で誰もいない？

あの日、雷に打たれて、気がついたら道路に寝ていて、

起きたら誰もいなくて・・・

ここは・・・

きっと天国。

私は、きっと死んだんだ。

きっとそうだ。

だから誰もいないんだ。

ポタ・・・ポタ・・・

止めどなくこぼれる涙。

誰も居ない街。

私の心は張り裂けそうだった。

どうしていいか分からない。

私はその場にしゃがみ込んだ。

嗚咽が止まらない。

息が詰まる。

死んでいても、こういう時は苦しいもんなんだ・・・

ちょっと面白かった。

また風の音が聞こえた。

ビルの谷間を吹き抜ける音。

鋭く甲高い風の音。

私はしばしその音に耳を奪われていた。

「・・・・・・・・・・」

タタタ・・・

私は顔を上げた。

タタタタタ・・・

音が段々と大きくなる。

すぐ目の前の路地からだ。

足音。

小走りの走る足音。

「人？」

人がいる？

私の身体は緊張に固まる。

人がいた？

やっぱりここは私の街なんだ。

たまたまタイミングで人がいなかったただけなんだ。
人がいるんだ。

でも、誰だろう。

この足音は、きっと私と出くわすだろう。

私にでくわすこの足音の主は誰なんだろう。

緊張が私を支配する。

私の脳裏に浮かんだのは、

「見つけた・・・」

あの声だった。

足音がさらに近づく。

次第に大きく、はつきりと私の耳に届いてくる。

私は立ち上がった。

足音は今、路地を抜けようとしているところ。

無意識に身構えていた。

タタ！！

足音が路地の出口に差し掛かった瞬間、それはクルリと向きをかえ、私の方へと向かってきた。

ガスッ！！！！！！

飛び出してきた黒い影。

私はすぐに避けようと体重を移動させる。

緊張のためか、反応が鈍った。

よろける私。

影の方も、私を避けようとしているらしい。

が、あちらもバランスを崩している。

影は、私の身体を思い切り跳ね飛ばした。

「うぐうつ！」
「かはっ！」

再び路面に倒れこむ私の耳に、無理矢理に息を吐かされた時の音が聞こえてきた。

肺が押し付けられ、息が吐き出される音。
一緒に漏れ出る声。

この声は・・・

「いつ、たっ！！！！」

私は瞬時に顔を上げた。

影は、胸の辺りを押さえていたが、すぐに私に目を落とした。

視線が絡む。

「聖！？」
「要！？」

続く

第五話「再会」

思いがけない遭遇。

私の目の前には、ぶつかつた胸を押さえながら私を見下ろす聖の顔。驚きと嬉しさが交錯したような、キョトンとした半笑い。きつと私も今そんな表情を浮かべているのだろう。

「聖・・・」

私は立ち上がろうと地面に手をつく。

聖の手が私の手を掴み、引き上げる。

「大丈夫？要」

その声は不安そのものだった。

「あ、聖・・・」

聖の手助けで立ち上がると、彼女の顔がすぐそばにあった。

私は、彼女の名前を呼ぶことしか出来なかった。

「えと・・・」

何を話していいのかわからなかった。

「えつと・・・」

私がかもごもごしていると、

「要・・・会いたかった」

聖が口を開いた。

「え？」

思わず私は聞き返した。

普段の聖からは想像もつかない台詞。

「ずっとどこにいたのさ？」

彼女の目には涙が溜まってる。

「探したんだよ・・・ずっと・・・」

「聖・・・」

呟いた途端、私は聖に抱きしめられた。
震えていた。

私も彼女の背中、そして頭に腕をまわす。
私は目を閉じた。

彼女の気が済むまでこうしていよう。
私も目を閉じた。

どのくらいこうしていただろう。
ずっと立ったまま。

聖は私の肩にもたれかかったままで、さすがに私にも限界が訪れた。
「聖・・・座ろうか」

聖も顔を上げこくりと頷いた。

彼女の目は赤く、少しはれぼったかった。

オフィス街の中には、必ず公園があるものだ。

私は、この先の小さな交差点を曲がったところに、ちょっとした公園があるのを知っていた。

晴れた気持ちのよい日なんかは、OLやサラリーマン達がそこで昼食を食べる。

私は聖をそこへ誘った。

噴水とか、そんな上等なものは何一つない小さな公園。

大きな木の木陰になっているベンチを選び、私は聖を座らせた。
公園の入り口には自販機があった。

「何か飲もうか」

私はジュースを買いに行こうとした。

「あたしも行く」

背後で聖がそう言った。

少しは落ち着いたらしい。

声に力があつた。

歩きながらブレザーのポケットに手を突っ込む。

普段、私は財布をバッグに入れていた。

が、目覚めた時私はバッグを持っていなかった。

その代わり、あの日マツクのお釣りを確かポケットに入れたの思い出したのだ。

小銭をポケットに突っ込むというのは男性がやること。

私はいつもそう思っていたのだが、あの日はなぜかポケットにしまっていた。

たまには良い方に働く偶然ってのもあるもんだ。

自販機の前に立つと、私は500円玉を滑り込ませる。

「何がいい？」

振り返ってそういった途端、

チャリン！

勢いのよい金属音が聞こえる。

不審に思いつつ、もう一度同じコインを入れてみる。

チャリン！

再び落ちてくる。

見ても、旧硬貨が使えないタイプ、というわけではないらしい。

「あれ？」

私が少し離れてその販売機を見回していると、

「あ、これじゃん？」

聖が刺さっていないコードの先っちょをぶらつかせて見せた。

「何だよ！抜けてんのかよ！？」

「えーと、コンセントは・・・」

聖が裏へ回る。

「あー、あつたあつた」

少ししてから、自販機に生命が灯るのを感じた。

冷却装置独特の稼動音が聞こえてくる。

「付いたよ！」

私は聖に聞こえるように少し声を張って言った。

「お、ほんとだ」

回り込んできた聖も自販機の明かりを覗き込み、嬉しそうに言った。

再度500円玉を投入する。

今度こそ平気だろう。

チャリン！

そんな期待は一瞬で打ち砕かれた。

「何だよ！？」

「何だよ！？」

二人の声がシンクロする。

少し吹き出す。

聖が私を見る。

その目には、もう先ほどまでの弱々しさはなかった。

ほんの少しのきっかけでいいのだ。

私はもう一度だけ500円を投入することにした。

少し乱暴に、詰め込むようにして。

チャリン！

私は聖に頷いた。

聖も私に頷いた。

ガタン。

流れを全く無視し、再び蹴りを放つ。

「今度は？」

しらっと言う。

「えつとね。・・・今度は・・・ネクターだ・・・」

今度はあの有名な不二家のネクターが転がり落ちてきた。

「ネクター・・・それもないなあ」

聖がしみじみと言う。

「まあいいや。要、どっち飲む？」

「切り替え早っ！？」

「だって、出てきたもんはしょうがないじゃん」

「そうだけどさあ・・・」

「いいじゃん。もう」

そう言っで私の手の中からネクターをチョイスした。

「あれ？これ、冷たいじゃん」

驚いたように言う。

「あ、そういえば！？」

自販機から出てくるものは冷たくて当然。

そんな先入観からか、私は取り出したジュースが冷たいことに全く違和感を感じてはいなかった。

やっぱりおかしい。

何かが違う。

この自販機は、さっきまで電源が入ってなかったのだ。

「やつは何かやばいんだよ。ここ」

ベンチに戻ると、聖がそう言った。

私も彼女の隣に腰掛ける。

また風が通りすぎた。

大きな木が風になびく。

爽やかな音が私達のベンチを包み込む。

「やばい？」

私は聞き返した。

「うん」

私の視界の中に、聖が長い足を組みかえる仕草が入ってきた。

「ねえ、要。あんたはいつ目を覚ましたん？」

「ん、ついさっきだよ。まだ一時間位しか経ってない」

「なんだ？そうだったの？」

びつくりした表情で私の顔を覗き込んできた。

「じゃあ、まだ今の状況は全然分らないんだね。そっかあ」

「聖も、私みたいにどこかで寝ていたの？」

「そうそう。私もね。あんたはあの通りの近く？」

「むしろあの通りのど真ん中・・・」

私はいかにも「すごいでしょ」といった雰囲気を出した、尻すばみの声でそう答えた。

「へー、そっか」

私の思惑に反して、彼女の声は全く驚いた様子はない。

「聖は？」

「あたしはあそこ。雨海スタジアムの中」

「え？雨海スタジアム？」

「うん。ピッチャーマウンドの上」

「嘘！？」

「本当だよ」

「いつ！？」

「一昨日」

「マジで!？」

「そうだよ。マジできつかったよ。一昨日起きてさあ。どこに行っても誰もいないし。二日間ずっと街中歩き回ったんだから」

聖は少しだけ自慢げな語り口だった。が、その中にある不安感は隠しきれてはいなかった。

雨海スタジアム

雨海市を本拠地におくプロ野球チーム、雨海レイヴンズのメインスタジアム。その収容人数はおよそ4万人。今年は念願の日本シリーズ出場を決め、ちょうど一昨日、昨日の二日間、雨海スタジアムで試合が行われることになっていたはずだ。

「誰もいないの? やっぱ」

私は恐る恐る聞いた。

「いない」

キツパリとした答え。

「ってか、この街は雨海じゃないし」

「・・・え？」

・・・?

私は少しの時間、考える事にした。

聖の言う意味が理解できなかった。

雨海じゃない。

何が言いたい? 確かに、人がいないとか、電源の入っていない自販機のジュースが冷えているとか、おかしいことが起きている。

でも、聖が今言った意味は、私には理解出来なかった。

雨海じゃないとは一体何をさすのか。

じゃあここはどこなのか?

「この街、おかしいんだ」

聖が再び口を開いた。

今の私に出来るのは、聖の話を聞くだけ。

それ以外私がこの状況を的確に把握できる手段はなかった。

「何て言えばいいのかな……。この街は、この街しかないんだ。外に出ようとしても出れないんだ。あたしの知る限り、雨海しかないんだよ。それって、おかしいでしょ？」

「えっと、まだ少し分からないんだけど……。街に外がないって、どういう事？」

私は空を見上げた。空は青かった。目の前にはビル群がそびえていたが、右を向けば空はずっと先まで続いていた。

聖も私の意図に気づいたらしい。

「これは実際に体験してもらわないと分からないと思うんだけど……。こういうことかって言うよね、先は見えるんだよ。街の外は見えるんだよ。でも、進もうとするとさ、何だか変な感じで気が遠くなつて、気がついたらさっきの場所の真逆、街のちょうど正反対の場所に立つてるんだ。ループっていうのかな。うまく説明はできないんだけど……」

自信なさげにそう説明してくれた。

だが、さすがにそう言われて「へえ、そうなんだ」と納得するわけにはいかなかった。

「いや、すぐに信じるとは思ってないけどさ。でもやっぱ、そこらへんのところは早い段階で体験してもらった方がいいかも」

「うん、私もそう思う。聖には悪いけど、ちょっと信じられないかなあつと……」

本当に申し訳ないが、それが本音だろう。

この誰もいない街を、たったひとりで二日間も彷徨い続けたのほとても辛いことだったと思う。それは本気で同情するが、さすがにそこまで信じる事が出来ない。

「とりあえず、どんな感じか見に行こうか。その方が話し早いし」
私自身、聖を信じたいと思っていた。

だつたら、体験しに行こう。

むしろ、私は信じなくてはならない立場にある。
今私の前にいるのは聖のみなものだから。

彼女を信じなければ、私は何を信じればいいのだ。

「そうだね。案内するよ」

聖がそう言って立ち上がる。ネクターを飲み干し、空き缶をゴミ箱へ放り込む。

五メートルは離れているゴミ箱に見事に命中した。

「うん」

「とりあえずさ、この駅前通りの港に差し掛かる辺りから丘の頂上までが南北の範囲なんだ。んで、東西に限っては地図通りだね。ちょうど雨海が南北で半分に区切られたみたいな感じかな」

駅前通り。オフィス街の中心に戻ると、一番見通しの良い道路の真ん中へ出て聖がそう説明してくれた。

「きつちりと決まったボーダーみたいなのはあるの？」

「大体だよね。どこがそうなるのかは目には見えないし」

「そうなんだ」

「とえりあえず、ここからだ丘の頂上が一番近いから、そこへ行こうか」

「そうだね。学校もあるし」

「あゝ、学校ねえ。でも、あそこにも誰もいなかったな」

「そうなんだ・・・」

私達はまた駅前通を丘の上へと歩き始めた。

さっきまでは一人きりだった街。

ふたりで歩くだけで、こんなに心強いものだったなんて。
私は少しだけ、聖がいることの意味が分かったような気がした。

「はてさて……
……ふたりも逃げていたなんてなあ……」

私は立ち止まった。
聖も止まった。

いや、正確には立ちすくんだ、と表現すべきだろうか。

「まったく、いらないのまでぞろぞろと……」

あの声だ。

あの時間こえた、あの声だ。

金属の擦れるような、甲高くかすれた声。

妙な寒気がする。

悪寒というのか。

何かわからないが、全身にあらゆる不快感が走りまわるような感覚に襲われていた。

嫌な汗が全身を流れ落ちる。

足がガクガクして、立っているのもやつとだ。

聖を見ると、彼女の顔も真っ青だった。

きつと私の顔もそうに違いない。
聖と視線が交錯する。

「とりあえず、死んじゃえ」

絶対的な言葉の波動が、私の心臓を貫く。

“死”

この現在の世、普段いくらでも目にし耳にする事の出来る言葉だが、ここまで真実味を帯びた“死”に、いまだかつて出会ったことがなかった。

私は死ぬのか？

本気でそれを意識させられた。

瞬間だった。

真横にあったビルの一階から何かが飛び出したのだ。

それも、コンクリート製の壁面を打ち砕いて。

爆音。

ものすごい突風とほこり、瓦礫の破片が私達に襲い掛かる。

私達はそれぞれ頭や顔を覆うだけで精一杯な状態でそこに立ち尽くしていた。

そんなのお構いなしに、飛び出した何かが猛スピードで私達の方へ飛んできた。

ずしゃあああっあ！！！！

その何かが私達の目の前の地面に叩きつけられた。

「ぐ……うう……」

「ああ……」

「くそ……」

それは、いや、それらは人だった。

しかも、どこかで見た覚えのある人。

「や、八神!？」

聖が叫んだ。

「海君!？桜ちゃんも!？」

他の二人にも気づき、私も思わず名前を呼んでいた。

この三人が、重なるように吹っ飛ばされてきたのだ。
それぞれが起き上がろうともがいている。

「み、みんな!どうしたの!？」

全員が全員そろって傷だらけで、いつ気を失ってもおかしくない程
の出血だ。

私は三人に駆け寄った。

聖も同じ事を考えていた。

「くるな!!」

海がそう叫んだ!

「来てはならぬ……」

「お主たちまで奴に命を狙われることになるぞ……」

海に続いて、桜が呼吸に混じらせながらだが、そう言った。

「え？」

聖の声が漏れる。

瞬間のことで分からなかったが、よく見ると彼らは少し様子がおかしかった。

確かに顔は八神たちの顔なのだ。

だが、服装や出で立ちが違うことに気づかされる。

彼らは、甲冑を着ていたのだ。

しかも西洋の甲冑。まるでおとぎ話やゲームの世界に出てくるような、全身を覆う、大きな装甲を身につけていた。

それぞれ、八神が白、桜が赤、海が黒の鎧。

それはものすごい違和感だった。

私は、無意識に聖の腕にしがみついていた。

八神達の顔をした三人は、ゆっくりと立ちあがった。

私は一步後ずさりする。

聖も、私に引っ張られて少しだけ後退した。

三人が、ある方向に目をやるのが見えた。

私もそちらに視線を投げる。

駅前通りの中央分離帯の辺り、そこにある垣根が、少しだけ揺らいだような気がした。

私は目を擦った。

目の錯覚？いや、何かが違うような気がする。

私はその辺りから目を離すことが出来なかった。

揺らぎ。いや、歪みなのか。

そこには歪みが生じているように思えた。

そして気がついた時、その場所にはひとりの小さなピエロが立っていて、
いや、浮いていた。

続く！

第六話「未知なるもの」

そう。

明らかに浮いていた。

目の錯覚なんかじゃない。
それは浮いていたのだ。

そいつは、ピエロだった。

三歳児程度の背丈で、しかしそれとは比べ物にならないほど身体が
肥大していた。

膨れ上がった顔には目も口もなく、大きく、真つ赤な団子みたいな
鼻が真ん中に乗っているだけだった。

そして、本来右目がある場所には黄色い星。

腹は大きく突き出し。黒いベルトが深々と食い込んでいる。
手足も短く、それとは不釣り合いな、先の丸い大きな靴。

全身を包み込むピンクと水色のストライプのボディースーツ。

何より不気味だったのは、

ベルトの上に大きく開いた裂け目。

そこには無数の大きな棘がならんでいた。

それは、牙。

あれは、口だ。

私は戦慄していた。

何故かは分からない。

だけど、

そいつを見て、明らかに恐怖を覚えている自分を自覚出来たのだ。

「うざいんだよ。お前ら」

声が聞こえた。

あどけない子供の様な声。

その声が、いったいどこから聞こえたのか、私には分からなかった。

「ちょこまかとさあ。殺しちゃうぞ」

もう一度同じ声が聞こえる。

そして私は気がついた。

あれだ。

あいつが喋ったんだ。

あの、浮いているピエロみたいなやつが。

先ほどとはうって変わった声。

私はその声にさらに恐怖した。

何て声で話すのだ。

さっきまで聞こえていた裂けるような声のほうはまだマシだった。
今の声は、この声は。

そう。

一言で言えば、「訳の分からない恐怖感」。

あれは一体なんなのだ？

何故あんな声で、殺すなどと言える？

純真無垢な子供の声。

その中にはひとかけらの悪意も感じられない。

子供が、せっかく積み上げた積み木をなぎ倒すのと同じように。

遊び飽きたおもちゃを投げ捨てるように。

それはそんな声だ。

それは、日常に、何事もないかのように死が転がっているものと捉える者の口調にすら聞こえる。

少なくとも私にはそう聞こえた。

そして、私にはそれを受け入れる準備は何もなかった。

「クロム・ネフュー。貴様・・・」

海のような男がそう漏らした。

クロム・ネフュー。

それが、あの存在の名なのだ。

私はそう理解した。

「あれ？いたんだ。ははは、忘れてたよ。ごめんごめん」

クロム・ネフューと呼ばれたそれは、海らしき人物に向かって嘲るように吐き捨てた。

完全に興味のない表現。

嫌味や皮肉でもなんでもない。

その子供じみた声は、言葉の意味通りのニュアンスを私に伝えた。

「ふざけるな！」

桜らしき女が怒鳴りながら立ち上がる。

今にも倒れそうに、その足は震えが支配していた。

「大丈夫か？ ジュノー」

八神らしき方が、その女の体を支えつつゆっくりと立ち上がる。

「だまれハデス！ 私は戦士だ。情けは無用だ」

ジュノーと呼ばれた桜っぽい女が、ハデスという名の八神の手を振りほどいた。

やはり私達の知っている仲間達とは別人。

出で立ちのみならず、言動や行動がすでに違っていた。

「クロム・ネフュー！ まだ我らは死んではおらぬぞ！」

ジュノーが叫んだ。

だが、その声にはもう力がない。

「さて、要ちゃんに聖ちゃんだったかな。ようこそ僕の世界（夢幻空間）へ」

私の体は小さく跳ね上がった。

一瞬、集中を鎧の奴らに逸らせていた。

その隙間に突然入り込まれたのだ。

「そんなに驚くことないよ。可哀想に。震えているじゃないか」
子供の声は単調にそう告げる。

それは子供の声。

思いやりなどない、空っぽの声。

ただ言った。

そんな風に聞こえる。

「ひどいなあ。僕はこんな声だけど、それでも中身は君らの何十倍も生きているんだよ。ま、空っぽなのは本当だったけど」

私はさらに戦慄した。

何だ？何を言っただ？

今の言葉は、まるで私の感想に答えたみたいないないか。

「そうだね。君が感じた事は、僕にとっては少し不本意な事だったからね」

私はとつさに自分の口を押さえた。

聖が怪訝そうな目で私を見つめている。

私は、聖に目で訴えた。

私、今喋っていた？

聖にその意思是伝わっていない。

聖は更に怪訝そうな、そして不安そのものといった視線を私に送っていた。

「喋ってないよ」

私は思い切り振り向いた。

クロム・ネフュー。

私の心を読んだ。

「君だけのじゃない。聖ちゃんのも分かる」

そう言いながら、クロム・ネフューの体はこちらへと動き始めた。

「聖ちゃん。とても不安だね。混乱している。何を言ってるか分からないもの」

声と共に、突き出た腹に開く裂け目が大きく動いた。

笑っている。

「でも、これだけは分かるね。八神君、助けて。聖を助けて。かい？」

隣で聖の体が小刻みに震え始める。

「あれ？禁句だったかな？」

腹の裂け目はさらに大きな笑いの動きをする。

「貴様！いい加減にしろ！！」

突然、海つぽい男が声を張り上げた。

「聞く耳を持つな！あれが奴の作戦だ！！惑わされるぞ！！」

ジユノーも続いて声を上げた。

顔が私達の方を向いている。

私、いや、聖に言っているのだ。

「おい」

クロム・ネフューの前進が動きが止まった。

「誰がお前らに発言を許可した？」

その声からは何の感情も感じ取れない。
無機質な、子供の声だ。

「だまれ！貴様、この二人をどうする気だ！？」

「まずいぞ」

ハデスが、海みたいな男を止めた時にはもう遅かった。

「質問に質問で返していいと学校で教わったのか？質問しているのはこの僕だ！！」

クロム・ネフューの腹の裂け目が蠢いたと思った瞬間、
無数の牙が膨れ上がり、一直線にこちらへ伸びてきたのだ。

それも凄まじいスピードで。

ものすごい轟音と突風。

白い残像が私達の目の前を通りすぎる。

さくっ！

小さな音が私の耳に届く。

気がついた時には、海らしき男の身体は真っ白く光り輝く牙の群れ
によって、天高くつるし上げられていた。

私の頬に雫が垂れた。

それを拭った私の手は、真っ赤に染まっていた。

海のような男の身体は、無数の牙に貫かれ、空中にただ漂っているだけだった。

続く!!!

第七話「私たちの住む世界」

ここでまず、一つ目。

「人生とは双六である。」

と仮定する。

人生とは、全生命体が共同で参加する、非常に巨大な双六である。この双六は、場所・時・空間に関係なく、過去から未来までの全ての生命体が平等に参加を強いられるものである。

これは、全ての生命体の足元に常に存在し続ける、何よりも不変的な存在であり、何人もこの枠からはみ出すことのできない絶対無二の存在である。

唯一この双六が絶対ではないとするならば、それはこの双六が、時間の干渉を受け、常に膨張し続けているという一点のみである。

我々は、この世に生を受けた時点から、この双六に囚われ、命尽きるまで続けなくてはならない。

つまり、生がスタート。死がゴールである。

そして、この双六はスタートもゴールも一定ではない。個によって差異があり、その長さも同様に差異がある。

そしてここで、我々がこの双六の参加者の一人「駒」であるという事を一つの決定事項としておこう。

双六とは周知の通り、サイを投げて駒を進め、マスに止まりながらゴールを目指すゲームである。

そこで次に

「運命とはマスである。マスとは運命である。」
と仮定する。

マスは、双六には欠かせない、最も意味のあるルールである。

マスのない双六は、双六としての意義はなく、ただの線の書いてある紙に成り下がってしまう。

逆に言えば、マスが存在するからこそ、双六は双六であり得るのである。

マスこそが双六の醍醐味、マス自体が双六を成立させていると言っても過言ではない。

それだけ重要なポジションを秘めているのがマスである。

そのマスが、双六同様に初めからそこに存在するものであるという事が、更に重要な事象である。

そう、マスとは変わることなく常にそこに存在しているのである。

ここで、思い出して欲しいのが、我々がこの双六の奴隷であり、駒の一人であると言う事だ。

我々が参加するこの双六も、ゲームの双六同様に、決まったマスに沿って進んでいくものなのか？

答えはイエスである。

我々は、初めから決められたマスに沿って、この人生という双六を進めていく。

しかし、そこでの注意点は、この双六が人智の及ばぬほど巨大であり、今もさらに肥大し続けているという事。

我々が認識しようとも、決してする事のできない程、膨大な数のマスがこの双六の上には存在している。

いくら決められているとは言え、我々がそれを確認する事は不可能なのである。

であるからして、我々がどんなに認識しようとしても、それは全くもって認識できるはずもない、人智を超えた存在としてそこに横たわっているのである。

我々は、時に人智を超えた力によってもたらされる展開・結末を「運命」と呼ぶ。

我々は知らず知らずのうちに、初めから決められたマスを進んでいく。

そう、我々が進む道は、初めから決められているのである。それこそが「運命」

我々が偶然と思っている全ての事柄は、運命の上に成り立っているのである。

初めから用意されているマスは運命であり、偶然は必然なのである。

だが、全てが全てゲームの双六と同じなわけではない。

確かに決められているものではあるが、我々の前には無数に次のマスが控えているという事。
まず規模が違う。

そして最大の相違点は、
サイを投げて、出た目だけ進むわけではない。
という点だ。

「サイコロは努力である。」

これは簡潔だ。

我々が駒を進めるために投げるのはサイコロではない。
と、言うよりは1〜6の出た目だけ進めるというわけではない。

ここだけは、我々は止まりたいマスに止まることができるのだ。

が、それもただで止まれるわけではない。
やはりそれなりの条件が必要になる。

それは、個人個人の努力であり、裁量である。

あるマスが、仮に「東大に合格する」のマスだとする。

そのマスに止まるためには、「勉強する」という努力が必要になる。
逆に「勉強をする」努力をしなければ、「東大に落ちる」というマスに止まる。

それは決して6の目を出したら止まれるわけではないのだ。

これは単純な例であるが、端的に述べるとこういったことなのだ。

我々は初めから用意された、星の数ほどの運命の上を、取捨選択し、
努力し、挫折しながら進んでいく、
極めて高度な双六の駒なのである。

偶然と思われる全ての事柄は、全て必然であり、必ず意味を持って
存在している。

それは、我々の行動・意思、無数の要素を全て加味した上で現れる。
我々の人生は全て、成るべくして成るのである。

第八話「混乱と恐怖、満ちる」

血の雨を降らす。

その表現は、きつとこんな時に使われるのだろう。

海と思しきその男の身体中からは、異様なまでの出血。
まるで、身体中に極太の注射針を突き刺されたかのように、至る所から滝のように流れ出ている。

もはやその身体には力がなく、空中をだらりとゆらめいていた。

その身体の動きとは対照的に、多量の血液は激しく私達の全身を濡らしていく。

聖の顔が、服が。私の手が、髪が。
アスファルトが真っ赤に染まる。

生々しい臭いが辺りに充満してゆく。

鉄の臭い。

臓物の臭い。

人の臭い。

私達は上空を見つめたまま固まり続けた。
その間も、赤い雨は私達を容赦なく濡らしていた。

海らしき、いや、もう私の目にはその男が海にしか見えなかった。その身体は、白い牙に貫かれ、時折痙攣しながら、血を噴き出し続けていた。

「うん」

うめき声が聞こえる。

「う・・・あ・・・」

「う……あああああ……」

私の耳にはつきりと届いてくる。
ちぎれそうなうめきは、段々と悲鳴に変わってる。

「うわあああああああ！！！！！！！！！！！！」

「聖!!」

聖の身体が動いた。

後ろを振り返ると、彼女は一気に駆け出した。

「聖!!」

私も後を追う。

しかし、足場は大量の血液でぬかるんでいる。

聖は少しだけ走ったあと、その場で突っ伏した。

私も足をとられ、聖の上に倒れこむ。

「うわあああああ!!!!!!」

聖が倒れながら暴れだす。

私の身体をどこそうと、もがいている。

「うあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

聖の腕が、足が私の至る所にめり込む。

「いや!!!!!!いや!!!!!!いやあああああ!!!!!!!!!!」

彼女の蹴りを思い切り頬に喰らい、私の身体が少しだけ浮き上がる。

その隙に、彼女はするりと抜け出し、再び立ち上がろうと必死にもがく。

私も、痛みをこらえながら、彼女に追い縋ろうと必死だった。

赤い水溜りを跳ね上げ、ぬかるみにとられながら、私達は馬鹿みたいにもがいていた。

「ふははははっ はははははっ は……! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

もがきつつも、私の脳は微かに笑い声を認識した。

哄笑。

が、そんなことに構っている余裕はなかった。

聖はもつれながら立ち上がると、再び走りだす。

私も何とか後を追った。

でたらしめにはしりながら、彼女は道路脇にあつた喫茶店の中へと滑

り込んでいった。

がむしゃらに走り、入り口を目指して走る。

彼女がドアを閉めようとするその隙間に、私も間一髪滑り込んだ。

ガタン！！

重い木製のドアが思い切り音をたてて封鎖された。

はあっ！ はあっ！ はあっ！！！！

荒い息遣いがその空間を支配していた。

はあ！！！！はあ！！！！はあ！！！！！！

私も、何度も息を詰まらせながら、その音に耳を傾けていた。

二人とも、その場に座り込んだ。

とにかく呼吸を整えよう。

私はそう考えるだけだった。

息の仕方を忘れてしまったかのように、詰まりながら、必死で息をしていた。

聖も私の横に座り込みながら、テンポのない、乱れた呼吸音をさせている。

私は、彼女を見た。

顔色は、分からない。

恥も外聞もなく、服装はめちゃくちゃで、スカートも何もめくれあがっている。

とにかく全身が赤かった。

どす黒い赤にまみれ、肌も、ブラウスも、スカートも、下着も、タイツも、何もかもが普段見慣れない色に染まっていた。

私も同じような状態なのだろう。

彼女を見て、勝手にそう判断した。

それからしばらく、私達は一言も発さずに、呼吸をするだけだった。

どのくらい経っただろう。

きつと、ものの数分だったに違いない。

ずっとここに居るような気分になり始めた頃。

私達の呼吸が落ち着き始めた頃。

私達は、お互いに目を見合う事が出来るようになった。

「か、か、要」

聖が私の名前を呼んだ。

店内は仄暗かった。

アールデコ調の調度品でまとめられた、少しモダンな店内。

その店内を見回しながら、私は頷いた。

「そ、外。どうなった？」

聖の声は震え、どもり気味で、
すぐるように私に投げかけられた。
私に見ろというのだろう。

「し、知らない・・・」

私の声も震えていた。

お前が見ればいい。

私はそんな気持ちで返した。

聖は涙目で私を見つめている。

そんな目で見ないで。

私も泣きたい。

今にも泣き出しそうな気持ちだった。

すぐに私は目をそらした。

私は、自分の身体を思い切り自分で抱きしめた。

震えている。

大きく、ガタガタと。

熱かった。

身体中が熱くて、内臓からなにか、
全てが沸騰してしまうのでは
ないかという気にすらなった。

目をつぶった。

何なんだ。

何がどうしてこうなってるんだ。

私は心の中で叫んだ。

畜生・・・畜生・・・
全部こいつのせいだ。

私の気持ちは全て聖に注がれていた。

こんな奴と一緒にいたから・・・
ふざけやがって・・・
何て疫病神なんだ・・・
死んじゃえばいいのに・・・
いつもこうだ。この女といると、いつもこうだ。
畜生・・・畜生・・・畜生・・・畜生・・・畜生・・・

私の身体は憎しみでいっぱい、自分でもどうしようもない程に震えていた。

この場で思い切りこの女を蹴りつけてやりたい衝動にかられた。

このくそ畜生女が!!!!!!!!!!

私の前を、誰かが横切る気配を感じ、私ははっと顔を上げた。

見ると、聖が道路側の窓へと歩み寄ろうとしているところだった。

私はとっさに立ち上がった。

彼女と離れるのが嫌だった。

置いていかれるような気がして。

一人になるのが怖かった。

外から見えないように、私達は窓の真下にある席から、外を伺うことにした。

二人してテーブルの下に潜り込むと。

身体と身体が触れ合う。

聖の体温も、熱く上がっていた。

私達は恐る恐る、日のさす窓を覗き込んだ。

続く! ! ! ! !

第九話「風になる」

「はぁ・・・はぁ・・・」

荒い呼吸音。

時折その間に軽い呻き声が混じる。

身体が熱い。

私達は、最も大通りに近い窓際の席、そのテーブルの下に潜り込んだ。

赤く染まったお互いの身体が、その狭い空間でひしめき合う。

体中を、汗なのか、それとも海の血液なのか、分からないものが滝のように流れ落ちる。

木枠の窓から午後の強い光が零れ落ちる。

私達は、テーブルの下で互いに顔を見つめあった。

聖の顔は、どす黒い赤。

所々拭われ、元の白っぽい肌が浮き出ている。

唇は激しく震え、目には大粒の涙が今にも溢れそうだ。

「い・・・」

聖がくぐもった声でそう発音した。

「一緒に・・・」

私は頷きながら、彼女が言わんとしたであろう言葉を繋げた。

私達はもう一度頷き合つと、テーブルの両脇から恐る恐る、体を乗り出した。

もう一度だけ互いに目を合わせると、私達はのっそりと、顔だけを窓の外へ向けた。

無音。

何の音もない外の空間。

私達の目には、さっきまで目の前にいた一組の男女と、あの不気味なピエロ「クロム・ネフュー」が、激しく動き回る光景が映し出された。

戦い。

それは明らかな戦い。

何をしてるのかは分からない。

八神のような男と、桜のような女が、それぞれ片手に大きな鎌と、大きな盾を携えて、ピエロの周りを飛んだり跳ねたり。時折消えたり、そしてまた現れたりを繰り返す。

ピエロは二人の動きに合わせて、ついさっき海を貫いたばかりのあの触手にも似た牙を
時に早く、時にゆっくりと動かしている。

その様は、まるで飛び回るハエを振り払う、牛の尻尾のようだ。
無音で、私達からはまるで何をしているのかは分からない。
しかし、これだけはすぐに理解できた。

弄ばれている。

まるで相手になっていない。

二人は、激しく動き回ってはいるが、クロム・ネフューの数メートル周りからそれ以上近付く事はなかった。

五月蠅いハエを、軽く振り払っているだけ。

そんな光景だった。

「あつ！！」

私が状況を整理しようとし始めた瞬間だった。
聖が声を上げた。

捕まった！！

二人の体が、空中で触手に絡めとられる。
その瞬間前、私の目にはクロムの姿が一瞬消えたように見えた。
瞬間で、二人の死角に入り込み、カメレオンがハエを掴まえるかの如き素早さで絡めとったのだ。

テーブルの上に頭を伏せた。

割れたガラスが雨のように降り注ぐ。

頭上を、何かの塊がすごい勢いで通り過ぎていくのを感じた。

何かが壊れる音。 割れる音。 崩れ落ちる音。

様々な音が混ざり合い、私の耳を刺激する。

しばらくして、音が収まり始める。

最後に缶のような軽い金属音が店内に響き、そしてその一連の破壊音は店内から去っていった。

それを聞き届け、私は恐る恐る頭を上げた。

凄まじい砂煙が店内を覆いつくしていた。

先ほどまで、綺麗に整理されていた店内は見る影もなく、ひっくり返されたように荒れ果てていた。

そこには、鎧を着た男女が折り重なった格好で、元はオシャレなインテリアだった廃材に埋もれ倒れこんでいた。

[illegible]

「そう思わないか？」

「要ちゃん、聖ちゃん」

奴は、私達を見ていた。

何が起こったのか分からない。

いや、認識は出来る。

でも、頭がついていかない。
理解できない。

何が起きているのか、私は把握する事が出来ない。

が、それでもクロム・ネフューは私達に話しかける。

「ふふふ。。。全く、最初から隠れていれば、こんな痛い思いしなくてすんだのにねえ。ホント、馬鹿だよねえ」。

僕の力はもう前から知ってるのに。何でかかってくるかなあ？」

クロム・ネフューは、楽しそうに、そして実に雄弁に語る。

「本当に馬鹿だよ。三人とも。

その点、聖ちゃんも賢いね。すぐに隠れたもんね。要ちゃんも、ちよっと遅かったけど、偉かったね」

私は息を呑んだ。

何を言っている？何が言いたい？

先だ。

その先だ。

その先が重要なんだ。

奴は、私達を殺すとはっきり言った。

その奴が、なぜ私達を褒める？

何が言いたい？

私は、クロム・ネフューの言葉に全神経を集中させた。

「偉い、偉い」

クロム・ネフューは笑っている。

「でもね」

来た！！

私は軽く硬直した。
鼓動が高鳴る。

「嫌いだよ。そーゆーの」

鋭く、凍りついたナイフみたいに、奴の言葉は私の脳幹を貫いた。

絶望。

死。

私は直感していた。

奴が言葉に出す前に。

でも、覚悟は出来なかった。

なぜ？

なぜ私は今、死に直面しているの？

そんなの、不条理でしょ？

目が覚めて、いきなり人が消えて、不安で、寂しくて、でも聖と再会して。

これからどうしようか考え始めたのに、そしたらこれだ。なぜ、初めて出会ったあいつは、私達を殺そうとしているの？

何で？

私には分からないよ。

おかしいよ、こんなの。

絶対におかしいよ。

へたり込んでいた私は、お尻から腿にかけて生暖かくなるのを感じた。

「やっぱり……」

クロム・ネフューが囁く。

「殺す」

瞬間だった。

私のそばを、風が通り過ぎた。

いや、何かが通り過ぎた。

これからは、私の目の前で起こった事だけを伝えたいと思う。

私には、それしか出来ないから。

風は、私のすぐとなりで起こると、次の瞬間には店の窓を飛び越えると、クロム・ネフューの方へ向かって、一直線に疾走っていく。旋風が巻き起こる。

風が一步一步、地面を踏みしめる度に、その足跡には小さな旋風が巻き起こる。

クロム・ネフューが、風に向かって一本の牙を伸ばす。

それでも、風は空気の壁を突き破り、前へ前へと突き進む。

一秒後。

風と牙が大通りの路肩で出会う。

風は、胸元を支点に、クルリと真横に足を跳ね上げた。

軽く、鮮やかに回転すると、次の瞬間には、触手の上を、一秒前と
なんら変わらない速度で疾走る風の姿があった。

クロム・ネフューが何かを言った。
聞き取れない。

風は、グングンとクロム・ネフューとの間合いを詰めていく。

牙が、私の目前まで届いた後、先端を翻せて、元来た方向へと再び
伸びて行く。

しかし、遅かった。

風と牙では瞬発力が違った。

クロム・ネフューが風を牙の上から叩き落そうと、他の牙を伸ばそ
うとした瞬間だった。

ごっ！！！！！

鈍い音がこだまする。

スピードを全く緩めず、全体重をかけ、全力で振り抜いた。

聖の足が、クロム・ネフューの顔面を、真正面から蹴り上げた。

続く

第十話「天才対悪魔」

意外と地味な音がオフィス街に響き渡った。

湿ってくぐもった、不快な音。

クロム・ネフューの顔面は、ゴム風船が押さえつけられた様に歪み、聖の爪先がさらに歪みを膨らませていく。

次の瞬間には、クロム・ネフューの体は聖の足から弾き飛ばされていた。

本物のゴム風船の様に跳ねながら、国道を横切り、小さな醜い身体は反対側のガードレールに叩きつけられる。
それを見送りながら、聖の身体は空中で美しく弧を描くと、優雅にアスファルトに着地した。

私は、ゆっくりと喫茶店の残骸から立ち上がると、少しでも聖に近付こうとゆっくり足を踏み出した。
頭が回る。

ふらつく身体を必死で正し、私は崩れた喫茶店をやっとの思い出抜

け出した。

外気は思いのほか冷たかった。

一陣の風が私の身体を包み込む。

私の身体がそれだけ火照っていることに気付いたのは、風が通り過ぎててもなお、凍えたような心持ちが残っていた時だった。

ガードレールの前に倒れ伏したクロム・ネフューの身体が小さく動き始める。

私は、少しだけ全身が硬くなるのを感じた。

「ただの人間かと思ったら……」

聖の肩が一度大きく動くと、ゆっくりと足を開き腰を落とした。

「まさかこんな肉弾戦が出来るなんてね」

クロム・ネフューがガードレールの前に立ち上がった。

その顔には、先ほど聖の蹴りを受けた形跡など全く見られず、何事もなかったような元通りの赤鼻があるだけだった。

聖の背中が少し動く。
赤い塊がアスファルトに吐き出される。

「本当は、あんな蹴りは僕には当たらないんだ。ただね、少し受けてみたくなったから」

そういうと、ピエロの身体が大きく振動を始めた。

「僕に物理的な打撃は効かない。だけど、条件を合わせることは出来る」

見る見る間に身体が膨れ上がっていく。

膨れた肉塊には、物凄い速度でエンボスが刻み込まれ、私達がよく知っている、人間の肉体が作り上げられていく。
身の丈はゆうに2メートルを越え、広がる肩幅の周辺には、隆々とした筋肉がまとわりつく。

瞬きし、次に目を開いた時には、私達の前に立っていたのは、顔は元ののっぺりしたピエロのままなのに、肉体だけは筋肉の鎧に覆いつくされた、ボディビルダーも真っ青の筋肉ダルマと化したクロム・ネフューの姿だった。

「これで君と条件は一緒だ。これは、君みたいに物理的な戦闘が得意な奴とやる時の形態でね。ま、この姿になるほど価値のある奴は、そうはいないが。そういえば君らの世界の妖怪でも、この技を使えるのがいるみたいじゃないか」

声も身体に合わせ、低く野太く変化している。

「身体だけじゃなく、おしゃべりにもなったんじゃないか」
聖の声が聞こえた。

その声には、ふたりで喫茶店で震えていた時の怯えはなかった。
確固とした精神の現れ。

聖の精神は、既に戦いに入っていた。

「上等だ」

クロム・ネフューが微笑を浮かべた。様な気がした。

聖がアスファルトを蹴る。

同時に、クロム・ネフューも大きな身体を前に押し出した。

聖の方が速い。

クロム・ネフューが三車線の一車線目も通り過ぎないうちに、聖は筋肉ダルマの足元に滑り込んでいた。

スライディングの様な格好で、クロム・ネフューの足元に近付くと、聖はその脛に向かって鞭のように撓る蹴りを叩き込んだ。

しかし、クロム・ネフューの身体は微動だにしない。

腕を使い、逆立ちの形に身体を押し上げると、聖は一旦巨体の下から抜け出す。

普段の喧嘩なら、最初の足元への攻撃で大概は地面に倒すことが出来るはず。

一度倒してしまえば、あとはこっちのものなのだが。

聖が瞬間先までいた場所を、クロム・ネフューの大きな足が踏み潰す。

「どうした？そんな下らない蹴りじゃあ、僕は殺れないぜ？」

聖は、腕で身体を支えたまま身体を翻すと、クロム・ネフューの丁度死角になる位置。斜め後方に着地する。

体勢を整え、絶妙な反動をつけたハイキックをクロム・ネフューの側頭部に打ち込む。

鈍い音と共に、クロム・ネフューの頭が揺らぐ。

が、何のダメージもないかの様に、大きな掌が聖の足首をガッチリと固定した。

「捕まえた」

逆バンジーの如く、聖の身体が浮き上がる。

いくら聖が軽いとはいえ、それでも40キロ代半ばはある。

その身体を、木の枝でも振り上げる様に、軽々と頭上に掲げ上げたのだ。

このまま地面に叩きつける気だ。

私は戦慄しながら一歩踏み出した。

クロム・ネフューが叩きつけるために反動をつけ、その力を溜める為に一瞬動きを止める。

その一瞬を聖は逃さなかった。

聖は腕にしがみつくと、タイツごと靴を脱ぎ捨て、がっちり固められた掌から抜け出した。

そのままその腕の先を掴んだまま飛び降りると、そこを支点に振り子の要領を使った膝蹴りを、またしてもクロム・ネフューの顔面に叩きつけた。

クロム・ネフューの身体が反り返り、またさらにグラリと揺らいだ。

聖は出来る限り最短距離で地面に着地すると、間髪いれずに左足を

踏みしめた。

と同時に、クロム・ネフューの身体が体勢を立て直した。そこを見逃さなかった。

勢いよく戻ってきた顎に向けて、聖は渾身の力を込め右後ろ足でかち上げた。

全力を込めた聖の後ろ蹴り。

派手な音だけが響いたが、それでもクロム・ネフューは倒れなかった。

完全に頭に血が昇ったかのように、聖はさらに攻撃の手を休めなかった。

素早く引き戻した右足を支柱に、今度は回転をつけ、左足を大きく振り上げると、先ほどと全く変わらぬ位置に後ろ回し蹴りを叩き込む。

今度こそ、顎の碎ける気色の悪い音が、オフィス街に響き渡った。

クロム・ネフューの膝が、がっくりアスファルトの上に崩れ落ちた。

当然だ。

普通の人間なら、聖のあの殺人メニューを喰らってまともに立つていられるはずがない。

下手をしたら、本当に相手を死に至らしめるコンボなのだ。

一発目を喰らった時点で、起き上がってこれる事自体が以上なのだ。

私はいつの間にか、中央分離帯のつつじの茂み辺りまで歩みを進めていた。

もっと近く。

もっと傍で。

心の中でそう繰り返しながら、私は聖の元へと近付こうとしていた。

私が、茂みの段差から足を下ろした時だった。

膝を付いたままのクロム・ネフューが、左足を戻したばかりの聖の身体をガツチリと両手で捕まえていたのだ。

「甘いよ、聖ちゃん。そんな軽い蹴りじゃあ、僕はまだまだ倒れないよ」

聖の腰辺りを押さえつけたまま、クロム・ネフューは聖の顔面に、額を打ち付けた。

鈍い音と湿った音と、聖の短い呻き声が私の鼓膜を刺激する。

真っ赤な血しぶきを噴出し、聖の頭が勢いよく反り返った。

クロム・ネフューが、またあの無邪気な笑い声を上げた。

が、聖も負けてはいない。

反り返った動きを利用、もう一度顎を狙って両足を突き上げた。

この意外な動きには、さすがのクロム・ネフューも虚を突かれたらしく、口があるべきあたりから、血とも涎ともつかない液体が飛び出した。

ダメーじあり。

更には握力も緩み、聖は回転しながらまたしても腕から逃げ出す事に成功した。

「いてえ！」

聖が声を荒げる。

聖の顔は、流れ出た鼻血でドロドロになっていた。

「この野郎！！」

感情むき出しで、膝立ちのクロム・ネフューの頬めがけ、蹴りを放つ。

その感情が裏目にでた。

聖の蹴りにはキレがなく、更には狙いもズレていた。

クロムは瞬時に腕を上げ、がっちりとガードを固める。

「甘い！」

クロム・ネフューの右腕が聖のボディを狙って繰り出される。

息を吐き、聖は身体を目一杯ひねり上げる。

クロム・ネフューのボディブローは空を切り、今度はクロム・ネフュー自身のボディがガラあきになる。

しかし、聖も回避でバランスを崩し、すぐには反応出来ない。

と、思った。

私は、聖の超人的な格闘センスをなめていた。

聖はバランスを崩したままアスファルトに両手を付くと、すっばりと空間になったクロム・ネフューの顎に向けて、思い切り身体中のバネを開放した。

渾身のバナナキックが、クロム・ネフューの顎を捕らえる。

全身の筋肉という筋肉、バネというバネをフル活用したこの蹴りは、ダメージのあるクロム・ネフューには、充分過ぎるほど重い攻撃となったのは間違いない。

あのクロム・ネフューの身体が、浮かび上がる。

聖の身体が真っ直ぐに天を付き、浮き上がったクロム・ネフューの身体は見事に空中に投げ出された。

まるでスローモーションのように、クロム・ネフューの身体が宙を舞う。

聖は美しく伸び上がった肢体をたたむと、弧を描いてアスファルトに舞い降りた。
その背後には砂埃を巻き上げた、クロム・ネフューの巨体が突っ伏していた。

「ほう……」

聖はゆっくりと息を吐き出し、肩を落とした。

「終わった……」

「まだだよ」

聖が振り返ると、そこにはまったくダメージの見られないクロム・ネフューが仁王立ちしていたのだ。

聖の身体が硬直したのに気づいた。

聖が全精力を注いで放った、全力の蹴りだったのだ。

それを喰らっても、何のダメージもないなんて。

聖の身体が震え始めたのが分かった。

大きく震え、頭が背中に隠れ見えなくなる。

「ふう。それでも少しは痛かったかな。なかなかいい蹴りしてるじゃないか」

クロム・ネフューは茶化したような口調で言い放った。
完全に聖を煽っている。

聖の頭が再び私の視界に現れた。

「うああああああ！……！！……！！……！！」

聖の絶叫がこだまする。

聖が再び地面を蹴った。

見る見る間にクロムとの距離を詰まる。

クロム・ネフューの豪腕が、再び聖を襲う。

「うあああああ！！！！！！」

走りながら拳を避けると、聖は懷に潜り込む。

膝に足をかけ背に回り、その巨体を器用に昇ってゆく。

聖はクロム・ネフューの肩まで登りつめると、太い首をガツチリと両足で挟みこむ。

そして、そのまま聖の上半身は真っ逆さまに地面へと落ちていった。

「うおおおおおおお！！！！！！！！」

聖の身体が、空中で弧を描く。

それに伴い、クロム・ネフューの身体がゆっくりと宙へ投げ出される。

弧は回転に変わり、聖の胸辺りを中心に聖の身体とクロム・ネフューの身体が繋がり、大きな車輪となって、冷たい空気を切り裂いていく。

そして、クロム・ネフューの巨体は思い切りアスファルトの地面に叩きつけられたのだった。

聖は、首から足を離すと、ゆっくりと立ち上がった。
肩で息をし、身体を大きく震わせ、感情の昂ぶりを背中で必死で抑えていた。

聖はゆっくりと私の方へと振り向いた。
その顔には、鼻血がべっとりとこびりついていたが、その笑顔は美しかった。

今度こそ勝った。

聖はそう思っただろうし、私も信じて疑わなかった。

クロム・ネフューの巨体が、聖の背後で起き上がるまでは。

続く。

第十一話「涙」

「正直、ここまでやるとは思わなかったよ」

大きく首を回しながら、クロム・ネフューが言った。

「ただの小娘かと思っていただけ、見くびり過ぎだったかな」

膨張した筋肉が、呼吸と共に小さく蠢く。

聖は、大きく肩で息をしたまま、動く事が出来なかった。

誰が見ても、彼女のスタミナは既に底を尽いているのは明白だった。

「少しは楽しませてもらったよ」

言い終わると同時に、クロム・ネフューは腰を落としアップercass
トの要領で右腕を振り上げた。

大きく空気が動いた。

小石を舞い上げる真冬の突風みたいな風が、聖の身体を跳ね飛ばし

た。

「もう踏ん張る事も出来ないか」

クロム・ネフューの言葉には、嘲笑すら混ざっていた。

「用済みだ。死ね」

クロム・ネフューの姿が消えた。

気がつくのと、倒れ伏した聖の傍らに佇んでいた。

無造作に聖の頭を掴み、軽々と宙へ持ち上げた。

強烈な打撃が、聖の顔面を襲う。

一発、二発。

鈍く、湿った音が無人の街に響き渡る。

クロム・ネフューの手は休まることなく、その拳は何度も美しい顔に叩きつけられた。

もう、何度殴ったのか分からない程、その凶行が行われ、聖の身体からは完全に力が抜け、ぼろ雑巾の様にクロム・ネフューの腕から垂れ下がっているだけだった。

世界が滲んだ。

私の目は、あふれ出る涙で、滲んだ世界しか私に見せてはくれなかった。

「最期だ」

クロム・ネフューの腕が、聖の顔面を捕らえた時、聖の首はあらぬ方向へ折れ曲がったきり、元の場所に戻る事はなかった。

私は、動く事も、声を上げる事も出来ないまま、ゆっくりとした時間の中、その光景を見送っていた。

私は誰もいない街を、泣きながら聖の身体を引きずって歩いた。

クロム・ネフューは、聖の身体をその場に落とすと、筋肉の鎧を解き、ほんの数秒で元の小さくて醜いピエロの姿に戻っていた。

そして、私の方を一瞥すると、少しだけ笑みを浮かべ、
「クズが」

それだけ言い残し、砂が舞う様に辺りに溶け込んでいった。

私の時間は長い間止まり、聖の身体も、私の身体も、そこには何も動く物のない空間に、ただ存在しているだけだった。

何も考えられなかった。

ただ、聖を見つめているだけ。

どれ位の時間が過ぎたのだろう。

辺りが淡い朱色に染まり始めた頃、私は聖の傍へと歩み寄った。

聖がどんな顔をしていたのか、ここでは言えない。

あんなに美しかった聖の顔。

誰よりも綺麗だった顔。

私は、涙が止まらなかった。

聖の身体を、肩にもたれ掛からせると、引き摺る様にして、私は歩き始めた。

聖を、家に帰そうと思った。

こんなところに寝かせておくのは、嫌だった。

聖は、こんなところで寝ていていい人間じゃない。

聖は、誰よりも強くて、誰よりも優しく、誰よりも美しい人間だから。

そして聖は、誰よりも私が憧れた人間だから。

涙が止まらない。

オフィス街の坂を下り、繁華街に出る。

繁華街の丁度中程に、若者たちが集う、オシャレの中心地とも言える商店街があった。

雨海モールと呼ばれるその商店街は、私の両親が幼かった頃には、昔ながらの個人商店が立ち並び、地元住民らが集う憩いの場のような、本当に昔ながらの商店街だったという。

元から歴史の古い港街で、日本の外交初期から海外との公益が盛んだった為、その当時からオシャレの街として有名ではあった。

商店街にも、古くから洋品店を営む店が多く、日本でも有数のオシヤレ発信地。

しかし、急速な都市化は駅周辺にファッションビルを乱立させ、様々なブランドショップを呼び寄せた。

県の内外からは多くの若者が集まり、街は更なる賑わいをみせた。

その反面、古くからの洋品店や食料品店には人が寄り付かなくなり、次々と看板を降ろしていった。

その空いた土地に目をつけたのが、ファッションビルには入らない、少し高級志向なブランドだった。

始めに、今や知らない者はいない程に隆盛を極めている、スケーターブランドが店舗を構えた。

それから、他のブランドもそれに倣い、商店街は徐々にブランド街へと変貌していった。

中にはまだ、地元住民の声に応え、営業を続ける生鮮食品店もあるにはある。

どんなにブランド店が高く店を構えていても、一步裏道へ入れば、そこにはかつて商店街の主であった、古株の住民たちが生活の場を移す事なく根城を構えているのだから。

大半の人間が、私の家があるような、新興住宅地に移り住んだりした。

しかし、どんなに街が変わっても、雨海を愛する人間は、その地を離れなかった。

だから、商店街の奥の奥。

少し落ち着きが残っている地域には、未だに過去の遺産とも言えるような、木造の住宅街がひっそりと残されていた。

聖の住むアパートも、そんな古ぼけた住宅街の一角に、遠くのビルに潰されそうになりながらも、しぶとく寝そべっていた。

築40年。

木造二階建てのぼろアパート。

4畳半一間のワンルーム。かろうじて、風呂・トイレ付。

大家さんお婆さんが聖の事を気に入っており、月35・000円の家賃を、15・000円にしてもらい、一人暮らしをしているアパートだった。

私は汗だくになりながら聖を二階の角部屋まで運んでいった。聖のポケットから鍵を取り出すと、立て付けの悪いドアをこじ開けた。

中に入ると、聖の部屋の匂いがした。

畳敷きの内部はがらんどつで、テレビも冷蔵庫も、家具すらもない部屋が広がっていた。

あるのは、一組の安っぽい布団と、小さなちゃぶ台以外は、プラスチック製の衣装ケースが三段重なっているだけだった。

私は靴を脱ぐと、聖の身体を部屋に引きずり込み、敷きっぱなしの布団に、聖の身体を横たえた。

ドサリと、味気のない音を立てて、聖の身体は布団に倒れ伏した。

私はしばらくその場に座り込み、ザラついた土壁に背を預け、染みだらけの天井の隅をじっと見つめていた。

それから、私はおもむろに立ち上がると、申し訳程度のコンロと調理スペースのついた、小さなキッチンへと移動した。

普段聖が使っている、数少ない生活用品である、歯ブラシと歯磨き粉のささった、小さなプラスチックのカップを手に取ると、勢いよく蛇口をひねった。

数杯の水道水を飲み干すと、私は聖のキッチンをじっと見渡した。

包丁代わりの小さなキッチンナイフ。

鍋としても使っているらしき、加工のはげかけたテフロンのフライパン。

後は、食器類が1セット、敷かれたタオルの上に並べてあるだけだった。

聖の家族について、私は何も知らなかった。

聖は、ここで一人で暮らして、一人で学校に来ていた。

入学手続きの際、誰に保護者になってもらったのか知らない。
とにかく、聖は一人だった。

そして、一人で生活していた。

聖は、学校に来ている時間以外、生活の大体をバイトに費やしていた。

朝、登校して、夕方下校。

17時から、21時まで知り合いの古着屋で働いていた。

22時から、翌5時まで、深夜のファミレスでホールスタッフをして、

6時から、9時まで早朝のコンビニで働いていた。

そしてまた登校。

古着屋で働き、帰宅。

翌朝のコンビニに出勤していた。

二日間を1セットで、聖の睡眠時間は二日でおよそ6時間だった。

食事に関しては、朝食はコンビニの期限切れ。昼食も残り物を貰ってきていた。

夕食は、ファミレスの日はまかないで。そうじゃない日は、抜くか、

多少の自炊をしていた。

聖はこの生活を入学当初から、ほぼ365日、バンド活動や私や八神君と過ごす時間を抜かして、貫き通していた。

そうして、家賃から生活費そして私立校であるうちの学校の学費を払い続けていた。

私はカップをすすぎ、元の位置に戻すと、聖を風呂場に連れて行った。

血みどろの聖を、少しでも綺麗にしてあげたかった。

私はシャワーの蛇口をひねり、暖かい湯を出すと、聖の身体から、邪魔な衣服を剥ぎ取りにかかった。

聖の身体は、全身を黒光りした血が固まった、カサカサしたもので覆われていた。

戦いの最中、聖の身体は至る所が傷ついていた。

靴もタイツも脱ぎ捨てられた爪先には、大きな切り傷。

知らぬ間に小さな釘が突き刺さっていた。

私はゆっくりと、釘を抜き取り、聖の身体を傷つけまいと、丁寧にあわ立てたスポンジで、彼女の身体を清めていった。

まだら模様のタイルが、湯と混じって、赤さを増した血のカスで染められていく。

時間をかけ、身体を洗い流し、しなやかで艶やかな髪をシャンプーする。

聖が使っていたシャンプーもコンディショナーも、なんの変哲もない、むしろ安っぽい思春期の少女が使うようなものだった。

私は少しだけ面白くなり、聖に話しかけた。

「やっぱりすごいな。聖は。なんでこんなの使ってて、こんなに綺麗な髪をしてるの？」

聖の身体はすっかり綺麗になった。

白い肌。

今は、青白くあったが、そのキメ細やかな肌は、紛れもなく聖のそれだった。

風呂場から

聖を運び出すと、丹念に身体を拭いた。

衣装ケースから、水色のキャミソールと、破れたローライズのジーンズを取り出すと、新しい下着の上から、ゆっくりと着せていった。着古した、パジャマ用と思われるＴシャツとホットパンツは選ばなかった。

私にとって、それは聖の着るものには相応しくなかったから。

シーツを取り替えると、再び私はそこに聖を横たわらせた。

少しして、私も風呂場へ行った。

熱いシャワーを目一杯出して、私は頭から浴びた。

涙が止まらなかった。

続く。

第十二話「優しさの在り方」

私は元来、あまり寝起きのいい方ではない。

自慢じゃないが常に貧血気味だし、低血圧だし、寝起きの機嫌自体も悪い。

なんていう、ちょっと可愛い女的な要素をけっこう持っていたりもするのだが、どちらかと言えばあまりモテル方じゃないのは何故だろう？

そんなだから、その日も私の寝起きはすこぶる悪かった。

酒を飲んだわけでもないのに、頭は割れるように痛かったし、目の前はグラグラした。

だから、光の刺激に耐えながら目を覚ました時のその光景は、今でも夢か現か分からないでいる。

分かっているのは、聖がそこに立っていた事だけ。

「おはよう」

聖は窓際に立ち、そつと薄っぺらなカーテンをめくり、下界を眺めながら穏やかな光に包まれていた。

「ひ……じり……」

私は額に手をかざし、聖の姿をぼんやりと捉えていた。

振り返った聖の顔は、青と赤が混ざり合い、形もデコボコに腫れ上がったままの、とてもひどいものだった。

「もう、起きて平気なの？」

精一杯振り絞った喉からは、擦れた声が漏れ出ただけだった。

聖はにっこりと微笑を返してきた。

そして、その場にくずおれた。

「無理しなくていいから」

私は聖の額に、絞ったタオルをのせながら少し怒ったように言うてみせた。

「ごめん」

聖は本当に申し訳なさそうに、小さな声で答えた。

聖の身体は、昨日の戦闘のダメージで、相当な熱を溜め込んでいた。脇の下から、小さな電子音が漏れ出す。

39.5度。

立派な高熱だ。

「39.5度だってさ。しばらく寝てないとだめだね」

私は聖の胸元に、薄手の毛布を掛けなおすと、キッチンへと向かう

た。

「何か食べよ。お腹ぺこぺこだよ」

そう言つて、キッチン周りの戸棚を物色し始める。

「お腹・・・減つてない」

聖の声が聞こえる。

「だゝめ。聖は怪我人なんだから。血を増やさなきゃ」

「お母さんみたい」

聖の笑い声が聞こえた。

「私の子供だったら、もっと可愛らしい子が生まれるよ」

「うぜえ」

私も、聖も、笑った。

お母さんか。

それもいいかも。

今は、私が聖のお母さんになろう。

シンク下の戸棚を物色しながら、ふとそんな事を考えた。

「ねえ、ここの家は何も食べるものないなあ」

ひとしきり戸棚を探り終え、振り向きながら言う。

「ああ。ないよ」

普通の答えだ。

「いや、当然のように言わないでよ」

私は思わず突っ込んだ。

「その日食べるものしか家に置かないから」

冷蔵庫すらないような家に食料品を求めた自分がバカだった。

私は少し後悔した。

「じゃあ、行つて来るから」
「ごめん。よろしく」

踵をローファーに押し込んでいる私に向かい、聖が上半身を起こして言った。

「ダメだよ、寝てな」

私の声に、聖はゆっくりと横になった。

「じゃあ、タオルだけはあつたかくなったら取り替えるんだよ」
「うん」

聖の気のない返事を背に、私は再び雨海の街に出た。

古い住宅街を抜け、雨海モールへと出て、商店街の大通り側の入り口にあるコンビニを指した。

聖の食事は何がいいだろう。

お粥かな。

でも、血を増やすなら肉とかかな。

胃が受け付けるかな。

考えながら歩いて行くうちに、気づくと私のケータイの待ち受けにもしてある、大好きなブランドショップの前に差し掛かっていた。

ショーウィンドウには、冬物のアウターを纏った、九頭身のトルソーが数体、オシャレなポーズで佇んでいるのが見える。

私は立ち止まると、吸い寄せられるように、ぴかぴかに磨かれたガラス面へと歩み寄った。

瞳のない、虚ろな印象をうつけるその女性達を見つめるうちに、ふと

ガラスに映る自分の姿を見つけた。

どす黒い赤に染まったブラウス。

昨日の戦闘が、嘘だったみたいに思っていたのに。

私はふと、昨日の出来事を思い出した。

あの騎士達はどうしただろう。

無数の触手に貫かれた海の姿。

気の強い桜。

黒い鎧を纏った八神。

不思議と、恐怖を感じなかった。

私の中で、絶対的にリアリティが欠けていた。

嘘ではないと思う。

だけど、幻想のようにも思える。

私の中で、何かが変わっていた。

普段は、綺麗に着飾り、バッチリとメイクした販売員達が闊歩している店内を見回すと、不意に妙な考えが浮かんだ。

これって、好きな服を着放題なんじゃないの？

私は何となく嬉しくなってしまった。

聖に食事を届けてひと段落したら、また来よう。

私は再びコンビニを目指した。

結局何が身体にいいのかわからないまま、私は聖用にインスタントのお粥と特上ステーキ弁当、自分用に大好きなハンバーガーカレー。それから、2リットルのお茶とスポーツドリンクを持って帰ってきた。

聖の家にレンジなんてないのを忘れていた。

「冷たいステーキなんて、嫌だ」

聖がワガママを言う。

私は、先ほどブランドショップを眺めていたせいで、あるアイディアが浮かんでいた。

「隣の家にあるかも」

私はビニール袋を引っつかむと、すぐ隣の部屋のドアノブをひねった。

鍵は・・・開いていた。

最悪、壊してもよかったのだが、都合よく施錠されていなかった。まったく無用心な話だね。

恐らく、貧乏な男子学生の住居であろうその部屋は、入ったとたんにヤニの臭いが鼻をつく、最悪の居住空間だった。

玄関にはゴミ袋が溜まり、そこらじゅうに弁当の食べカスや飲みカス、タバコの溢れた灰皿が散乱していた。

私は靴のまま失敬して上がりこむと、キッチンの目の前にレンジを発見した。

聖と私の弁当を順番に温めながら、私は改めて部屋を見回した。敷きっぱなしの布団に、繋がったままのゲーム機。

うず高く積まれたマンガ雑誌やいやらしい雑誌の山。

こいつ、彼女いるのかよ。

私は、手近にある山から雑誌を一冊手に取ると、パラパラとめくってみた。

ページの隙間から、ヤニの臭いが漂ってくる。

グラマーとぽっちゃりの間の体型をした女の人が、悩ましげな表情でお尻をこちらに向けている写真や、何故か荒縄で縛られた女の人が苦悶の表情を浮かべている写真などがてんこ盛りだった。何がいいのかねえ。これの。

私はふと、八神が縄で縛られているところを想像してみた。なんていうか、痛ましかった。

何で男の子は、こういう支配的な行為に惹かれるのだろう。

この雑誌に出ている女性は、みんな抑圧されたり、懇願したり、被支配を喜ぶフリをしている人ばかりだった。

もし、私がこうにされたらどうだろう。

私は、少し背筋が寒くなった。

しばらくその雑誌を眺めたあと、レンジが調理終了の合図を出したので、再び元いた場所に雑誌をリリースすると、その部屋を後にした。

聖は思ったよりも食べる事が出来た。

というよりは、ガッツいていた。

ものすごいスピードでステーキ弁当を空にすると、今度は

「お粥も食べたい」

とせつついてきた。

「はいはい」

私がコンロに湯を沸かしに立ったそのつかの間には、私のハンバー

グカレーはすっかり空になっていた。

「うをつ！まだ半分も食べてないよ！？」

「ごちそうさまでした」

聖が深々と頭を下げた。

「このやろう！」

私は、聖のデコボコ面の最も盛り上がった先端目掛けてデコピンを飛ばしてやる。

「つつてえ！！」

声にならない声を上げて、聖は布団に突っ伏した。

「見たか、この四次元胃袋が！」

私は笑いながら、それぞれのカップにお茶を注いでいった。

それから出来上がったお粥が聖のお腹に納まると、聖はまた床についた。

「要・・・」

聖が小さな声で私を呼んだ。

「何？」

「ありがと」

言い終わって、二秒もしないうちに、聖は深い眠りに落ちてしまっていた。

「ごめん、聖」

私は、胸が張り裂けそうだった。

聖が寝入ってしばらくした後、私はもう一度街へ出た。

私は先ほどのブランドショップへと足へ向けた。

私はやっぱり誰もいない店内へ入った。

このブランド、元はフランスのメゾンで、日本に入ってきて十数年。最近はこちらとお姉ギャル系なイメージの強い、ちよつとモードなデザインなのだ。

私はゆっくりと時間をかけ、広々とした店内を見回すと、何度も試着を繰り返して、結局全身ワンセット持ち帰ることにした。

小さなブランドロゴが襟元にプリントされた光沢のある赤いタンクトップ。

内側にフリルが縫い付けてあり、チラ見せして着る丈の短い深緑の綿のジャケット。

インナーに合わせた光沢のある、黒のタイトなハーフパンツ。

そして、ベージュのスウェード素材のウエスタンブーツ。

をチョイスした。

正規で買ったなら、実に10万円は下らない買い物だ。

更にソックスやブレスレットなども揃えると、私はその場で着替えてみた。

「うん、いいね」

思わず独り言を漏らしてしまう。

正直、本気で嬉しかった。

ただ、私は平均より胸が大きいという難点があるため、多少ジャケットのサイズが合わないのが惜しい。

胸に合わせてゆったりしたものを選ぶか、肩やウエストに合わせてピチピチのものを選ぶか。

今後の事を考え、私はゆったりしたものを選んだ。

今度は、駅前のファッションビルへと移動した。

聖の好きなブランドのショップが、このビルに入っているのだ。聖の好きなのは、日本人デザイナーが20年程前に立ち上げた、ロックテイスト溢れる、セクシーさが売りのカジュアルブランドだ。こちらは、先ほど私が寄った店とは違い、坪数は少ないが、今期A/Wものの品揃えはしっかりしていた。

聖とはよく一緒にここに来ていたため、彼女のサイズもよく知っていた。

私は、聖に似合いそうなものを慎重にチョイスしていった。紐と胸元に金糸でレース刺繍のされた黒いキャミソール。

ブランドイキヤラクターにもなっている女の子の顔がプリントされた、スウェット素材の白いライダーズジャケット。

ポケットにスタッツが打ち込まれた、ダメージ加工のストレートデニム。

それから、ウオレットチェーンやネックレスを選んだ。やっぱりこっちでも、ワンセットで10万円は下らない買い物になった。

買ってはいないけど・・・。

その後、同じビル内にある靴屋さんへ行くと、聖用に黒いエンジンブーツを持ち帰ることにした。

こちらにも、今後の事を考えて。

いっぺんに二人分の買い物をするのは楽しかった。

特に私達の場合、一緒につるんでいる割に全く趣味が違うから、なお楽しかった。

往々にして、女の子って同じ趣味同士の子達が寄り集まる傾向にある。

うちのクラスでも、そういった派閥みたいなのがあるからね。

大半は、真面目に勉強して高校生活を送ってる、普通の子集団だ。それ以外に、ギャル三人組がいて、やたらオシャレに興味のあるキユーティ系な子達が何人か、あとはダンスやらヒップホップが大好きなBガール三人組、といった感じ。

私もクラス内では、結局は普通の子集団の中に含まれてしまうのだが。

ま、大体は聖と行動を共にしているから、そういった派閥にどっぷり浸かる事はなかった。

その代わり聖とも、そういった派閥意識でつるんでいるわけではないのだ。

結局は私達ふたりとも、他の子達とは違う生活、簡単に言えば「浮いた」学校生活をおくっているわけだが、話を本題に戻そう。

だから、二人で買い物する時は色んな店を回れるから楽しいのだ。

しかも今回は自分で聖のものも選べたし。

買い物が終わると、私はもう一度コンビニに立ち寄ると、サンドウィッチを頼張った。

さつき聖に食べられてしまったから、満腹になっていなかったのだ。それから夕食用に、出来るだけポリウームのありそうなお弁当と数個と、菓子パンにカップ麺を持ち帰った。

飲み物も欲しかったが、思いの他の大荷物になったので断念した。

特に、エンジニアブーツが意外に重かった。

私は極力汗をかかないよう、ゆっくりゆっくりと家に戻った。

やっとこ家に帰り着いた頃には、住宅街はビル街に太陽をはばまれて、一足早く夜の帳を下ろす頃だった。

続く

第十三話「聖の全て」

その夜の事を、私は一生忘れない。
たったの二時間程度の事だったけど、私は一生忘れない。

それは、私が今までずっと気になっていた事を、勇気を振り絞って聞いてしまったからだった。

これから少しの間、私は聖の一言一句違わないよう、伝えていきたいと思う。

この話しに対して、賛否両論あると思う。

だけど、これは真実だし、聖の経験した全てだ。

だから、これを伝えます。

「あたし、小学生まで多少、自閉症気味の子供だったんだよね。

あたしの家はさ、浅草の辺にあるんだけど、父親と母親、五個上の兄貴と二個上の姉貴と、五個下の弟が一人の六人家族だったんだ。

両親にとって、兄貴は長男だし、姉貴も始めての女の子だから、二人とも可愛がっていた。弟も、結構年が離れてたから可愛がられて育った。

私が一番中途半端に生まれてきて、しかも次女だったし、家族からあんまり相手にされなかったんだ。

別にこれといって出来た子供でもなかったし、どちらかといえばバカな方だったから、更に両親に興味を持ってもらう事もなかった。そんなんだから、あたしは外に出ても人と話しが出来なかったし、勿論友達なんていなかった。

唯一の友達は、いつも持つている猫のパペット人形だけ。

他人と話す時は、いつもパペット人形を使って話すような子供だった。

それでも、一人でいただけで、対して苦になることもなかったし、こんなもんなんだと思って生きていた。

きっかけは、中学に上がった時だったな。

あたしが初めて八神に出会ったのが、中学だった。

昔から八神は今みたいなかんじだったよ。

何考えてるんだか分かんないし、いつもクールで、冷めた奴だった。ただ、他の男子にはそれでも何故か慕われていて、取り巻きも何人かいた、ガキ大将的な存在だった。

あたしはそんな八神に何となく惹かれていった。

でも、パペット人形でしか話せないような女だから、八神が快く思うことはなかったよね。あたしは八神に苛められるようになった。ぶたれたり、蹴られたり、お金取られたりさ。

そういう関係になったのも、この時だった。

あたしはとても辛かったけど、同時に、誰にも相手にされなかった自分に唯一興味を持ってくれた人が存在した事が、とても嬉しかった。

どんなに苛められても、昼飯がいつもコンビニのパンだった八神のために、毎日弁当を作っていたなあ。

そんなことをしてるうちに、八神もあたしを大切に思ってくれたんだろうな。

あたし達は付き合うようになった。

あたしは初めて自分を大切に思ってくれる人が出来て、本当に嬉し

かった。

でも、それも長続きしなかった。

夏休みになる前に、八神が家の事情で広島に引越していったんだ。八神のお父さんはお医者さんで、東京の総合病院に勤めていたんだけど、実家のある広島で開業医をしていたお祖父さんの跡を継ぐために、帰ることになったんだ。

そこから全ての始まりだった。

頭がいなくなつて、八神の取り巻き達が自由になったんだ。

それまでは、頭が怖くてあたしに手を出せなかった奴らが、八神の代わりにあたしを苛めるようになった。

八神が転校した次の日、あたしは三人の取り巻きに放課後のトイレに連れ込まれて、輪姦された。

毎日が地獄だったな。

夏休みに入る前、ほんとに毎日毎日犯された。

夏休みに入ったら、もっと酷かった。

一日中拘束されて、ほとんどオモチャだったよ。

夏休みが終わった頃には、その三人組もあたしで遊ぶことに飽き始めていた。

それで終わればよかったけど、そいつらはあたしを使って金を稼ぐ事を思いついたんだ。

冬前には、あたしは学校中の公衆便所だった。

あいつらがいくらであたしを抱かせていたかは知らない。

ほんと、小遣い程度の額だったんじゃないかな。

学校の中を歩いていて、あたしを抱いた事のない男子はいなかった。毎日毎日、精液にまみれでさ。

あたしは毎日帰り道にある公園の公衆トイレで制服を洗ってから、

家に帰っていた。

それでも、毎日蓄積されてく臭いは取れないし、髪なんかにこびりついた精液はとれないから。

母親は、そんなあたしを見て、色気づいたガキが毎日猿みたいに節操なしにはめまくつてると思ったみたい。

あたしは家には居場所がなかったし、親が出勤前には家から出されていたから、あたしは学校に行くしかなかった。

どこにも行く当てはなかったし、遠くに行く度胸もなかった。

変にどっかに隠れていても、すぐに見つかったし、その後の仕打ちが怖かった。

そんだけ大々的に商売してれば、教師にも当然バれる。

その商売を最初に見つけたのは、女子の間で気持ち悪いって有名な若い教師だった。

そいつがまた最悪だった。

一緒になってあたしを抱いた上に、そいつは三人組にいろんな悪知恵を吹き込んだ。

その教師が商売に加わった事で、あたしはさらに地獄に引きずりこまれたんだ。

稼ぎもいまいちだし、もう既に市場が飽和状態。

他の教師が勘付き始めたこともあり、あたしは校外で売られる事になった。

最初はテレクラでテキトーなオヤジを捕まえて売りをやらされた。

そのうち、もっと客の多い街に移動しようってんで、あたしは新宿の歌舞伎町へ連れて行かれた。

冬休みくらいには、噂が噂を呼んでかなりの売れっ子になってたよ。三人組や教師も、面白いくらい稼げるって、どんどん図に乗り始めた。

もっと稼げ、もっと稼げって。

最終的には、最も時間ロスの少ない立ちんぼになっちまった。ただ、あまりにも派手にやりすぎた。ものすごい勢いで稼ぎまくったもので、歌舞伎町の風俗を仕切ってる連中に目をつけられたのさ。

白服。

そこはそういう組織だった。

歌舞伎町の風俗を一手に仕切っている、組織。

それは暴力団みたいな組織ではなくて、本当に企業として仕切っていた。

社員は全員白いスーツで固めて、毎晩風俗店を回っては、上がり徴収して、さらには独自の基準を用いて風俗店を監修していた。

要は、風俗コンサルティングだよね。

完全無欠な管理体制。

警察の指導を完全に守っての営業は、新宿の警察の信用を得ていた。でも、そんな真っ白い風俗組織があるわけない。

白服が裏で執り行っていたのは、未成年を使った高級デリヘル。

顧客は、政治家や官僚。医者や大手企業の重役、果ては新興宗教団体の教祖なんてのもいたな。

中学生から高校生を使った、高級売春。

それが白服の本当の姿だったんだ。

あたしはその白服に目を付けられた。

あたしを使っていた連中は、ビビッちまってもうあたしに近づく事はなくなった。

あたしは白服お抱えの医者にかかり、全てのメディカルチェックを受けた。

運よくなんの性病にもかかっていなかったが、当然のように誰のか

も分からない子供を孕んでいた。

有無を言わず墮ろされて、お腹に妊娠しないようにホルモンを調節する器具を埋め込まれた。

それから、あたしはマンシヨンの一室に連れて行かれて、一人のおっさんに出会った。

野村ってゆーそのおっさんは、白服専属の調教師だった。

あたしはそれから一ヶ月間、野村と二人つきりで、来る日も来る日も男をイカせるテクニクを叩き込まれた。

どんなプレイでもこなせるよう、ありとあらゆるテクニク。逆に、何もしない、わざとぎこちなくするテクニクも仕込まれた。

野村ってのは、なんだかいつもぶつくさ独り言を言ってる奴でさ。すげえ気持ち悪かったけど、目立たないところであたしを氣遣ってくれてるような人間だった。

あたしはそれまで父親とともに接した事もなかったし、何だかよく分からないけど、無性に野村を信頼していた。

多分、いま考えると、野村に父親の姿を重ねていたんだろうな。

一ヶ月の調教が終わると、あたしは大久保にある、白服所有のマンシヨンに移された。

そこは、白服お抱えのデリヘル嬢が共同で住む寮だった。

二人一部屋で、お互いに監視しあうように割り当てられたその部屋が、あたしの新しい家になった。

寮には、あたしより年下のガキから、高校卒業間近の、ほとんど大人まで、同世代の女ばかりが詰め込まれていた。

あたしが割り当てられた部屋に住んでいたのは、小夜子っていう、当時高校二年の女だった。

あたしより少し背が高い女でさ、いつも偉そうにあたしを管理しようとしていた。

飯の食い方とか、挨拶の仕方とかさ。

まともに親からそういう教育を受けてなかったあたしは、そんなとき

初めて常識つてもんを教わった気がするよ。

あたしはすぐに小夜子に打ち解けた。

勉強のできないあたしに、勉強も教えてくれた。

小夜子はよく言ってたよ。

「今はこんな生活してるけど、あたしはいつか自分で会社を興して、大金持ちになるんだ。そのためには、勉強しなきゃならないんだ。だから聖、あんたも勉強して、立派な大人になるんだ。今はこんな肥溜めの中で暮らしてるけど、いつか絶対にまともな生活を送るために」ってさ。

中二に上がった四月から、あたしの仕事が始まった。

毎晩、色んな高級ホテルに連れてかれて、色んな人の相手をした。

客は皆金持ちだらけで、毎晩何百万、何千万って額の金が動いていったよ。

そこは実際にいくらくらい動いたかは分からないけどな。

金の受け渡しは、あたしと小夜子を担当していた運転手の新庄が担当していて、その新庄が言っていただけだから。

その新庄つてのも、あたしにとって重要な人間だった。

あいつは、上には内緒でこっそり学校へやってくれた。

あたしが小夜子に言われて、高校へ行きたがっていたのを聞いて、出席日数ギリギリまでだけど、あたしを学校に送ってくれた。

新庄と小夜子は付き合っていた。

白服っていう組織では、高校卒業と同時に仕事も引退になる。

その後の進路つてのは、大体が表の風俗にそのまま落とされるか、白服の構成員の女になって生き延びるか、情報を守るために消されるかのどれかだった。

だからってわけじゃなくて、新庄は小夜子を愛していた。

勿論、他の組織同様、構成員が商品に手を出すのはご法度だ。

その中で、バレずにやりおおせた奴らだけは、大目にみてやるみた

いな暗黙の了解があつたらしいんだけどね。

あたしにとって、ふたりは本当の兄弟みたいだった。

そして、たまに遊びにくる野村。

あたしは、人生で初めて家族を手に入れた気分だった。

その生活がそれから一年以上続いたよ。

毎晩くる仕事は辛かったけど、皆といれば何とか生きていく希望があつたから。

そんなある時、あの事件が起きたんだ。

あたしはその晩、新庄の運転で、西新宿のホテルへと連れて行かれた。

部屋に入ると、小柄な中年の男がソファに座つてあたしを見ていた。少しの間、ソファに座り、その男と話した後、あたしは隣のベッドルームへと通された。

そこにいたのは、ブーメラパンツだけ身につけた、筋肉ムキムキの男が四人。

中年は、こいつらは自分のボディガードだと説明した。

今日はこいつらの相手をしてもらいたい。

ちよつとした性癖があるんだがね。

中年が説明し終わつた途端、あたしは目の前が真っ暗になった。

その時の事ははつきり覚えてる。

あたしはいきなり頭を殴られたんだ。

ちよつとした性癖。

それは、女を殴らなければ勃たないってこと。

あたしは泣き叫んだ。

とんでもない苦痛で、あたしは何度も吐いた。

それでも、あたしの意識がなくなることはなかった。

あたしの記憶に焼きついているのは、その情景をみながらひとり自

慰行為にふける中年男の姿。

あたしは絶対に忘れない。

朝日が昇って、あたしの身体のどこにも力が入らなくなって、なんだか生暖かいものが耳から出てきていた頃、ようやく新庄へチエックコールが行った。

部屋に迎えに来た新庄は怒り狂っていたよ。

でも、中年男は何事もなくこう言った。

「金なら払ってやる。二倍か？三倍か？満足したら、さっさと連れて帰れ。部屋が汚れる」

あたしはすぐに白服の診療所に運び込まれた。

骨折13ヶ所。全身打撲。内臓も少し痛めていた。

新庄が、なにやら携帯に怒鳴り散らしている声が聞こえていたよ。

内容は覚えていないけど、相手は白服のボスだったはず。

携帯を切ってから、一時間程して、あたしが眠りに落ちようとしていた時、ボスが診療室に入ってきた。

新庄がボスに食って掛かっていたのが聞こえたが、そのあとのボスの言葉が全てを変えた。

「クズ一つでガタガタ言うな。代わりはいくらでもいる」

「春になれば、新しいガキを狩りにいく。今回は客のニーズに合わせて小学生も視野に入れているからな」

あたしが目を覚ました時、あたしは寮のベッドの上にいた。

そこには、小夜子、新庄、野村の顔があった。

そこであたしは三人に言ったんだ。

「あたし、白服を潰すよ」

あたしは本気だった。

本気でクーデターを起こすつもりでいた。

あたしは身体を治しながら、身体を鍛えた。

初めて身体を鍛えた。

あたしは、今までやった事もない格闘技を勉強して、一人でも戦える身体を作った。

同時進行で、他のデリヘル嬢や、調教師、運転手を説得して回った。情報が漏れないよう、小夜子、新庄、野村と相談しながら、三人の息のかかった人間だけを引き込んでいった。

あたしが中学に入って、三回目の冬が来た頃、あたしは歌舞伎町で反乱を起こした。

事務所のあるビルを占拠し、ボスの部屋でボスを追い詰めた。

ボスは拳銃を出してきたけど、あたしには当たらなかった。

嘘じゃなく、あたしには銃弾は当たらなかった。

後々聞いた話しだけど、覚悟のない人間が撃った弾は、覚悟のある人間には当たらないんだって。

覚悟は全ての冷静さを生み出すんだってさ。

あたしは白服を潰すことに成功したんだ。

ただ、あたしや小夜子と違って、白服しか知らない子達もいた。

白服を潰したものの、実はその先は考えていなかった。

あたしは高校受験だけしか考えていなかったわけだし。

小夜子と新庄は、そんなあたしの考えもお見通しだった。

ふたりは、残された子達のために、白服の経営者になったんだ。

それから、あたしは雨海界政高校に受かった。

それまで、ずっと家に帰ってなかったし、これからも帰るつもりも

ない。

小夜子と新庄に保護者になってもらって、あたしは入学したんだ。

ふたりは、あたしが白服で稼いだ金を使って生活をすればと言ってくれたけど、あたしは断った。

これまでの全てをリセットしたかった。

白服の皆は好きだったけど、あたしの中では消したい過去だから。

あたしは全てを捨てて、一人でここで生活する事にしたんだ。
浅草でも、新宿でもない、この雨海で。

と、思ったけど、入学早々、八神と再開しちゃったんだけどね。

あたしは八神をまだ想っていたみたい。
全てを話して、八神はあたしを受け入れてくれた。

ま、これは別にいいか。

これがあたしの全てだよ。

あたしが何故ここにいるのか。

何故一人なのか。

どう？要。

納得した？」

聖がニツコリ微笑んだ。

その顔からはもう腫れは引いていた。

アザは残っているものの、そこにはいつも見ている聖の顔が笑っていた。

月が中天をさした頃、私は聖の部屋を抜け出した。
聖はまた寝入っていた。

私は、聖の話を思い出して、泣いた。

「私は……………」

「私はなんて甘ったれなんだ」

私は歯を食いしばって、月を見上げた。

月の中を、黒い影が横切った。

「今度は私の番だ！」

続く。。。

第十四話「私、立つ」

第十四話「私、立つ」

秋の夜風は思っていた以上に涼しかった。

私はジャケットの襟を立て、申し訳程度の防寒対策を施すと、月明かりの道を歩いた。

街からはいつさいの人口的な光の群れは消えうせ、あるのは真ん丸く膨れ上がった満月だけ。

風の中に、冬の匂いを感じた。

私は、出来るだけ見通しがよくて、それでいて障害物の多い、身を隠しやすい場所を探して彷徨った。

結果として、最もその条件に合っていたのは、住宅街の真ん中に突如として開かれた、児童用の公園だった。

遊具、広場、そして小さな茂みがおあつらえ向きだった。

私は、公園の真ん中に立ち尽くすと、軽く深呼吸をした。

頭の中には、聖の顔だけが浮かんでいた。

私が夜空を仰ぐと、そこには一際輝く大きな月。

星たちは、主役に舞台を譲るかのようになり、その小さな姿を潜めていた。

漆黒に染め抜かれた空をバックに、我が物顔で腰を据える黄金の月。その強烈なコントラストの中を、小さな影が、再び横切った。

私は、その影を凝視した。

影は今一度満月の中に現れると、今度は全く外れる事なく、次第に大きくなっていった。

そのスピードはさらに増すと、ついには満月を覆い隠し、私の目の前で翻って頭上を旋回すると、一番近くにそびえるジャンゲルジムの上に、静かに降り立った。

「こんにちは。お嬢さん」

真つ黒な影は、鼻につく、キザったらしい声でそう言った。

私は押し黙ったままだった。

纏わりついた影を大きな動作で翻し、そいつはこちらへ振り返った。

逆立った金髪に青白い肌。紅く光る瞳が私を見つめる。

見たところ、20代中盤といったところの、白人系の男。

影だと思ったものは、実際は漆黒のマントだった。

白いギャザー付のシャツ、黒いタイトなパンツに編み上げのブーツ。胸元の赤いリボンタイが、やけに目を引いた。

「随分とご挨拶ではないか。このワタクシがせっかく貴女のもとへ出向いたというのに」

その口元から覗いたのは、一組の大きな犬歯だった。

男は、どう見ても、中世の吸血鬼を彷彿とさせる様相でしかなかった。

しかし、様相だけではない。

ビリビリと感じさせる殺気、威圧感。

そいつは本物の吸血鬼だと認めざるを得なかった。

「何故何も言わないのだ？ 怯えているのか？」

吸血鬼は問うた。

私は、それでも口を開かなかった。

「ふむ。恐怖で喋る事もできんか。宜しい。ではこの場はワタクシがリードさせて頂く」

纏わり尽くような声。

私は寒気すら覚えた。

「ワタクシの名は、吸血鬼ドラクラ。絶対なる主、夢魔クロム・ネフュー様の使いとして、貴女を葬りに参った」

ドラクラ……。

私は心の中で吹き出した。

なんて安直なネーミングセンス。

コテコテの吸血鬼スタイルに吸血鬼顔。

その上名前がよりによってドラクラ。

どーしよーもない奴。

そんな私の心中は知る事もなく、ドラクラは先を続けていた。

「貴女はクロム・ネフュー様にとって、邪魔な存在。よって、今宵ワタクシが始末させて頂きます」

私は、ゴクリと唾を飲んだ。

「覚悟は……」

ドラクラが口上を続けている最中、私は握っていた細い紐を、思いっきり引き抜いた。

重い紐を引き抜いたと同時に、ジャングルジムの中に小さな火柱があがり、間髪いれずに無数のロケット花火が鉄柵の隙間から飛び出した。

無数の甲高い爆発音が、真夜中の住宅街に響き渡る。

本来の世界でこれをやったら、きっと近所中から大ヒンシュクを買うだろうな。

足元から続々と打ちあがるロケット花火を浴びながら、ドラクラが慌てふためいている隙について、私は上に滑り台の乗ったコンクリートのドームの中に駆け込んだ。

私が仕掛けておいた大量の花火は、今も尚ドラクラを襲い続けている。

ギリギリまで導火線を切った噴射式花火に、連鎖させて飛び出すように細工しておいたのだ。

けたたましく荒れ狂ったロケット花火は玉切れし、濃い硝煙が辺りを包み込む。

私はドームの出入り口から外の様子を伺った。

ジャングルジムの上で、ドラクラはマントで身体を覆い、しゃがみ込んでいた。

私は耳を澄ませた。

「・・・・・・・・」

無言でドラクラが立ち上がる。

ハラリとマントが落ちると、ドラクラの顔を月明かりが照らし出す。逆立った金髪も、青白い肌も、今は真っ黒いススだらけになってい

た。

「殺す！！！！！！！！」

一呼吸置いた後、ドラクラは咆哮した。

「このワタクシにいい！！！！！！ガキが！！どこへ行った！！！！」

ドラクラは私の姿を捉えようと、首をブンブン振り回し、真っ赤な目をギョロつかせている。

私はしばらく耳を澄ましたまま呼吸を整え、頃合を見計らって、ドームの外に小石を転がした。

ドラクラの視線がその小石を捉えた時、私はそつとジャケットの裾を外へと垂らしてみせる。

「そこかああ！！！！！！」

咆哮と共に、凄まじいスピードでドラクラはジャングルジムを飛び出した。

登場時と同様、どうやら奴は空を飛べるらしい。

ドラクラが、ドームの入り口を狙って真っ直ぐ飛んでくる。

丁度、ブランコとウンテイの中間に差し掛かる直前、私は思い切り足元のロープを引っ張った。

ブランコに滑車を取り付けておいたおかげで、ワイヤーロープはスムーズに空中に張り出された。

ガクン！という鈍い音をたて、ドラクラの体がその場でまるで逆上がりのように跳ね上がる。

完全にロープを喉に食い込ませ、一瞬空中に静止した後、ドラクラはどさりと地べたにくず折れた。

私はドームから抜け出すと、そのまま小さな梯子でドームの上へと駆け上がった。

ドラクラの体が地面で痙攣している。

やっつけたかな？

私は耳を澄ました。

ドラクラの痙攣が止まる。

どうやらまだらしい。

咳き込みながら、ドラクラはフラフラと立ちあがった。

「この小娘があ……」

掠れた声がもれ聞こえる。

私はここで初めて声を発した。

「どうしたの？ドラキュラさん。吸血鬼の力はそんなものなの？」
挑発するよう、わざと下らないことを言ってみせる。

「こあああああ……！！！！！！」

言葉にならない言葉を発し、ドラクラは地面をかきむしった。

そして、再び私目掛けて突進を仕掛けてくる。

私は耳を澄ましつつ、タイミングを見計らってまた違うロープを引こうとした。

が、その時だった。

予想だになかった「声」が突然私の頭を駆け抜けた。
（そうだ、さつきかきむしった地面の砂を、小娘にかけて目潰ししてやれ）

私が急いでロープを引く間もなく、ドラクラの手から一握りの砂が放たれた。

「うつ！」

私は、それをまともに目に食らってしまった。
そのせいで、ロープを引く手が遅れた。

トドメように用意していた、渾身の手作りボウガンの矢は、虚しく空を裂いて、その音は聞こえなくなってしまった。

私はドームから落ちないようにとつさにしゃがみ込もうとした。

が、その前に、衝撃が腹部に走った。

激痛と共に身体が浮き上がる。

私は、重力に逆らう感覚を覚え、すぐに重力に引き寄せられる感覚を体験した。

気がついた時には、地上に思い切り叩きつけられていた。

「うつうつ！！！」

自分でもびっくりするくらい、低くて野太い声が漏れた。
肺中の空気が一気に押し出された。

とてつもない衝撃が全身に走り、脳みそがグルグルと揺れた。

しまった。完全に声に頼りすぎた。

私は揺れる頭を押さえ、すぐに身体を持ち上げた。

見ると、私はドームから数メートル離れた砂場の上に倒れこんでいた。

危なかった。

ここが砂場じゃなかったら、気を失っていた。

私はすぐにドラクラの姿を探した。

ドラクラは丁度ドームの上から飛び立つところだった。

その手には、白く輝く細身のサーベルが握られていた。

（この剣で小娘の心臓を一突き。それでおしまいだ。奴が死ぬ前に、体中の血を吸い尽くしてやる）

私の頭を言葉が駆け抜ける。

（小娘は砂場の左端にいる。逃げるなら奴は足を取られにくい外。狙うなら左からだ）

私は声を頼りに、腕を伸ばすと、頭上にある砂場のへりを掴んで、思いっきり下半身を引き上げて、後ろに転がった。

一瞬前まで私の身体があった場所を、ドラクラの剣が突き刺した。細かいつぶてが裂かれる、鋭い音が聞こえた。

（何！？何だ、この動きは）

私は思い切りドラクラに砂を蹴り上げると、その場から駆け出した。

「どこへ行くこうというのだね？大人しくワタクシに斬られなさい」

なんて間抜けな台詞だ。

イラつきを隠そうとしているのがそのまま現れている。

でも、実際にもう私は追い詰められている。

まだ罨はいくつか残っているが、あいつを倒せる程殺傷能力のある罨は残っていない。

どうする、私！！

私の表現から、もう気づいているとは思うけど、私にはドラクラの思考が聞こえていた。

聞こえているってのは変な表現だけど、実際に聞こえるように、私の頭の中に、奴の思考が流れ込んで来ているのだ。

どういう訳かは分からない。

本当は昨日、聖とクロム・ネフューの戦闘が始まった直後くらいから、クロム・ネフューの思考が流れ込んできていた。

ただ、あの時は恐怖と困惑で、何もする事が出来なかった。

そして今日、私は突如として目覚めたこの能力を使う事にした。

私には、クロム・ネフューが何のために誰を差し向けて、それがどういう闘い方をする奴なのかも聞こえていた。

だから私は、事前に場所を選び、罨を張り巡らして、刺客を倒せるだけの土台を作っておいたのだ。

が、私はそういった事前の準備を過信しすぎていたし、流れ込む思考に頼りすぎていた。

敵が突然の思いつきで行動したり、戦闘の経験からくる無意識の行動をとる事を全く想定していなかったのだ。

完全に私のミスだった。

この先、剣を持った相手に対して、丸腰の私が対抗できる手段はまったく思い浮かばない。

私は、走った。

とりあえず、用意しておいた罠をぶつけるしかない。

走って公園の一番奥にある、鉄棒へと駆け寄った。

ここには、鉄棒の下にネットを張ってあるだけで、まったく殺傷能力はない。

万一の時、足を止めるためだけに用意しておいたものでしかない。せめてここで足を止めて、武器を探すか、一度引くしかもう手はない。

「どうするんだね？その鉄棒に何があるんだ」

私が一目散に鉄棒に駆け寄ったため、完全に罠があることがバレてしまっている。

（ふん。きっと、あの下に縄か、網でも張ってあるんだろう。それともあそこを弓にして、矢でも放つか。何にしろあの鉄棒を使うことはもう決まりだ。ならば・・・）

ドラクラの腕が一閃する。

私の目の前を白いきらめきが通り過ぎた。

次の瞬間、目の前の鉄棒は斜めにずれてしまい、そのまま真横に滑り落ちていった。

マジかよ。

ありえない切れ味。

見た目だけで舐めていた。

斬鉄かよ。

こいつの腕、異常だよ。

いくら達人でも、斬鉄なんか出来るもんじゃない。
ましてや一振りで鉄の足二本同時とは。

「もう終わりだ。潔く死ぬといい」

ドラクラの腕が、再び振り上げられた。

逃げなきゃ。

やばい、殺される。

逃げなきゃ。

私は腰が引けていた。

そして、今にも走り出しそうになっていた。

「そうだ。貴女にはそれがお似合いだ。臆病者は臆病者らしく、早く死ぬがいい」

ドラクラが嘲笑交じりにそう言い放った。

私の中で、何かが弾けた。

その言葉に、私はとんでもなく怒りを覚えた。
またバカにされた。

そして、またバカにされるような事をした。

私は、何を見て、何を聞いたんだ。

何を考えた。

何を思って、この場所へ来たんだ。

私は、何をやってるんだ！！！！

私は思い切り足を振り上げた。

硬いものの上に、何だか柔らかいものが乗っている感覚。

私は、ドラクラの股間を蹴り上げていた。

「ぐうっ!？」

ドラクラの口から、なんとも言えないうめき声がもれ出る。
すぐにその場にしゃがみ込む。

「見たか!？バカヤロー!!!!!!」

私はあらん限りの力を使って、怒鳴り散らした。

「私は逃げない!!ぜったいに、逃げない!!!!!!」

私は、ドラクラの脇腹を狙って、思い切り蹴りを入れた。

何度か、ウエスタンブーツの爪先を叩き込んだ時、何か硬いものを蹴った感触を感じた。

途端に、鋭い痛みが足を駆け上った。

「うわっ!」

私は尻餅をついた。

見ると、ブーツの先端が裂け、少量だが、血が吹き出している。

ドラクラが立ち上がる。

「はあ、はあ。小娘、いい加減にきなさい」

その剣先には、私の血がこびりついていて。

どうやら私が蹴ったのは、その刀身そのものだったらしい。

私の鼻先に、鋭い切っ先がかざされた。

大きく肩で息をしながらも、切っ先は全くぶれる事はない。

この先っぽが、私の身体に少し入り込むだけで、私の命は絶たれるんだ。

ものすごい実感として、それを感じる。

とてつもない威圧感と、現実感。

「まったく。このワタクシをここまでコケにした者は貴女が初めてだ。」

固い音と共に、切っ先が半回転される。

「せめて、苦しまずに殺してあげよう」

ドラクラは、大きく息を吐くと、腕を後ろに振り上げた。

終わる。

私はそう思うと、無性に悔しかった。

結局、私は無力だ。

何も出来なかった。

自分の身も守れないし、大切な友達も守れない。

悔しい。

悔しい。

悔しい！

ドラクラの剣が振り下ろされる。

私は、目をつぶりとっさに腕を前に出した。

ガギッ！

乾いた音と、重い衝撃が腕に伝わる。

「何！？」

ドラクラの、驚嘆する声が聞こえる。

私が恐る恐る目を開くと、私の腕は、ドラクラの剣をクロスするように受け止めていたのだ。

手に握り締めた、マイクを使って。

続く

第十五話「真夜中の決戦」

一番驚いたのは私自身だった。

瞬間前まで、私の手には何も握られてなかった。

それが突然、何故だか分からないのに、マイクを握っていたのだ。

ドラクラは啞然とした顔つきで固まっていた。

私も、きつと啞然とした顔をしているのだろう。

私は、自分の腕にかかっている圧力を感じ、やっと我に返った。
とにかく、今のこの状況を打開するのが先決だ。

私は空いた左手で、とっさに崩れ落ちた鉄棒からネットを掻っ攫うと、ドラクラの足元を目いっぱいすくい上げた。

「ぐわっ!？」

うめき声と共にドラクラはバランスを崩して、その場に倒れこむ。

私はさらに足に絡みついたネットを引っ張り上げ、ドラクラの身体に覆いかぶせる。

完全にドラクラの動きを奪ったのを確認すると、私は再び公園中央の広場に逃げ戻った。

「はぁ・・・はぁ・・・」

私は、肩で息をしながら、右手のマイクをじっと見つめた。

それは、なんの変哲もないマイクだった。

いつも私が唄う時に使っている、普通の金属製のマイクだった。微妙に重く、ちょっとだけ冷たさが手に伝わってくる。

じっと見つめたまま、私はその場から動かなかった。

何故か、動けなかった。

なんとなく、感じるものがある。

何かを感じる。

マイクを握る手から、熱が引いていくのが分かる。

これは……

熱が吸われている？

マイクが、蠢く？

「この小娘があ!!!!!!!!!!」

ドラクラが咆哮する。

ネットがズタズタに引き裂かれている。

ドラクラは既に私の畏から抜け出していた。

「いい加減にしろ！」

完全に頭に血が昇っている。

「そこを動くな。殺してやる。絶対に殺してやる」

ドラクラが舞い上がった。

私目掛けて一気に突っ込んでくる。

私は、もう一度逃げ出した。

何だか分からないが、何かが起こる気がする。

それまでは、私はこのマイクを放すわけにはいかない。

今度は、入り口を目指す。

入り口横の茂み。

あそこには、ビール瓶1ダース分のガラス片がばら撒いてある。

問題は、奴が空を飛ぶということ。

一応、叩き落とすために、ロープを仕掛けてあるが・・・

私は茂みの目の前で飛び上がると、ハードルを越える要領で跨いで通り過ぎた。

そして、足元に落ちていたロープの端を握り締めた。

ドラクラは茂みの前まで来ると、すつと翻り、その場にピタリと静止してしまった。

「ふゝむ」

ふわふわ浮き上がったまま、奴は茂みをじっくりと眺めた。そして、私の顔を一瞥すると、

「また何かあるのか？ううん？」

サーベルで茂みを剪定しつつ、にやりと口角をあげてみせた。
「うう・・・」

私は絶望した。

今度こそ駄目だ。

追い詰められた。

手の中で、未だにマイクは蠢いたままだ。

この得体の知れない感触だけが、私の唯一の希望だったのに。

と、いう顔をして見せた。

そして、一気にロープを引っ張った。

グワァン！

軽い金属音が響き渡り、頭上の木の枝から、大きなタライが滑り落ちてくる。

ドラクラの頭はそのタライを直に受け止めていた。

ガラン・・・ガラン・・・

タライは頭から滑り落ちると、地面の上で、乾いた音を立てて回転していた。

「・・・・・・・・・・」

「いい加減にしろ!!!!!!」

しばしの沈黙の後、ドラクラはまた再び咆哮した。

そして、私に向かって駆け出した。
そう、駆け出した。

地に足をつけて、駆け出したのだ。

来た————!!!!!!

私は狂喜した。

ドラクラは茂みに足を踏み入れた。

「ぐわああ!!!!!!」

瞬間、その場でもものすごい勢いで跳ね上がった。

そのブーツの底には、茶色い破片が深々と突き刺さっているのが見えた。

私は再び駆け出した。

茂みの裏を、堀沿いに走ると、滑り台裏の水のみ場付近で園内に飛び降りた。

その瞬間だった。

「うわっ!!」

首筋に激痛が走った。

私はがむしゃらに首筋をかきむしった。

何か、生暖かいものが首筋に纏わりついている。

私は急いでその異物を叩き落とした。

足元を見ると、そこに転がっているのは、一羽の蝙蝠だった。

「こっ、もり？」

小刻みに痙攣する蝙蝠の口から、血が流れ出ている。

!?

私は急いで首筋に手を当てた。

首筋は、べつとりと血塗られていた。

「マジかよ!?!吸血か!」

私は足元の蝙蝠を蹴飛ばした。

きい!という、小さな悲鳴が聞こえた。

きい!

きい!

悲鳴は、次第に数を増していった。

!?

私は頭上を見上げた。

「うげー!!!」

そこには、夜空を埋め尽くす程の黒い蝙蝠が、群れをなして蠢いていたのだ。

私の悲鳴に合わせるように、無数の蝙蝠達は、いつせいに急降下を始めた。

「わわわ!!!」

私は左手で頭を覆い、そこら中を走り回った。

無数の蝙蝠達は、私の腕の隙間から入り込み、至る所に噛み付いてくる。

身体中を鋭い痛みが走り抜ける。

「いったあ~~~~い!!!」

左手で身体中をはたきまくるけど、蝙蝠の攻撃は一向に止む気配はない。

それどころか、下手にガードを解いた為、更に懐深くまで入り込んできている。

一回一回の痛みは大したことはないが、問題なのはこいつらが吸血だってことだ。

このまま血を吸われ続けたら、もう動く事は出来なくなってしまう。それはまずい。

だけど、この数をどうしたらいい？

払っても払ってもきりがない。

やばい。

意識が薄れてきてる。

どうする。

このまま倒れちゃうの？

血を吸われ始めてから、一体どのくらいの時間がたつたろう。

本気で意識が遠のいてきてるよ。

「ははは！どうだ、参ったかね？」

かすかにドラクラの声が聞こえる。

「さあ我が下僕達よ！その小娘の血を吸い尽くしてしまえ！」

ははは。

吸血鬼の手下は蝙蝠か。

どこまでも安直なやつ。

やべ、笑ってもいられないや。

マジで意識がまずいし。

ああ、なんか気持ちい良くなってきたなあ。

身体が冷たいや。

傍目から見たら、きっと私の身体は蝙蝠に覆い尽くされて真っ黒に
違いない。

私はその場に膝をついた。
身体に力が入らない。

ああ、何か、ほんとに頭の中が真っ白だあ。
どうしょ、めっちゃ気持ちいいや。

私は地面に両手をついた。

もう、身体に力が入らない。
全身が冷たくなっていくのが分かった。

その時、ふと自分の右手が目飛び込んできた。
そこに握られていたのは、マイクだった。
結局なんだったんだろ、このマイク。
マイクはもう、妙な蠢きは治まっていた。

何かよく分からないけど、期待して損したなあ。
もうちょっと何か起こるかと思ったのに。

そう思うと、私は悲しくなってきた。

もう死ぬのかあ。
早かったなあ。

一回くらい、男の子とお付き合いしてみたかったなあ。
私の人生って、今まで何だったんだろ。

てか私、最近なんでこんなに死ぬ思いばっかしてるんだろ。

てか、死ぬって思ったの何回目だ？

あはは、バカみたい。

「くくく。姑息な手ばかり使いおつて。実力もないくせに。始めから大人しく死んでおけば、苦しまずに済んだものを」

ドラクラの声が近くで聞こえる。

全く、何で私はこんなにこいつにバカにされなきゃならないんだ。

私は確かにバカかもしれないけど、だからってこんなにバカにされるのは好きじゃないなあ。

あ、なんかム力ついてきた。

どうしよう。

何か、こいつ。

やっつけたいや。

私の右手が熱くなった。

さっきまで、冷たくなっていた右手が、燃えるように熱くなった。

マイクが、再び蠢きだす。

その蠢きは段々と大きさを増し、うねりと化す。
そして、私の心も燃え上がった。

私は立ち上がった。

そして、マイクを振り上げた。

ス！

ス！

ス！

三度、腕を振る。

三条の閃光が走った。

私の足元に無数の蝙蝠がボタボタと落下し、真っ黒い山を築き上げた。
た。

私の身体からは、もう蝙蝠の姿はなくなっていた。

私は自分の右手を眺めた。

普段見慣れたその腕からは、見慣れない金属が、スラリと伸びていた。

握りはマイクのそれだった。

でも、その先は見慣れない、薄く尖った金属の枝。

ギリリと月明かりを反射し、その枝は途中で大きく湾曲し、映りこむ私の顔も歪ませていた。

ショーター。

その刀剣は、そんな名前だった。

エチオピアで開発された両刃の刀剣。

人を斬るためだけに開発された、凶器。

私は、思わぬ武器を手に入れたのだ。

ゆっくりと、ドラクラを見つめた。

ドラクラの、私を見る目つきが変わった。

達人の目。

私の腕を認めた目。

私は、ゆっくりと刀身を降ろした。

腕の延長線上に、ゆったりと構える。

ドラクラも構えた。

身体を半身だけひねり、肘に余裕をもたせて手首を返す。
腰を落とし、私の正中線を鋭く捉えている。

私達は、呼吸を合わせた。

一回。

二回。

三回。

三度目の呼吸の後、私は動いた。

ドラクラも動いた。

私達は交錯し、互いに一度ずつ斬り合い、夜の公園に立ち止まった。

続く。

第十六話「覚醒」

私の思い出。

私の記憶。

普通の人生を歩んできた私。

そんなに大した人生ではなかった。

ないはずだった。

普通の建設関係の企業に勤める父と、普通の食品会社に勤める母。

そんな両親の間に一人娘として生まれ、何不自由なく育てられた。

幼稚園に通い、小学校、中学校と地元の公立に行った。

人並みに勉強し、高校に入った。

特に何か得意なことがあるわけでもなし。逆にこれといって不得意なものもない。

何でも人並みにやってきた。

これといって取り上げることもない、本当に平凡な女だと思っていた。

でも、そんな私の人生における、たった一つの特異点。

いままで、記憶の渦に埋もれていて、なかったものとされていた記憶。

それは、私がまだ幼稚園か小学校低学年の頃だった。

何かスポーツの習い事をさせようと思い立った父が、母と相談して心身共に鍛えられるようにと、私を剣道場に連れて行ったことがあった。

だけど、一度だけ行ったきり、私がその剣道場に通うことはなかった。

私の記憶には、一度行ったということしか残っていなかった。

その時、剣道場で何をして、何を見たのか、全く覚えていなかった。

その時の記憶。
今まで埋もれていた記憶。

冷たい板床。

汗の臭い。

騒然とする場内。

そして、倒れ伏す見知らぬ大人。

思い出した。

あの日、私は始めて竹刀を握り、その竹刀を使って師範の鎖骨をへし折ったんだ。

父はそれ以来、私に棒状のものを持たせないようにした。

結局その頃の私には、大したことじゃなかったし、どうでもいい記憶として頭の引き出しの奥底に押し込まれていたのだった。

音叉みたいな、甲高い響きが公園中に響き渡った。

びりびりとした振動が、腕を上ってくる。

すれ違い様に、三度切り結んだ。

その全てが相打ち。

額に冷や汗が吹き出る。

私は振り返った。

ドラクラも振り返った。

その顔には、私同様に多少の動揺の色が浮かんでいた。

真剣の斬り合いにおいて、たった一かすりでもいい、先に一太刀浴びせた方が勝つ。

小さな傷だとしても、痛みで集中力が削がれるからだ。

しかし、三度も切り結んで、全てがお互いの身体に当たることがなかった。

つまり、全くの互角。

剣道の試合などとは違い、真剣での斬り合いに三本勝負なんてない。あんなにバシバシ叩きあつて、面だ、籠手だなどと採点もクソもない。

一度きりの死闘。

その上での全くの互角。

それは同時に、この戦いが技術より、力より、精神の戦いになることを意味していた。

どちらの心が折れることなく、先に一発を叩き込むか。

だからこそ私達は動揺を隠せなかった。

既にここまで消耗しきっている今、どこまで精神を研ぎ済ませられるか。

通常時の戦闘より圧倒的に難しい。

何が勝敗に左右するか、何がきっかけになって戦況が変化するのか、全く読めないから。

どちらが生き残るか、全く読めない。

ドラクラは再び構えをとる。

奴の構えは、フェンシングもしくはそれに准ずる剣術の構え。

突きと薙ぎを主体に組み立ててくる。

その分、わずかに読みやすい。

一方私に流派や構えはない。

完全な我流の太刀筋、構え。

自然体の構えから動き始める分、動きは多少遅くなるものの、読まれにくいのは確かだ。

その点も踏まえての五分と五分。

私もゆったりと構える。

距離はおよそ三メートル。

互いに間合いのギリギリ届かない距離感。

リーチ、身長の方ドラクラの方が間合いが広い。

が、私の方が基本的なスピードが上。

その差し引きでもまた五分五分。

真夜中の公園。

動くものは何もない。

あるのは私達二人の呼吸だけ。

張り詰めた空気。

これが実戦。

不思議と恐れはなかった。

先刻までの、丸腰の時とは違う。

私にあるのは「勝つ」という気持ちだけ。

もしこれが揺らいだら、負けるのは私。

風が吹いた。

木々がざわめき、無数の木の葉が舞い上がる。
一枚、また一枚と木の葉が地面に落ちる。

そして最後の一枚。

私は動いた。

ドラクラも動く。

ドラクラが一瞬速い！

突き。

最も速いルートを通り、私の心臓を一直線に狙ってくる。

私が選んだのは、「後の先」。

つまりカウンター。

実戦経験の差から、私が先をとらない方が得策との判断。

例え動きを読まれ難くても、瞬時の対応は恐らく私とは比較にならない程卓越しているはず。

ならば、私にできることは、瞬時の判断を無効にするカウンター。

突きが、速い。

私は踏み込みながら剣を持ち上げる。

カウンターを悟られるな。

切っ先が身体に触れるギリギリが、カウンターのタイミングだ。
一瞬でも早く悟られたら、きつとこいつに私の剣は当たらない。
切っ先がジャケットに触れる。

その寸前。

私は一気に身体をひねり込む。

そして、身体の反動を利用して、剣の軌道を変える。

私の胸元を、サーベルが掠めるように通り抜けた。

同時に私の剣が、ドラクラの腹を捕らえた。
そのまますれ違いながら、シヨーテルの湾曲した刀身が深々とドラクラの中に入り込んでゆく。

私達の身体は再び交錯し、互いに背を向け合う形で、真夜中の公園に着地した。

「お見事」

ドラクラの弦きが聞こえた。

ドサリ・・・。

くず折れる音が聞こえた。

ドラクラは虫の息だった。
それでもまだ生きていた。
私はゆつくりとドラクラのそばに近付いた。
無論、得物は携えたまま。

「……完敗だ。なぜ、そんな業があるのを隠していた？」
かすれた声で私に問うた。

「別に。隠していたわけじゃない」

私は無意識に答えていた。

「まさか、この戦闘中に目覚めたとも言っのか」

「さあね」

私の答えに、ドラクラを笑みを浮かべ、すぐに咳き込んだ。

「なんて奴でしょう。ワタクシも嫌な相手に当たってしまったものだ」

「嫌なのはこっちだよ。私なんかマジで殺されかけてるんだから」
ドラクラはさらに咳き込んだ。

「ククク……」

「笑うな」

「ククク……。どこまでも甘い娘だ。まだ貴女はワタクシに命を狙われていることに変わりはないのですよ」

私は、ドラクラの顔面の真横を狙って、ショーテルを突き立てた。

「黙れ。笑うな」

「ククククク……。何が聞きたい？」

血を吐きながら、ドラクラが呟いた。

「何？」

「ワタクシを倒した特典だ。この世界のこと、聞かせてやろう。何でも好きなことを聞くがいい」

「ゲームみたいな事言ってんじゃねえ。このベタ吸血鬼が」

「フン。せつかく情報を提供してやろうと言っているのに。素直じゃない娘だ」

私は少しだけ間をおいた。

この申し出が、罷じやないと言い切れる根拠はどこにもない。
かと言つて、もし本当に情報をくれるのなら、こんなに旨い話はない。

さて、どうしたものか……。

「早くしろ。ワタクシの命は長くはない」

「……。分かった。じゃあ聞かせてもらおう」

私は考えた。

まずは、この世界についてか。

「この世界は何？なんなの？」

「……。それはクロム・ネフュー様のおっしゃった通りだ。ここは夢幻空間。夢魔クロム・ネフュー様の創造した仮想の空間。他の世界とは隔絶された、異空間だ」

「なぜ、私達がこの世界に？」

ドラクラは少し考えているようだった。

「それは……。クロム・ネフュー様はあるものを狙っている。

それを夢幻空間に引き込む事が目的だった。しかし、予想外の手違いが起こった。それが貴女方だ」

「手違い？なにそれ、ダサイ。」

「仕方あるまい。夢幻空間を作り出す行為自体、とてつもないエネルギーを要するのだ。更に目的のものを引き込むにも、多大な力を使わざるを得なかった」

「何？その、すごい力を使わなきゃならない、目的のものって」

ドラクラは再び沈黙した。

何も無い夜空を仰いでいる。

「我々の住む世界には、伝説があるのだ」

ゆつくりと語り始めた。

「絶大な力を誇る、破壊神の伝説。あらゆる破壊を司る、鬼神。そ

の神は、我々のような地上の生物に宿り、輪廻転生を繰り返し、神々の争いが起きた時や、地上が荒廃した時に目覚め、世界に破壊をもたらした新たな世界を創造する。という伝説だ」

「それが？その伝説がどう私達に関係あるのよ？まさか・・・」
「そのまさかだ」

私は急にバカバカしくなった。

そんな御伽話を信じるというのか？

バカな。

下らなすぎる。

「冗談でしょ？バカ言ってるんじゃないわよ」

「フン。信じたくなければ信じなければいい。ワタクシには関係ない。事実を伝えるだけだ」

「・・・誰？誰が・・・」

「和宮八神だ」

私の心臓が跳ね上がった。

まさかここで八神君の名が挙がるとは思ってもしなかった。

きっと、私が聖が、その破壊神つてのにとりつかれているのだとばかり。

「前回のクロム・ネフュー様との戦いに現れた騎士がいただろう。

和宮八神と、その仲間にそっくりな。あれらは、彼ら自身の精神体なのだ。彼らの肉体は既にクロム・ネフュー様の手中にある。破壊神を蘇らすためには、一度肉体から精神を引き剥がす必要があった。しかし、力を消耗していたことが災いし、引き剥がした精神体は逃げ出してしまった。

その追跡作業を行っていた時、更に残念なことに、関係のない人間が二人も紛れ込んでいる事に気がついた。それが貴女方だ。軽く始末する予定だったのに、情けないことだ」

「八神君は・・・みんなは今どこにいるの？」

「そこまでは知らない。知っていたら既に追跡している」

「その・・・身体はどこにあるのよ？あんたの言ってることが本当だとしたら」

「雨海タワー、と言ったか。貴女方の世界では。しかし、肉体を取り戻そうなどとはしないことだ。精神の抜けた肉体は、ガラスよりも脆弱だ。下手に動かせば、すぐに朽ち果てる」

「なぜ、なぜそんな事をわざわざ教える？目的は何？」

「ククク・・・。クロム・ネフュー様の言葉をそのままお借りすれば、

ゲームはフェアな方が面白い。

だそうだ。全く、つくづく遊び好きなご主人様だ。急いだ方が良い。既にクロム・ネフュー様は和宮八神の精神体の捕捉段階に入っている。もし、精神体が再び肉体に戻されれば、その時が、破壊神復活の時だ」

「どうということ？」

「一度精神を洗浄し、破壊神の精神のみを残し、肉体に戻すのだ。いかに神といえど、肉体がなければ活動できないらしい」

「破壊神の精神のみ？それって・・・八神君は」

「消える。ということだ」

私は愕然とした。

八神君が・・・いなくなる。

私は、その時もう何も考えられなかった。

「私の知っている事は以上だ。さあ、もう寝かせてくれ。意外に傷が浅かったらしい。まだ死ねない」

ドラクラはニヤリとした笑みを浮かべ、私の顔を見上げた。

私は奴の目を凝視したまま、何も考えてはいなかった。

何も考えられなかった。

「・・・た？さあ早くトドメを」

その声で、私は急に我に返った。

「何？」

私は聞きなおした。

「どうしたのだ？早くトドメを刺してくれないか」

私はその言葉に、何故か頭に血が昇ってしまった。

「トドメ？あなたに？」

「そうだ。早く楽にしてくれ」

私は、その言葉にはつきりとした答えを持っていた。

「嫌だ」

「嫌、だと？何を言っている？」

「嫌だ。死にたければ勝手に死ね。私はトドメは刺さない。まだ生きる望みがある奴を、私は殺さない」

「クククク・・・。バカな。ここでワタクシを殺さなければ、

ワタクシはまた貴女を狙いに来るのだぞ？分かっているのか？」

「うるさいな。そしたらまたやつつけるだけよ」

「・・・・・・・・・・。」

私は立ち上がった。

もう帰らなきゃ。

聖が待ってる。

ドラクラに背を向け、私は真っ直ぐに公園の門を目指した。

「どこまでも甘いよ、貴女は。貴女は弱いままだ!」

ドラクラの声が聞こえる。

私は振り返り、キツと睨み付けた。

しかし、その時には既にドラクラの姿はそこにはなかった。私は、モヤモヤした心をどこにもやることが出来なかった。でも、これだけは、何をすべきかだけは分かった。

あの時の、クロムと聖が闘った時に現れた、騎士達。八神達の精神を探さなきゃ。

東の空が明るみ始めた。

全く気がつかなかった。

私は立ち止まり、朝の空気を思い切り吸い込み、大きく深呼吸をした。

「つつくし!!!」

私は鼻をすすった。

続く。

第十七話「出だし好調」

「何はともあれ、まずは腹ごしらえでしょ」

聖はそう言つて、手際よく料理を作り上げていった。

たった一つしかないコンロを駆使して、ものすごい数のご馳走を披露してみせた。

ハンバーグ。エビピラフ。チーズフォンデュ。シーザーサラダ。コンポタージュ。クリームコロッケ・・・

聖と入れ替わりでぶっ倒れた私の為に、聖は私とは全く別の方法。全部手作りでそんな豪勢な料理を用意してくれた。

「食材を買わなくていいつてのは、何だか変な気分だね」

聖は笑いながら、小さなちゃぶ台の上にご馳走を並べた。

私の場合、聖と違い大きな外傷はなかったが、血を吸われた為、ひどい貧血状態に陥っていた。

そんな私の為に、聖はカロリーの高い、血を作れそうなものばかりを用意したのだ。

私は、ご馳走を頬張りながら、昨夜の戦闘やドラクラから仕入れた情報を話して聞かせた。

聖は静かに聞きながら、しきりに頷いていた。

ご馳走をたいらげた頃、私の話もちょうど終わりを迎えた。

「じゃあ、まずはあの時のあいつらを探せばいいんだね」

最後の一口を口に運び、私の話を総括した。

「うん、そう」

私は夢見心地で応えた。

満腹感に満たされ、私は急激な眠気に襲われていた。

「そつか。じゃあ・・・」

聖の言葉を全て聴き終わらないうちに、私の意識は深い眠りに引き込まれていったのだった。

私が目を覚ましたのは、それから数時間後の、午後一時の事だった。大きく伸びをする私に、聖はお茶を入れてくれた。

「おはよう。よく寝てたなあ」

「おはよう」

私の頭は起き抜けでも冴えきっていた。

血が戻っている感覚を充分に感じた。

めざましい回復力。

正直感動を覚えた。

私は起き上がると、すぐに出かける用意をした。

身だしなみを整え、外着に着替える。

つい昨日新調したばかりの、お気に入りブランドの服は、既にボロボロだった。

「うわゝ、ひどいな。これは」

私はボロボロになったジャケットを眺めてつい声を出した。

「ははは。ほんと、ひどいな。どこの不幸な子供だよ」

聖も笑って言った。

そんな聖は、私がか用意してきた自分のお気に入りブランドの一式を身に纏い、ご満悦な表情を浮かべていた。

「人ごとだと思ってゝ。あーあ、気に入ってたのになあゝ」

私は本気でへこんでいた。

真剣に選んで持ち帰った服なのだ。

もう少し着ていたかったのに。

「いいじゃん。また貰ってくれば」

聖があっけらかんと言ったのけた。

「いや、それはそうなんだけどさあ」

正直、なんか抵抗があるのだ。勝手に貰ってくるっていうのは。どうせ誰もいない世界だし、あの夢魔クロム・ネフューが作ったっていう世界なんだから、好きに着ていいとは思うけど。

何か罪悪感がある。

「ま、なんにしろその服じゃあみつともないよ。新しいの貰った方がいいって」

「ん？何か矛盾を感じるけど・・・」

「そう？いいじゃん、別に。自己満足でしょ？洋服ってさ」

「それはそうだけどさあ・・・」

「もういいじゃん。行くよ」

早々に話しを切り上げると、聖は既にエンジニアブーツに足を突っ込んでいた。

「早くう」

「わかったよ、もう。つてあー」

自分のウエスタンブーツを手にとって、爪先がスッパリ切れてることを思い出した。

「切れてたんだった・・・」

私はがつくしと膝をついた。

「うわっ、すっぱりだね。これはもう交換だな！」

聖はウエスタンブーツを手に、嬉しそうに言った。

私は再びショッピングモールへとやってきた。

例のブランド店へと入る。

「あんたいつもここだなあ」

聖が頭の後ろで手を組みながら、ブラブラと店内を流している。

「いいじゃん！好きなんだから」

私はもうウキウキした気分で商品を物色していた。

昨日はもうちょっと寒かったからなあ。
今回はもう少し暖かいやつにしとくかなあ。

私はちよつと薄手のトレンチコートに目を留めた。

金ボタンが綺麗な、ベロア素材の黒いコート。

襟や袖に白いベロアで縁取りがしてあるのがなんともキュート。

「ねね、聖！これどう！？」

私はそのコートを引つつかむと、パンツコーナーにいた聖のもとへ駆け寄っていった。

「ん？」

聖は形がいいと評判のデニムを鏡で合わせていたところだった。

「良くない？これ！すごいカッコイよね」

「おお、それいいじゃん！かつこいいよ。羽織ってみて」

聖の合わせているパンツは、明らかに聖には大きかった。

基本、聖の腰周りはXSサイズなのだ。

私はベルベットのコートを羽織ると、壁一面を使った特大の鏡。いや、鏡で出来た壁の前に立った。

すごいカッコイ！

私は一発でそいつが気に入った。

「いいね、似合ってるよ。最高」

聖が私の肩に手を置き、鏡を覗き込みながら言った。

私は、念の為に値札に目をやった。

「うわ、0が一個多いな。やっぱ」

「そりゃ、そうだろ。良さそうだもん、これ」

聖は襟のミシン目を確認している。

「これにしようっと」

私は、さっそく値札を取り外しにかかっていた。

「なあ要、せつかくだから他の服も取り替えとけば？」

聖の手には、先ほど聖が合わせていたデニムパンツが握られていた。

結局私は、

レースのヘアバンド風ターバン、新しい白いキャミソール。

例のベルベットのロングコートにタイトなデニム、ラインストーン
の散りばめられたゴールドの太いベルトをつけて、こげ茶の乗馬ブ
ーツに決めた。

「へへへ、もう完全にギャルだね。こりゃ」

聖がニヤニヤしていた。

「なに？なんか文句ある？」

「別に」。いいんじゃない？要って、本当はこういう趣味だったんだ
、と思つて」

「仕方ないよ。普段はお金ないから、こういうの手も足もでないし」
「そりゃそうだな」

聖は私のお尻をパシッと叩いた。

「痛っ！」

「ほら、行くよ！」

私達は颯爽と外へと踏み出して行った。

数十分後、私達は駅前通りのオフィス街方面。

先日、聖とクロム・ネフューが激突した場所へと舞い戻っていた。

八神、海、桜の精神体だという騎士たちが放り込まれた喫茶店の残骸が、戦闘の跡を生々しく記録していた。

「ここがあいつらを最後に見た場所だよな」

聖が、瓦礫の一部に足を乗せて言った。

「うん。もしかしたら、まだこの中に埋まっているかも」

私は、瓦礫の隙間をじつくりと覗き込んだ。

「どうしよう、私達の力じゃあ、こんな大きな角材やコンクリート片をどかすなんてできないし・・・」

「ああ・・・要、何か聞こえないのか？」

私は耳を澄ましてみた。

聞こえるのは、遠くで風の鳴く音だけ。

「何も聞こえないよ？」

「そうじゃないよ。心の声は聞こえないのか？って意味」

「ああ！そおか！」

私は照れながら頭を掻いた。

「ちょっと待って・・・」

私は再び耳を澄ませた。

「ん・・・・・・」

「んんん・・・・・・」

「ダメだね。特にこれと言って何も聞こえない」

「そっか」

聖はゆつくりと瓦礫を持ち上げた。

「え？まさか、地道にこの瓦礫をどかすの？」

「それしかないっしょ。よい・・・しょ」

聖は手近な角材をゆつくり持ち上げると、歩道の方へと転がした。

「うーん、それしかないね。よし！頑張ろう！」

私も持ちやすそうなコンクリート片に手をかけた。

「うわ！重、だい！」

「そりゃ一人じゃ無理だよ。一緒に持とう」

私達はゆつくりと喫茶店の瓦礫をどかしていった。

それから何時間たつたろう？

喫茶店の残骸は、なんとか半分程度は片付いてきていた。

それでも店の奥、三人が投げ込まれたであろう場所にたどり着くまでは、まだまだ遙か遠かった。

「全然だめだ」

私は額に浮かんだ汗の玉を腕で拭った。

二人とも、既に上着は脱ぎ、キャミソールだけで作業に没頭していた。

「つたく。せつかくの服が汚れちゃうよ」

聖が途切れ途切れに呟いた。

「ホントだね」

私もその意見に激しく同意した。

私はその場に腰を降ろした。

「ちよっと休憩しようか」

聖もそう言って私の隣に座り込んだ。

「それにしてもさあ」

「ん？」

私は、兼ねてから疑問に思っていた事があった。

「いや、ちよつと思つたことがあつただけど・・・」

「何？」

「ん・・・」

「何よ？早く言いなつて」

「二日もこんな瓦礫の下に埋もれていて、生きてるのかな？」

二人の時間が止まった。

「・・・いや。それは・・・」

聖が口籠もつた。

「あ、うん。いや、多分大丈夫だよな？」

私は焦つた。

「ドラクラは、クロム・ネフューがもう捕らえる準備は出来てるみたいなのを言っていたし、多分大丈夫だよ！」

「・・・だといんだけど」

聖が元氣なく呟いた。

八神は仮にも聖の恋人だ。

不安になつて当然だ。

しかも聖にとつては、八神はこの街で唯一の家族も同然な人物。心の拠り所がもしかしたら死んでしまったなんて、仮定でも考えたくないはずだ。

「ごめん……」

私は、力なく謝るしかなかった。

「いいよ。きっと大丈夫だ。きっとあいつらは生きている」

「そうだね。そうだよね！」

「ああ。それに、あの騎士はあいつらの精神体なんだろう？じゃあ、きっと瓦礫に埋もれて死んだりはしないでしょ」

聖は私の目を見ながら言った。

その目には言葉とは裏腹に、力も輝きもなかった。

「うん、きっとそうだよ！」

私は、出来る限り元気な風を装って、聖に返した。

「でも……」

聖が急に口籠もった。

「精神体って……なに？」

風が吹きすさんだ。

「いや……」

私も口籠もった。

「なん……だろーね？」

私の目は点になったと思う。

聖の目も点になっていた。

「ドラクラがそう言っただけで、私も具体的には知らないんだよね」
私は頭をフル回転しながら、聖に答えた。
精神体ってなんだ？

ファンタジー小説やマンガ、ゲームではよく見るけど、具体的にはなんだ？

要は、身体から精神っていうか、心だけが離れている状態なんだろう？
幽体離脱みたいなものなのかな。

きつとそうだな。

そうに違いない。

「多分、幽体離脱みたいなものなんじゃないかな？ゲームとかでは
そくだよ」

私は別の意味で汗をかきながら聖に向かって拳を握り締めた。
正直なところ、自分を納得させる為にも拳を握り締めた。

「ゲームねえ。あたし、あんまりゲームとかやったことないんだよ
ね。そんなもんなの？」

「う、うん。大体は」

「そっかあ」

私は立ち上がった。

「さあ、グダグダ言っでないで、さっさと仕事に戻ろう！」

「いつから仕事になったんだよ」

聖が冷静に突っ込んだ。

「もうその必要はない」

私達の背後で、聞き覚えのある声がした。

！！！！！！

私達は、思い切り振り返った。

そこに立っていたのは、他でもない、和宮八神そのものだった。

「八神！！！！！」

「八神君！！！！！」

私達は同時に悲鳴を上げた。

よく見るとその隣には、海、桜の顔も。

しかし格好だけは、あの時のまま、色とりどりの鎧を身に纏ったままであつたが。

私達は急いで三人に駆け寄った。

「八神！どこにいたんだよ！」

聖が八神に抱きついた。

私は、その後ろで立ち止まり、それ以上前には出られなかった。

聖はしきりに八神の胸板に顔をこすり付けていた。

「や、やめたまえ！君！」

八神の意外な反応に、聖は顔を上げた。

「え？」

「ふ、婦女子が他の人間の目の前で・・・」

八神は聖の肩に手をかけ、自分の身体から聖を引き剥がした。その顔は、真っ赤に染め上がっていた。

「八神君・・・？」

私は、八神の顔を覗き込んだ。

「わ、わたしの名は八神などではない！我が名はハデス。偉大なる皇帝、ゼウスの騎士なるぞ」

しきりに咳払いをしながら、八神は平静を取り戻そうと必死な様子だった。

「ぶつ」

その仕草があまりにも可愛らしく、私は思わず吹き出してしまった。

聖の肩も小さく動いた。

「あはははははは！！」

「はははははは！！！！」

私達は大きな声で笑った。

「なっ、何がおかしい!？」

八神が慌てふためいている。

「ははははははは！！！！！はー、はー」

「はあ、はあ、はあ―」

私達はさんざん笑った。

啞然とする三人を尻目に、私達はしばらく笑い転げてた。

もういいや。

こうやって笑っていたい。

なんとなく緊張の糸が途切れて、私達は気の済むまで笑う事にした。

続く！

第十八話「ステップ1」

雨海ロイヤルホテル

雨海駅のほど近く。地上30階建て。

世界各国の著名人が雨海に訪れた際は、必ずここに宿泊するという老舗の名門ホテルだ。

私達五人は、その広いロビーに腰を落ち着けた。

広くて見晴らしのよい場所。

奇襲に備え、三人の騎士達が選んだところがここだった。

「さて、何から話そうか」

こういった高級ホテルには、ロビーに併設してレストランやカフェがついているものだ。

私は聖と共にそこからくすねてきたコーラの瓶に口をつけながら言った。

向かい合わせのソファに腰掛けた私達の目の前には、甲冑を装着したまま背筋を伸ばして、リラックスの欠片もない騎士たちの姿。

「ちよつとは力抜きなよ」

足を組み手すりにもたれてだらけきった姿勢で聖が言った。

それはちよつとダラダラしすぎだろ・・・。

とは言え、目の前にあるコーラの瓶も汗をかいたまま、彼らは手すらつけてはいなかった。

「とりあえず、ジュースくらいは飲んだら？」

私もちよつと息苦しさは感じていた。

「いや、結構だ」

海のような男が堅苦しい口調で言った。

「あ、そう」

聖はそういうと、正面に座る桜のような女の瓶を手にとると、口をつけた。

桜のような女は微動だにせず、その行為を見送った。

・ ・ ・ ・ ・ 気まずいなあ。

「貴公らは、何故我々を探していたのだ？」

海のような男が口先を切った。

「うゝん・・・」

私は困ってしまった。

どうするんだ？これ。

何がどうなっているんだか、さっぱりだ。

私達の認識と、彼らの認識。

どこまでが一致しているのか全く分からない。

どこから話すべきなのがさっぱり分からないのだ。

「あゝ・・・どうしよ。何を話せばいいんだろ？」

私は聖の顔をちらりと確認した。

聖は相変わらずコーラの瓶を弄びながら、明後日の方を向いたままだった。

何だよ。何をふてくされてるんだ。

私は少しだけムツとした。

「とりあえず、自己紹介から始めようか。私是要。大和要」

「何故だ？貴公らは我々を知っていたからこそ探していたの难道是なのか？」

海のような男が口を開いた。

私は更にムツとした。

「私達はあなた達を知っているけど、それは見た目だけ。実際にはかなり食い違いがあるし、まずはそこから確認していかなくちゃ話

しは進まないと思っっているんだけど」

自分でも思わず挑戦的な口調になってしまった。

「・・・・・・・・」

海のような男は押し黙ったままだった。

しまった、機嫌を損ねたかな？

何だかプライド高そうだしなあ・・・・・・・・。

どうしよ。

「あ、いや、別に怒らせるつもりは・・」

「分かった」

私の言葉をさえぎって、海のような男は口を開いた。

「貴公らも、奴に命を狙われていた様子。敵か味方かを見極める為にも、お互いの素性は明かしておいた方がよいだろう」

んん、どこまでも堅い物の考え方だな。

まあいいか。

「よかった、分かってくれて。改めて私は要。よろしくね」

「我が名はポセイドン。偉大なる皇帝ゼウスの騎士団、オリンポスの団長を務めておる」

海のような男はこう言った。

「こちらの二人は・・」

ポセイドンの振りで、両脇に控えていた桜、八神のような人物たちもようやく口を開いた。

「我が名はジュノー。偉大なる皇帝ゼウスの騎士団、オリンポスの団員である」

「我が名はハデス。同じく、偉大なる皇帝ゼウスの騎士団の一員である」

桜がジュノー、八神がハデスか。

だいぶ適当なネーミングだな。

実際の神話を完全に無視した上下関係。

しかも、違う神話のネーミングまで混じってるし。

ま、いいか。

「それで、そちらは？」

ポセイドンが聖を視線で示した。

聖は未だにそっぽを向いたままだった。

「どうしたんよ聖、さつきから。何が気に入らないの？」

私はいい加減じれったくなって、聖の手を掴んだ。

「うるさいな！」

聖の手が私の手をはたいた。

私は、正直驚いた。

まさか聖がここまでイラついていたとは。

「聖……」

「うるさいんだよ！何がポセイドンだ！何がジュノー！？何がハデスだよ！あんたは海だ。お前は桜！お前は八神だろ！？そうじゃないのかよ！」

聖が声を荒げた。

「聖……」

私は何も言えなかった。

気持ちに分かる。

この世界に来てから、訳の分からないことだらけだ。やっとの思いで仲間たちを、ヒントを見つけたのに、肝心のそいつらは全くもって訳の分からないことを口走るばかり。しかも、このあまりにも堅苦しい態度。理屈っぽさ。そして何より、八神の命がかかっている焦り。

元来、あまりじっくりとした話し合いの苦手な聖が爆発するのも無理はない。

「聖、気持ちは分かるよ。でも落ち着いて。まずは、きちんと話し合わなくちゃ」

私は聖の肩に手をおいた。

聖の身体は微妙に上気していた。

「……………。」「ごめん」

聖が呟いた。

「ごめんなさい。話しを続けましょ」

ポセイDONは頭を振ると、聖から私に視線を移した。

「ふむ。それで、そちらの素性は？」

私はこの世界にやってきた理由、来る前の身分、そして今までの経緯を軽く説明した。

特に来る前の部分の話しが長くなった。

ポセイDON達は、海であり、桜であり、八神であった頃の記憶が全くなくなっていた。

であるからして、私達の住む現実世界のことを説明している間、その固有名詞や行為自体を逐一質問してくるのだ。

正直、相当メンドーだった。

だが、逆にこいつらが完全に、私達の仲間る三人とは別物の人格であることが明らかにはなった。

「ふむ。貴公らはそんなに奇妙な世界からやってきたのか。なるほど、聞きなれない名も、文化の違いというものだな。要とそして・

・・」

「聖。和戸聖」

そういえば、聖は自己紹介をしてなかったんだった。

「聖か。ようやく貴公らを理解してきたぞ」

ポセイDONの顔がようやく緩み始めた。

同時に、両脇の二人の顔も緊張が解けた様子であった。

「いやはや、本当は貴公らを警戒していたんだ。あの夢魔と出会って、普通に生きていたのだからな。我々をおびき寄せるため、夢魔の仕込んだ畏の疑いもあった」

「畏って……」

私はハツとした。

そうか、そういう考え方もあるのか。

目から鱗だった。

「畏か。そしたら、あんた達も夢魔の畏だって可能性もあるわけだね」

聖がギリりと目を輝かせた。

うわ、何て怖い目。

演技だとは思うけど、それを感じさせない冷たい目だ。

その視線を感じてか、ポセイDONは聖の方を向き直り話し始めた。

「いいだろう。今度は我々の番だ。我々は、遙か海の彼方の大陸を治める大帝国ミュートロギアからやってきた。ミュートロギアは偉大なる皇帝ゼウス様が・・・」

それからその説明は延々と続き、国の創設、三人の出会いから、果ては家で飼ってるペットの話しまでに及んだ。

聖は、というか私もだが完全に飽きていた。

何なんだ、この話しは。

こいつらはあくまで八神、海、桜の精神体なはずでしょ？

本体と一体だった頃の記憶や、人格が残っていないのはまだ許せるけど、ここまで荒唐無稽な作り話はどっから仕入れているんだ。

何が基になって、こいつらの記憶となりえたんだろう。

しかも、かなり事細かな記憶。

本当に不思議だ。

本当に私達とは全く違う世界の住人が、目の前で話しをしている様な錯覚にすら陥ってしまう。

聖は、ジュノーの分のコーラも飲み終わると、その瓶を指の上で器用に回転させている。

「・・・という訳だ」

自分が見習いの頃の面白話（全く面白くない話）が終わり、ようやくポセイDONの話が終わった頃には、聖は今にも眠りに落ちる瀬戸際だった。

「そういえばこんな話もあった」

「あー！！もう大丈夫、もう分かった！」

更にポセイDONは続けようとした所を、寸でのところで食い止めようと私。

「貴様！団長のお話はまだ途中であるぞ！」

ジュノーが声を荒げた。

その声で、聖も目が覚めたらしい。

「どうした？もう終わったの？」

「貴様、まさか寝ていたのではあるまいな！？」

ジュノーがいきり立った。

「ん？寝てはいないけど、聞いてもいなかったよ」

聖が平然と言つてのけた。

「きつさまゝ・・・」

「まあまあまあ」

私は焦つて二人の間に入った。

「大丈夫、ちゃんと聞いてたよね？そうだよ？ポセイDONさん、ありがとう。とても為になりました」

私はとりあえずその場を収めようと、思つてもいないことを口走つた。

「では、我々の出会いの場所はどこであつたか言ってみるがよい」

「はあ！？」

ジュノーの思いもよらない突っ込みに、私は啞然とした。

マジっすか。

そんなの全然覚えてない。

「いやいやいや。それは・・・」

「ほら見る。聞いてないではないか！」

ジュノーが更に突っ込んでくる。

「待て待てジュノー。確かに話が長すぎた。申し訳ない」

ポセイDONがジュノーの方を抑えて止めに入ってくれた。助かった。

まさかそんな子供みたいな問題をだして、私達が話を聞いていたか確認してくるとは思わなかった。

「しかし団長……。ハデス！お前もなんとかいってやれ」

「……………ぐ……………」

「貴様！！ハデス！！！！」

私と聖は大爆笑だった。

「ふむ。結局のところ、我々は貴公らの友人達の精神であり、実在しない存在、というわけか」

やっとこさ、私の仕入れた情報を三人に伝えきった頃には、辺りは軽く白んでいる頃であった。

「一概には信じられないな」

ハデスは、卓上の皿からワインナーをつまみ上げると、その口に放り込んだ。

私達は話し合いのあまりの長さに、途中で腹ごしらえの為に、レストランの厨房で夜食を用意していたのだった。

「ふむ。確かに。だが、思うところもある」

ポセイDONはワインを一口で飲み干した。

「何がです？」

ジヌーノは団長のグラスにワインを注ぎながら尋ねた。

「俺が夢魔の触手に全身を貫かれたであろう。俺はあの時、死を覚悟した。しかしどうだ？実際には目が覚めた時、俺の傷は何事もなかったように完治していたであろう？それに、あの瓦礫に押しつぶされながらも、我々は無傷で脱出が出来た」

「確かに」

ハデスは次のワインナーに手を伸ばしていた。

「それは、我々に実体がない。という事に繋がるのではないか？」

意外に飲み込みが早かった。

私は霜降りの和牛ステーキを一欠けら口に入れると、そのさっぱりとした脂を楽しんだ。

「多分そうね。それに、夢魔の言葉を借りれば、あなた達が空間を移動しての戦闘が可能なのは、それは多分実体がないから」

「うむ。それも説得力がある」

ポセイドンは、聖のグラスにコーラを注ぎながら呟いた。

「でも、いいの？そんなに簡単に受け入れて」

聖が尋ねた。

ま、確かに。

あそこまで鮮明な記憶を持ちながら、それがいきなり全部虚像でしただ。なんて言われても、そう簡単に納得できるとは思えない。

ましてや、この騎士たちには騎士としての人格すらある。

そのプライドの高い騎士たちが、いきなり自分の存在を否定されるなんて、屈辱以外のなにものでもないだろう。

「うむ。やはり我々として、簡単に納得は出来ん。確かに思い当たる節はあるがな。ならば答えは一つだろう」

「自分たちの目で、真実を見極める」

ポセイドンに続き、ハデスが口を開いた。

ジュノーもそれに相槌を打つ。

「でもさ、どうするんよ？あんたが一番のキーパーソンなんだよ？もし下手に動いてあんたが捕まれば、破壊神は復活して八神は消える。大体、どうやって見極めるかも分からないじゃん」

聖が鋭いツツコミを入れる。

「それはそうだ。だが、今は全く何も分からない、手探りの状況だ。何もしないよりは、何かをした方がマシだ」

ジュノーも鋭くきりかえず。

「でも、本当に何も分からないね。八神の本体に精神体が戻った時、破壊神が復活するんでしょ？それって、もう既に八神が本体には戻る事が出来ないって事なのかな。それに、海と桜は、普通に精神体

が戻っても、何も起こらずに普通に戻るのかな」

沈黙が起こった。

私も思っていた事を全て口にしてみたが、何も生み出さなかった。つまりは完全な行き詰まり。

どうする事も出来なかった。

「結局よ、待つしかないんじゃないの？」

聖は食事を終えると、立ち上がって伸びをした。

「そうだね」

私は最後のステーキを飲み下すと、ナプキンで口を拭った。

騎士の三人も、それぞれ食事を終えると、各々立ち上がり武器の入れを始めた。

「準備はオツケー？」

私は皆に声を掛けた。

それぞれが頷いてみせる。

「じゃあ、いくよ。道路側の窓際に5体、フロント側に3体、レストラン側に4体。計

12体だね。本体の声は聞こえるけど、今はどこにいるか分からない。とりあえずこんなところかな」

私達はソファを背にして丸く囲み、各々の担当地区を確認しあった。私と聖は窓側。ポセイドンら三人はホテル奥の方面。

「で、結局何が来るのさ？」

聖が足首を回しながら、私に尋ねる。

「さあ？そこまでは分からない。でも、何かを操ってるらしいのはわかるよ」

「ふーん、そっか」

ばりーん！！！！！！

甲高い音と共に、道路側の窓ガラスが弾け飛んだ。
重い金属音擦れるような音が私の耳に届いてくる。

「歩いてるな」

聖が私に言った。

「歩いてるね」

私も返した。

私達を囲むようにして、窓から、ホテルの奥から、金属音が近付いてくる。

それは、巨大な鎧だった。

ポセイドンたちが身につけているような、大型の甲冑。

プレートメイルとでもいうのか、頭までフルフェイスの兜で覆われた巨人たちが、地響きと共に私達の前に現れた。

「でっけえ〜鎧!」

聖が感嘆の声を上げた。

「油断するなよ!」

後方でジュノーが声を張り上げる。

「当然」

聖がニヤリと口角を上げたのが分かった。

瞬間、聖が動いた。

速い。

先日の戦いよりも、そのスピードは更に上がっているように思えた。

一瞬で鎧の一人の背後に回りこむと、側頭部に向かってハイキックを蹴り上げた。

ガゴ!!!

聖のエンジニアブーツに仕込まれた金属と、兜が当たる音と共に、蹴りを食らった兜が吹っ飛んだ。

「あっ！！」

私は思わず悲鳴を上げていた。

「頭がない！？」

蹴った本人である聖も声を上げた。

その時だった、鎧の胴体部が180度旋回し、同時に聖に向かって遠心力たつぷりのラリアットが叩き込まれた。

「つてえ！！！！」

そのラリアットを瞬時に持ち上げた膝でぎりぎりガードは間に合ったが、聖は苦悶の声を上げた。

聖は踏ん張っていた方の足で飛び退くと、窓際ギリギリまで後退し、しきりに膝を摩っている。

「いったあゝい！！！！痛い！！！！くあゝゝゝ！！！！！！」

わめき散らしていた。

「聖！！！！」

私は彼女の名を呼んだ。

「いや、金属で殴られたからさ、マジで痛いよ。これ。とんでもない攻撃力だよ」

聖は再び構え直した。

「しかもこいつら、中身なしだぜ」

鎧は既に下半身も聖の方へと向き直り、聖に向かって歩き出すところであった。

「うゝん、やばいかも」

私はマイクを握り締めると、力を注ぐイメージを行った。

一瞬体温が下がる。

次の瞬間には、湾曲した刀身を持ったショーターが誕生していた。

「要！」

聖が私の名を呼んだ。

「お手並み拝見だね」

聖が再び走り出した。

私も走り出した。

続く

第十九話「経験」

私は身をかめ、鎧の足元へと滑り込んだ。

すれ違いざまに鎧の膝下、関節部分に必ず必要になる隙間に剣の腹をあてがった。

同時に私の頭上では聖の弾力たっぷりの飛び蹴りが、鎧の背を捕らえているところであった。

私の刀身は膝の関節をやすやすと切り裂いた。

聖の蹴りが、鎧に衝撃を与えた。

グゲ・・・

聖の足が一瞬だけ膨れるのを目撃した直後、足を失った鎧の上半身は、とんでもない勢いで弾き飛ばされていった。

「どうだ！こいつめ！」

言いながら、聖は私のすぐ脇にしなやかに着地した。

鎧は、ロビーの奥まで吹き飛んで、大理石の壁に激突し、虚しく崩れ落ちていた。

それを確認すると、私と聖は他の二体の鎧の方へと向き直った。

「聖、気をつけて」

私は声を抑えて聖に警告した。

「どうかしたの？要」

「うん、あの鎧、切ってみて分かった」

私は自分の右腕に伝わってきた、なんとも言えない軽い感覚を思い出していた。

まるで、手ごたえのない感触。

それは、切ったと言うよりも、通り抜けたと表現した方が正しい。

「こいつら、中身がない」

私が言い終わらないうちに、聖は既に二体目の鎧の胴体部を蹴り飛ばしていた。

今度は、腰の関節部分から真つ二つに割れ、上半身だけ吹っ飛ばされていった。

「確かに、こいつらがらんどうだね。しかも見た目程には頑丈でもないじゃん」

聖はにやりと笑いながらこちらを振り向いた。

「楽勝だぜ。スピードもない、頑丈さもない。まるっきり雑魚だよ、こいつらは」

にこやかに話す聖。

私はその姿に妙な違和感を覚えた。

奇妙だ。

下半身だけになった鎧の抜け殻。

そいつが、聖の背後で倒れずに立ちすくんだままだったのだ。

「どうした？要」

おかしい。

あんな衝撃を受けて、上半身を吹っ飛ばされたのに、なぜあの下半身は立っていられるんだ？

昔、近所に住んでいた男の子の家には、大人気シリーズのアニメに出てくるロボットのプラモデルが本棚にいくつも飾ってあった。

私が遊びに行った際、誤ってその本棚に軽くぶつかって、ほとんどのプラモデルを落としてえらい剣幕で怒られた記憶がある。

二本足で立っている「物体」というものは、それだけバランスが悪いということだ。

なのに、あの下半身は平然と立っただけだ。

つまりそれは、私達人間同様に、自分で常にバランスをとっているという事に繋がるのではないか？

私がそれに気付いた瞬間だった。

鎧の下半身の右足が、音もなく聖に蹴りを放ったのだ。

「あ・・・」

私が声を出した時には、鎧の蹴りは既に聖の背を捕らえていた。

と、思った。

ふっ・・・

聖は音もなく身をひねってその蹴りをかわすと、遠心力をたっぷりと乗せた回し蹴りを下半身に向かって炸裂させていた。

ガゴン！！！！

エンジニアブーツの厚い靴底が、下半身の下腹部辺りにめり込むと、今日一番の快音をたて、上半身以上に軽快に鎧を吹き飛ばしていた。

「甘いんだよ。あたしに不意打ちなんざ百万年早い」

聖は流れるような動きで着地すると、ゆっくりと構えの姿勢を取り直した。

「すげえ！！聖、すごい！！！！」

私は思わず悲鳴を上げ、聖の下へと駆け寄った。

「すごい！すごい！どうやったの！？今！」

私は本気で興奮していた。

聖はゆったりと髪をかき上げてみせると、にっこりと微笑んだ。

「ふふふ、成長してるのは要だけじゃないってことだね」

「ど、どういう事！？教えて！」

「ふふ〜ん。まだ内緒！」

聖は意地悪く笑うと、他の鎧へと向き直った。

「さあ次はあいつだ。さつさとやっちゃおう」

言うと、聖はまた私のお尻をはたいた。

「つたいな〜。セクハラだぞ」

私も再びショーターをゆったりと足元に垂らした。

ふたり同時に、次の鎧に向かって走り出した。

私の中に、何か力強い感情が生まれている事に気が付いた。

聖が、私の聖が戻ってきた。

私にとっての聖が。

強い聖。

いつも私の一步も二歩も先を歩いて、私を引っ張ってくれていた聖。私の知らない何かをいつも隠していて、いつも飄々と何でもやってのける聖。

私にとっての聖が戻ってきた。

私は、嬉しくて涙が出そうだった。

でも、もう泣かない。

もう充分泣いたんだから。

私は、聖と共にこの困難を乗り切るだけだ！

先の二体を見て学習したのかは知らないが、鎧は胴体部にぴったりと左腕をあてがい、ガードしつつ、右腕でロングフックを繰り出してきた。

私の先を走っていた聖は当然その大振りの拳を軽く避けると、そのまま鎧の足元へと潜り込むと、腕で身体を持ち上げて、ガードしている左腕に向かって両足で蹴りを打ち上げた。

聖の鋭い一発が、左腕のガードを跳ね上げた。

すかさず、私はがら空きになった胴体に、ショーターを滑り込ませ

た。

「またもや何の手ごたえもなく、鎧の胴体は下半身と離れ離れになった。」

「せーの！」

「せーの！」

「私達は同時に掛け声をかけると、聖は下半身を、私は浮き上がった上半身を、それぞれ蹴り飛ばした。」

「この鎧もまたとんでもない速度で吹っ飛ぶと、窓ガラスがあった場所を通り過ぎ、朝焼けの街中に転がっていった。」

「しつやあー！」

「私達は同時に叫ぶと、左手と左手でハイタッチを交わした。」

「私は、ロビー奥を担当している三人の様子が気になった。」

「しかし、その心配は無用のものだった。」

「夢魔相手には惨敗を喫していたが、彼らの実力は本物だった。」

「それぞれ思い思いの武具を手に、次々と鎧たちを蹴散らしていた。」

「ポセイドンは長い槍を。ハデスは西洋の大鎌を。そしてジュノーは大きな盾を持って戦っていた。」

「そのコンビネーションは華麗の一言。」

「ジュノーを中心に据え、敵の攻撃はジュノーの盾で防ぎ、ポセイドンとハデスのリーチの長い武器で盾の影から攻撃する。」

「多少卑怯に思えるが、多数の敵を相手にする際には、動き回る事がなく体力温存にもなり、非常に効率的な戦闘方法だ。」

「要、ボーっとするな」

「聖の声が私を現実に取り戻す。」

「鎧たちの動きは遅いし、対して強くはない。」

「だが、それでも油断してはいけない。」

という事を気付かされた。

足に物凄い衝撃が走ったのを感じ、私はその場にしゃがみこんだ。見ると、私の足を鉄のブーツがしきりに蹴飛ばしているのだ。

「何！？これ！？」

鉄のブーツに見えたそれは、私が一番最初に切った、一体目の鎧の膝下の部分だったのだ。

「ちょ、ちよつと！聖！！」

私は悲鳴を上げながら立ち上がると、その鉄の足を蹴り飛ばした。

「こいつ、まだ生きてるのか！？」

聖の声に反応して、前方に目をやると、先ほど真つ二つに分解したばかりの鎧の上半身・下半身がそれぞれが個別に動き出していたのだ。

上半身は腕で身体をひきずるように、下半身はすつくと立ち上がり、こちらへ向かって歩みを進めてくる。

「ちいつ！どつりで手ごたえがないはずだ。簡単には倒させてくれないってことか」

聖の歯が、私の耳に届くくらいの大きさで軋む。

「どうしよう、聖」

私は弱々しく聖に呟いた。

「要・・・」

聖が私の方を振り返った。

「あんた、あの鎧は斬れるの？」

「・・・まだ、無理」

私は正直に言った。

私のショーターは、正直言つて斬鉄向きじゃない。

肉を斬るために、極度に湾曲させて打っており、その湾曲は盾によつての防御を無効にする効力もある。

だが、その奇形さ故に剣自体の強度は日本刀などの直刀に比べて著しく低い。

その為、斬鉄に用いた場合、正しく力が伝わらずに、場合によって

は剣自体が折れてしまう可能性すらある。

そして何より、私自身の経験とスキルが足りなすぎる。

先日も、斬鉄が可能な程の達人であったドラクラを何とか退けはしたが、正直なところ、剣技同士の決戦で勝利出来たことは奇跡に近い。

そのくらいに、斬鉄という技術は高度なのだ。

「じゃ、どーすんのよ」

聖が恨めしそうな視線を向ける。

「どーしょー」

私達の苦悩を全く無視し、まだ無傷なままの二体の鎧が私達に迫ってくる。

「くっそ。なんなんだ、こいつらは！」

聖は手近な一体の胸部に向けて横蹴りを放った。

ガコンという音と共に、鎧はバランスをくずして後ろから迫ってきたもう一体にぶち当たる。

シュッ！

その背後から、空を切る音と共に何かが私達目掛けて飛んでくるのに気付いた。

兜！？

背後で這っていた鎧の上半身が、私達に向かって自身の兜を投げつけてきたのだ。

私はギリギリその兜の襲来に反応できた。

しかし、聖は蹴りを放っていたために、兜が飛んできた方向とは反対側に顔が向いてしまっている。
完全な死角だ。

そして、私より手前にいるのは聖。

このままでは聖の頭に直撃してしまう。

しかし、飛来物の速度が速すぎて、私が彼女に危機を知らせるまでには兜は聖に当たってしまう。

まさに絶体絶命！

私が青ざめた瞬間だ。

聖は全く振り返ることもせずに、少しだけ、ほんの少しだけ頭を動かした。

ほんの少しだけ。

兜は聖の後頭部すれすれをかすめると、私の目の前を通り抜け、ロビーの天井にぶつかって、厚い絨毯の床に無造作に落ちた。

「え？」

私は驚愕した。

「何？今の・・・」

私は無意識に声を漏らした。

聖は私には振り返りもせずに、先ほど蹴り倒した一体の頭部を再び蹴りつけた。

またもや兜だけが吹っ飛んだ。

しかもその兜は弾丸のように、今さっき兜を投げつけてきた上半身だけの鎧に向かって真っ直ぐに飛んでいった。

ガギッ！

鈍い音をたて、兜は這いつくばった敵にうまく直撃した。

「当たったー！！」

聖が、まるでゲームか何かのように嬉々とした声を出した。

「これが私の能力だよ」

聖は視線をまっすぐ敵から逸らさずに、私に対してそう言った。

「あんたが相手の心の声が聞こえるように、私はこの身体で風を感じる事が出来る。それが私の能力さ」

「か、風？風を感じる？」

「そう。ほんとに小さな風でいいんだ。むしろ、空気の流れかな。

空気の流れはすごいよ。大きさや形、温度まで何でも分かるからね。」

「

そうか、そういうことか。

私は大いに納得した。

だから、最初に背後をとられた時も、振り返りもせずに反応できていたんだ。

それは正に聖のためにあるような能力。

聖のレスポンスやセンスは、夢魔との戦闘において実証済み。

その聖が、事前にどの方向からどんなスピードで、どの程度の大きさのものが来るのかを感じることが出来れば、全ての攻撃を避けるもそう難しいことじゃない。

使い方によっては無敵にもなれる能力じゃないか。

「すごい……。聖、やっぱり聖はすごいよ！！」

私は嬉しくなった。

やっぱり、やっぱり聖はすごい！

「これは絶対に負けないよね！私達は絶対に負けないよ！」

私は興奮して言った。

もう、本当に嬉しくてたまらなくなっていた。

「それは、どうかな」

そんな私に反して、聖の声は至って冷静だった。

「まだこいつらの弱点さえ分からないんだ。あんまり手放しでは喜べないよ」

ちえゝ、なんだよ。

もうちょっと喜んでもいいのに。

でも、確かに今の私達にはこの鎧達の攻略法が全く思いつかない。
今のところの戦闘でも、これといって弱点らしき点も見つかっていない。

さて、どうやって戦うべきか……。

私は再びロビー奥、ポセイドンら三人の様子を確認した。

三人は、先ほどまでの陣形を崩さぬまま、淡々と戦い続けていた。
しかし、私達の戦闘とは、目立って違う点があった。

それは、明らかに敵である鎧の数が減っているのだ。

始めは7体いた鎧たちは、今では動いているものは残り2体にまで
激減していた。

私はその戦闘に注目した。

何をしているんだ？

どうやってこの鎧たちを減らしている？

鎧の一体が、拳を放った。

ジユノーの盾がその拳を受け止める。

すかさずポセイドンの槍が盾の陰から飛び出し、鎧の腹部、鉄板の
ど真ん中を一気に貫いた。

すると、鎧はそのままバラバラに砕け散り、再び動くことはなくな
った。

ハデスは別の方法を使っていた。

最後に残った一体の兜を鎌で刈り取ると、鎌をひらりと翻して、兜
のなくなった空洞の胴体に刃先を突っ込んだ。

と同時に、最後の鎧もその場に崩れ落ちていった。

このふたつに共通する点は……

「聖、多分こいつらの弱点は胴体の中だよ。今、ポセイドン達のは
ってるの見て分かった」

「胴体？胴体って、あの鉄板の中なの？」

「多分そう。中に何かあるんだ」

「中って言ったって、どうやって中を攻撃するんよ？」

私はハデスのやっていた方法を踏襲することに決めていた。

「聖が頭を飛ばしてくれたら、私が中に剣を突っ込んで倒すよ」

聖は私にっこり微笑みかけてきた。

「へへ。いいね、その表情」

聖が右手の親指を立てて、私の方へと差し出してきた。

「任せるよ」

そして言った。

私もその右手に自分の右手を合わせて、親指をくっつけた。

「任せてよ」

私達は手を離し、再び鎧に向かって走り出した。

続く

第二十話「死角と刺客」

聖の戦闘におけるセンス、勘は実に天才的だ。

そのレベルは、いち女子高生の域を遥かに超越していた。

基本的なスピード、レスポンス、フィジカルの強さは今までの戦闘で既に証明済み。

そして特筆すべきは、その判断・決断力、経験値の高さ。

過去、喧嘩などにおける経験が、聖にこれらの力をつけたのであるう。

そしてここに来て、更に加わった新たな能力。

空気の流れるを感じる能力。

これには少し語弊がある。

正確には異常進化した「触覚」。

あらゆる部位の触覚が極限まで研ぎ澄まされ、それが結果として微かな空気の流れまで敏感に察知しているのだ。

聖の戦闘における、理論上の唯一の弱点。

それは、その肉体の細さからくる、一発の破壊力の低さ。

しかし、聖にはそんな常識が通用しない事を、私はこの戦闘中に思い知らされる。

「てい！」

つい先ほど、聖が頭を蹴り飛ばした一体。

最も手近にいたそいつの胸板を、聖の飛び蹴りが襲う。

派手な音を立て、仰向けに倒れこんだそいつの頭上に、私は素早く回りこんだ。

本来、首があるべき場所を覗き込むと、そこは本当に何もない、暗闇だけが広がる空間となっていた。

私は一瞬だけ、その内部を観察した。

暗闇の中に、ぼんやりとした光が見える。

あれがミソか・・・

私はショーターを軽く翻すと、スツと内部へと滑り込ませた。

果物ゼリーにスプーンを差し込んだ時のような、軽い弾力が伝わってくる。

それでも強引にショーターを通す。

剣が通り抜けたと感じた瞬間、鎧から力が抜けた。

薄い灯火は消えうせ、残ったのは、重厚なプレートメイルだけであった。

「聖！やったよ！」

私は勢いよく背後へと振り返った。

「よっしゃ、でかした！」

聖は既に、無傷で残っていた最後の一体の頭部を蹴り飛ばしていたところであった。

私はすぐに立ち上がると、聖の元に駆け寄った。

そして、聖が転ばせたそいつの胴体部に深々とショーターを突き立てた。

「おーし、こりゃいいや！」

聖は嬉々として言った。

私は周囲に視線を巡らせた。

残りは、一番最初に私達が吹っ飛ばして、ロビーの奥から這ってくるやつ。

兜を投げつけてきたやつ。

聖が外に蹴り飛ばしたやつ。
の三体。

私達は視線を交わし、次の標的を確認した。

兜を投げつけてきたやつ。

まずはそいつにトドメをさし、そのまま外へ。

そしてロビー内部に戻って、ポセイドン達と合流しつつ、奥の最後の一体にトドメを指して終了だ。

私達は一斉に駆け出した。

すぐに窓際を這っている、頭のない上半身の元へと到達する。

そこへ立ち止まる私を残し、聖はハードルの要領でガラスの破片と、外の垣根を越えて、道路へ飛び出していった。

私はすぐに鎧内部の灯火を確認すると、速攻でショーターを突き立てた。

すぐさま立ち上がると、私も聖の後を追って外を目指した。

見ると、聖は歩道で鎧と交戦中であつた。

上半身だけで外に蹴り飛ばされたその一体は、意外にもまともに聖とやりあっていたのだ。

両腕で身体を支え、聖に向かって拳を繰り出している。

私は外に出るために、多少でこずっていた。

思ったよりも、ガラス片は高く残っているし、外側の垣根は結構な幅で植えられている。

何で聖はこんなのを何の躊躇もなく、一足飛びで飛び越えられるんだ。

怖くないのかねえ。

こついったところ、聖がものすごいと思わざるを得ない要因だ。

私はゆっくりゆっくりと尖ったガラス片がそびえる窓枠を乗り越えると、やっとこさ垣根の前へと飛び降りた。

私は、背後から何かの気配を感じて、その場にしゃがみ込んだ。

ブウン！！！！

ものすごいスイング音が私の耳に届く。

頭上を見ると、鎧の下半身が、飛び蹴りのポーズのまま通り過ぎていくところだった。

危ない。

私は内心ヒヤヒヤした。

こいつら、思考が流れ込んでこないし、表情も何もないから動きが全く読めない。

常に周囲を五感で確認しておかないと、こういった風いきなり不意打ちを受けることになる。

私の頭上を通り越した下半身は、そのまま一直線に聖と交戦中の上半身を目指して走っていった。

「聖！後ろ、危ない！」

私は立ち上がりながら聖に注意を促がした。

聖は振り返らずに、上半身に蹴りを放っていた。

しかし、聖の能力の前にはそんな注意は無用だ。

下半身が聖に蹴りを放つ。

聖は全く振り向きもせずに、その蹴りを受け流した。

聖にかすりもしなかったその蹴りは、上半身に直撃し、そのまま全身仲良くもみくちゃになって転がっていった。

私は急いで垣根を乗り越えようと必死だったが、意外にも密な枝にこずっていた。

そんな私は、何とも言えない奇妙な光景を目にした。

お互いにぶつかって、もみくちゃになっていた鎧の上半身と下半身が、ぴたりとくっついて立ち上がったのだ。

「聖！」

私は叫んだ。

聖はその掛け声に、わざわざ振り向いて応えた。

「だいじょーぶ！何てことないよ」

その余裕の隙をつかれた。

鎧は聖の後頭部に向けて、かつてない程の鋭いパンチを放ったのだ。
った。

聖は、またもや振り返ることもなく、鎧の胴体部にカウンターの回し蹴りを叩き込んだ。

鎧の上半身は、再び下半身と離れて吹っ飛ぶ。

と思った。

しかし、違った。

なんと鎧は、聖の蹴りをその場で踏ん張り、受け止めたのだ。

しかも、そのまま聖の足首をガッチリと掴んだのだ。

「何だ！？こいつ！」

聖は驚愕の声と共に片足で飛び上がり、身体をひねり上げると、その反動で鎧の頭部に蹴りを放つ。

その回転に耐え切れず、鎧は聖の足を手放し、頭部は蹴りを喰らって跳ね上げられた。

聖は回転したまま空中で体勢を立て直し、身軽に地面へと着地した。

私は未だに垣根から抜け出せずにいた。

ところどころに散らばっているガラス片を避けながら歩くのは、思っていたよりも骨が折れた。

早く出なきゃ。

気だけが焦っていた。

思い起こせば、ガードをしたのは、あの鎧だけであった。

あの一体だけが、他の固体に比べて多少なりとも技術的な行動をしたのだ。

それだけでも、あの一体だけが他とは異なった存在だという証明に

なる。

しかも、あいつは最初と違い、聖の蹴りを喰らっても関節が断裂しなくなっている。

これは、私がショートルで首を落とさない限り、体内の灯火を絶つ手立てがないということだ。

しかし、私は未だに垣根を越えられずにいる。

聖があ程度の対術しか使えない敵に負けるわけではないと思う。

しかしながら、あまり戦闘が長引けば、無駄な体力を使い、戦闘の精度が下がりがねない。

私は気だけが焦っていた。

聖は、軽く跳ねると、二、三步ほど後退していた。

少し距離をとって、セーブしながら戦うつもりらしい。

と、私は思った。

聖は地面を蹴り、一気に鎧の懷へと入り込んだ。

そして、そのままのスピードで横蹴りを鎧の胸部に叩き込んだ。

蹴りが入る瞬間、聖の左足首、左膝、股、右膝、右足首の関節が、順に伸縮したように感じた。

そして、その伸縮に合わせて、前と同じく、聖の足が一瞬だけ膨らんだように感じた。

ゴッ！！！！

重い、本当に重い音が早朝の街中に響いた。

聖も、鎧も、その体勢のまま動きを止めていた。

朝焼けの淡い日差しが、二人の姿を優しく包み込む。

鎧は一度だけビクリと痙攣すると、そのまま地べたにくずおれた。そのまま動かなくなつた鎧の胸元には、聖の靴跡がくつきりと押し付けられており、朝の光がそのくぼみに反射していた。

私には、聖が何をしたのかが分かつた気がする。

今の聖の蹴りの破壊力。

それは今までの蹴りの非ではなかった。

鋼鉄の板で出来た鎧に、靴跡をクツキリと刻み込むほどの威力は、それまでの聖の蹴りでは考えられない。

聖の身体からは、スピードはあつても威力のある蹴りは生み出さない。

それは聖自身も自覚していたに違いない。

聖はほんの数歩の距離でも、最高速に達するだけのレスポンスを持っている。

最高速から蹴りを放てば、当然多少の威力は増す。

しかし、聖の体重では、いくらスピードが速くても、上がる威力はたかが知れている。

何故なら、威力を上げる最も大きな要因は、体重移動だからだ。

聖の体重では大したプラスにはならない。

そこを威力に結びつけたのが、先ほどの蹴りだ。

聖は、身体の移動スピードのベクトルを、そのまま打撃に乗せることに成功したのだ。

身体を移動させてきたスピードを、体内のバネを使ってそのまま衝撃として打撃に還元し、元々の蹴りの威力、自分の体重に上乘せし、そのまま相手に流し込んだのだ。

それは圧倒的に高い技術力。

前述したとおり、聖の基本的な身体能力はまさに天才的だ。

そこに加わるのが、この「センス」なのだ。

聖は、直接は戦闘に関係のない、言わば無駄なエネルギーを、余すことなく戦闘に活かす技術を持っているのだ。

恐ろしいまでのテクニク。

聖の最大の武器は、このテクニクにあると言っても過言ではない。私は、舌を巻いた。

聖の背中が朝日を浴びている。

その姿は神々しくさえあった。

聖はまだまだ遠い。

私は改めて確認した。

「要、そこで何やってんの？」

聖が振り返って言った。

その時私は、垣根の中でバランスを崩して、ガラス片に手をつきそうになって、生まれたての子馬のような姿勢で冷や汗をダラダラかいていたところだったのだ。

「ちょ、ちよっと、聖助けて！」

私は本気で焦りながら、聖に助けを求めてしまった。

聖の勝利の背後で、私は一人で勝手に絶体絶命に陥っていた。

お恥ずかしいことですが……。

聖の手を借りて、なんとか体勢を立て直すと、私達は再びホテルのロビーへと舞い戻った。

「ええええええええええ！！！！？？？？」

私達は同時に悲鳴を上げてしまった。

私達がロビーに振り返った時には、広々としたその空間は、無数の、大量の、ありえないほどの鎧の群れで埋め尽くされていたのだから。

「ありえないいいいいいい！！！！！！！！」

鎧たちは互いにひしめき合い、まるで甲虫のような軋んだ音を立て合っている。

聖は大声で絶叫していた。

「やばい！このままじゃ、三人が危ないよ！」

「早く助けなきゃ！」

聖は引きつった声で返事を返してきた。

私は胸中、毒づいた。

抜き差しならない状況というやつだ。

一体一体を相手にすれば、大したことない相手だということは先ほどまでの戦闘で実証済みだ。

が、問題なのは、倒すまでの過程が数段階あるということだ。頭を飛ばして、内部を傷つける。

そういう段階を踏まなくてはならない分、複数を一気に倒すのには向いていない相手なのだ。

しかも、さっき聖が倒したやつみたいに、ある程度の耐久力、技術をもっている個体が混ざっている可能性もない。

こいつらを一度に相手にするのは、今の私達にとってはかなり難易度の高い状況だ。

私はゴクリと喉を鳴らした。

神経を集中しろ。

相手を倒すことだけを考えろ。

攻撃を避けることだけを考えろ。

それ以外の何も考えるな。

考えたら、私達の負けだ。

私達は覚悟を決め、鎧の群れの中に飛び込んだ。

聖の一発目の蹴りが、手近な一体に直撃した。

その途端だった。

バランスを崩したそいつは、背後の鎧をなぎ倒し、ぱったりと絨毯に倒れこんだのだ。

そして、そのまま将棋倒しで後ろの鎧たちもガタガタと倒れていった。

私も手近な一体を斬りつけた。

切れはしなかったが、鎧はベッコリと凹み、聖の時と同様に、後ろの鎧たちを巻き込んで、倒れ伏していった。

「よわっ！！！」

聖は大爆笑していた。

明らかな見掛け倒しだった。

この鎧の群れ、先ほどの連中とは比べ物にもならないほどに弱体化している。

これなら、一気に片付けることも難しくはない。

私はこの事実希望を見出していた。

私達は順調に片付けていった。

しかし、それも長くは続かなかった。

確かに一体一体の戦闘力は低い、こいつらのトドメの刺し方自体は、前の連中とは変わらなかったからだ。

倒しても、倒しても起き上がってくる。

私達は、倒してもすぐに甦る鎧に阻まれ、中々前に進む事が出来なかった。

そんな時だった。

私の中に、いきなり声が届いてきた。

（やっぱりこんだけ大量に操ると、個体の能力は低下するわいな）

！！！！

私は辺りを見回した。

今日始めての声。

（いいさ。あくまで時間稼ぎだ）

複数の声。

どこだ、どこにいる！？

私は焦った。

声はかなり大きかった。

これはこの声の主がそばにいるということに違いない。
きつと、目で捉えられる範囲にいるはずだ。

私は鎧たちを蹴散らしながら、必死になって周囲を探った。

（さて、そろそろ頃合か）

私は前方の三人に目をやった。

彼らはすでに消耗著しく、動きが鈍くなっている。

まさか、

私が最悪の考えを巡らせた瞬間だった。

ポセイドンら三人の頭上の天井から、何かの影が伸びてきた。

影はすさまじいスピードで伸びると、一瞬でハデスの肉体を絡め取ると、そのまま縮み上がり、ハデスごと天井の隙間に消えていった。

「聖！」

私は悲鳴を上げた。

「どうした！？要」

鎧との戦闘に集中しており、聖はその出来事に気づいていなかった。

「ハデスが、ハデスが！八神君が！」

私は叫んだ。

「八神君！！！！」

続く

第二十一話「克己心」

聖が手近な鎧を蹴り飛ばした姿勢のまま、首だけで振り返った。
その顔は、既に蒼白だった。

「や、八神君！」

聖が叫んだ。

普段は八神と呼び捨てにしている聖。

しかし、その時は八神君と呼んだ。

思えば、クロム・ネフューに心を読まれた時も、聖は八神君と呼んでいた。

その人称こそが、聖の本質なのだろう。

八神の前でしか見せない、聖の真の姿なのだろう。

私は聖の声を聞いた瞬間、何故かそんな事を考えた。

私達の視界の中には、既に八神の姿は影も形も無くなっていた。

私は焦った。

海、そして桜の形をした二人は、既に八神を追って、天井の影に消えていこうとしていた。

私達は、完全にその場に取り残されていた。

「ちょっと！待って！」

私は絶叫した。

しかし時は既に遅し。

私達の前に残されたのは、未だに蠢き続ける無数の鎧の群れだけであつた。

何故に運命は、私達にこれ程までに過酷な試練を与え続けるのか。
私は無性に恨めしく思った。

私は力任せに目の前の鎧に剣を振り下ろした。

鈍い音をたて、兜のてっぺんがグシャグシャにへこんだ。

「うわああああああ！！！！！」

私は感情に任せて、手当たり次第に鎧を叩きまくった。

やり場のない感情が、とめどなく溢れ、暴れている。

私はその感情を抑える事をしなかった。

したくなかった。

何をしていいのかも分からない。

無性に破壊したかった。

私は全力で暴れた。

それが何も生み出さないと知っていても。

でも、現実には常に無情。

私がどんなにヒステリーを起こしても、私の目の前には次々と立ち上がる鎧の群ればかり。

現実には、私の体力をどんどん奪っていくだけだ。

私は現実の残酷さに気付き、絶望し始めていた。

もう何もかもお仕舞いだ。

大好きな八神君がいなくなる。

それは、私の世界の半分が消えて無くなることに等しい。

このまま、もう半分も手放してしまおうか。

私の全てが、ここで無くなっても構わない。

半分も、全部も、何も変わらないじゃないか。

私の視界に違和感が生まれた。

それは、見慣れた光景。

聖の姿。

聖の手に握られている。

それは、壊れたはずのリッケンバッカー。

聖の手に握られていたそれは、リッケンバッカー。

聖は、リッケンを手に、鎧達の真ん中に佇んでいた。

私は、その姿に何かが起こるのを感じた。

何かが変わる。

聖が、何かを変える。

そう感じたのは、私だけじゃなかった。

ひしめき合っていた鎧の群れが、一瞬のうちに消え去った。

そこは、元のがらんだこのホテルのロビー。

何事もなかったように、今まで無数の鎧達が蹂躪していたとは思えない程に整然としたロビー。

その奥に、私達二人と対峙するように佇んでいる姿が目にとまった。

私達は、その場を動かずに、その姿を凝視した。

魔女と狼男。

そんな呼称がよく当てはまった。

二人は、微動だにせず、私達を見つめていた。

「何？あんたら」

私は口を開いた。

明らかな敵意を敢えてむき出しにして尋ねた。

「なーに、おまいらの敵だわさ」

魔女の方が答えた。

そいつは明らかに魔女だった。

真っ黒なローブに、真っ黒なブリムの広い三角帽子。

大きな鉤鼻の上に小さな丸眼鏡を乗せた顔は、しわくちゃで、他に形容のしようのない程に老婆で、そして大きな箒を携えたその姿は、どうしようもない程に魔女だった。

「そこで何してる？」

私はイラつきを隠さずに言った。

こいつらとの交戦は必至。

ならば、何も隠さない。

駆け引きも何も必要ない。

避ける必要のない戦闘がある事を、私は初めて知った。

「何って、決まっているだろう」

狼男が答えた。

そいつは明らかに狼男だった。

上半身は毛むくじゃらで、丸まった背には銀色のタテガミ。

顔はもはや人間のものではなく、まるで狼そのもので、口の端からは鋭い牙が無数に並んでいた。

その手は五本の指が人間のそれそのままの形に並んではいたが、その先には包丁のような鉤爪。

しかし、上半身とは裏腹に、しっかりと二足で立ち上がっている様は、どうしようもなく狼男だった。

「お前らを始末する」

私が聖と同時に駆け出したのは、その時が初めてだったのかもしれない。

私は真っ直ぐに魔女を目掛けて突進していった。

聖も、真っ直ぐに狼男を目指して、風になって駆けていた。

「あれあれ、まだ自己紹介もしてないじゃないか。せっかちな娘共だわさ」

老婆が呆れたような口調で言った。

「俺は好きだぜ。こういう命知らずなバカ共はな」

その裂けた口から、何故こんなにもはつきりとした発音で喋れるのか疑問だが、狼男が口角を上げつつ言った。

私は魔女に切りかかった。

聖は既にリッケンバツカーを投げ捨て、狼男に蹴りを放った。

気付いた時、私のショーツを受け止めていたのは、魔女ではなく、狼男だった。

同じく、聖の蹴りを箒で受け流していたのは、狼男ではなく、魔女だった。

狼男の膝が私の腹部にめり込み、私は思わず熱い胃液を吐き出した。

ほんの少しだけ浮いた私の身体に向かって、狼男は回し蹴りを繰り返して来た。

重い衝撃が、私の身体を駆け抜ける。

次の瞬間、私はロビーの窓際まで吹っ飛ばされていた。

私の視界の端には、魔女の指先から放たれる炎の球を避けながら、右往左往している聖の姿があった。

なんてこった。

私は空中で体勢を立て直し、床への激突だけは避ける事に成功した。見事に相性の悪さを突かれた。

私は着地したその場で軽くえずいた。

とんでもなく重い蹴りだった。

そして凄まじいスピード。

聖の動きを目の前で見ていた私には分かりやすかった。

この動きは、聖のそれと同等。

まるで聖と戦っているような感覚にさえ陥った。

はつきり言って、私はこの動きに対応できるだけの身体能力は持ち合わせていない。

言えることはただこの一つ。

例えば心を読んで、動きを先読みしても、身体が対応出来なければ何の意味もない。

私の能力を無に帰す、スピード重視の相手が最も相性が悪い。

そして聖の相手になった魔女も、聖にとっての相性は最悪。

聖は徒手空拳を使う、完全に近距離型の戦闘スタイルだ。

見た目通りに魔法を使うのか、炎の球を使った遠距離攻撃は、聖にとってはやっかい極まりない。

それに加えて研ぎ澄まされた触覚。

炎の球の温度自体が攻撃力を持つ結果に繋がっているのだ。
紙一重で避けながら近付くことが困難になっている。

私達二人の戦闘スタイルを完全に読み取られている。

「ごほっ……」

私は一度咳払いをすると、血と胃液の混じった唾を吐き出した。

「ありがとう」

私は口角を持ち上げ、狼男の目に向かって言葉を投げかけた。

「何？」

狼男は訝しげな表情を作った。

顔は狼でも、表情は読み取れる。

不思議なものだ。

「あんたのお陰で目が覚めたよ」

私は手の甲で口元を拭いながら立ち上がった。

「冷静さを失ったら勝利はない。あんたはそれを思い出させてくれた」

私は剣をだらりと下げ、無形の形を取った。

「ふん、何をしてもお前には最初から勝利なんてない」

狼男は長い舌の先で、自らの鉤爪をぺロリと舐めた。

「私は勝つ。誰にも負けない」

「いいね、その根拠のない自信。それでこそ潰し甲斐があるってものだ」

狼男は前傾姿勢の構えをとった。

「私の名は大和要」

私は私の名を名乗った。

私はこれから始まるこの戦いに、特別なものを感じていた。

この戦いは、私が、私自身を超える戦い。

私は私自身に礼を尽くし、今までの私を乗り越えていくんだ。

「ほう、騎士道精神か。これもまた潰し甲斐がある。いいだろう、俺の名はウルフィー。夢魔クロム・ネフュー様の使い魔の一人。神速のウルフィーだ」

「ご丁寧にどうも」

私は再び口角を上げた。
ゾクゾクした。

ウルフィーが動いた。

右から回り込んで右フック。

私の左脇腹を狙っている。

私は左肘を下げ、胴体にピッタリと着けた。

ウルフィーの拳が私の肘に突き刺さる。

同時に右手のショーターを、真っ直ぐウルフィーに突き立てた。

切っ先が届く随分前に、ウルフィーは左フックを私の下腹部に叩き込んでいた。

子宮に激痛が走る。

更に立て続けに右のショートアッパーが胃を突き上げた。

意識が飛びそうになった次の瞬間、右のストレートが左頬に叩き込まれた。

私は声も出せずに吹っ飛ばされた。

かろうじて意識は飛ばなかったが、受身も取れずに床に叩きつけられた。

「ガキが、味な真似を」

ウルフィーが顎を撫で上げた。

その手に、赤い血が付いているのが見えた。

顎から血が滴っていた。

インパクトの瞬間、反動を利用して振り上げた私のショーターは、

人間より遙かに長い狼の顎を微かにだが捕らえていたのだ。

だが、所詮は掠り傷。

ウルフィーには大したダメージはない。

反面、体重をたっぷり乗せたストレートをまともに喰らった私のダメージは半端ではなかった。

笑ってしまう位の實力差。

だが、始めの一手だけは読みきった。

私に勝機があるとすれば、その一点のみ。

奴の出鼻を挫く。

それだけが私に与えられたチャンス。

私は全身全霊をかけてそれを狙うだけだ。

私は今一度立ち上がると、無形の構えを取る。

再び先手を取ったのはウルフィー。

一瞬で間合いを詰めてくる。

今度は何を仕掛けてくる？

今度は……

右ストレート。

真っ直ぐきて右ストレート。

私はそれを左に避けるだろう。

そして、ライトクロスの要領で、ショーターを奴の腹に突き立ててやる。

でたために速いストレートが私を襲う。

避けられるのか？

私は限界ギリギリまで反射神経を駆使して、体重を左に移動させた。私の頬を掠めて、奴の拳は空気を切り裂いて通り過ぎた。

瞬間だった。

私の視界が何かに遮られた。
突然の出来事に、私は自分が何をすべきかをすっかり忘れてしまった。

頭に圧迫感を感じる。
何かに頭を掴まれた。

気付いた時には時既に遅し。

私の身体は持ち上げられ、宙に放り出された。

そして、視界が開けた時には、突き上げられるように、ウルフィーのラッシュが胴体の至る所に浴びせられていた。

右ストレートが外れた瞬間、ウルフィーは左手で私に目隠しを仕掛けてきたのだ。

私はその目隠しにまんまと嵌められた。

そしてそのまま左手で頭を掴まれ、一瞬で浮かされて、サンドバッグのように無防備にラッシュの餌食にされてしまったのだ。

呼吸が出来なかった。

痛いなんてもんじゃない。

何とも言い表せない衝撃が、私の体中を蝕んだ。

身体の隅々の血液が、沸騰したみたいに熱い。

骨という骨が軋んだ。

内臓が口から飛び出る気がした。

それでも尚、私が意識を失うことはなかった。

それが逆に死よりも辛い苦痛を私に与えるのだった。

私は呻くことも出来なかった。

奴に吹っ飛ばされたのは、本日三度目のことだ。

しかも、ほんの数分の間に事の全ては起こっている。

宙を舞うコンマ何秒かの間に、私は自身の身体に異変を感じていた。

身体が、動かない。

私は再び床の上に全身を叩きつけられた。

口から熱い何かが飛び出た。

熱い何かは、空中で熱量を奪われて、冷たくなって私の顔面に降り注いだ。

視界が赤く染まった。

それは、吐血した私の血だった。

私は倒れ伏したまま、指一本動かすことも出来なかった。

顔を、冷たい血液と胃液が混ざり合ったものが流れ落ちていく。くすぐられるような感覚。

それを拭うことすら出来ない。

身体が、私の言うことを聞いてくれないのだ。

私は直感で何が起きたのか悟っていた。

ほんのわずかの間に、強い衝撃を内臓に受けすぎた。それによってショック症状を起こしたのだ。

自分でも分かる。

全身の至る所が痙攣を起こしている。

それでも意識だけは鮮明に保っている。

客観的に見れば、これは絶望的な状況だ。

敵を目の前にして、私の身体はもはや動かない。

立つことも出来ない。

もはや殺されるのを待つだけの状況。

それでも、

それども不思議な事に、私の意識ははつきりとあった。
身体中の激痛に耐えながら、思うように動くことも出来ない苦痛を
感じながらも、私の意識はただはつきりとあった。

私の戦意は失われることはなかった。

続く。

第二十二話「やつつける！」

どうする？

この相性の悪さ。

この実力さ。

冷静になれ。

熱くなるな。

身体はどうだ？

動かせるか？

ダメだ。

思うようには動かない。

あとどの位で動く？

あと十秒？

二十秒？

それじゃ間に合わない。

奴はもう私のすぐ傍まで来ている。

私を殺そうとしている。

どうする？

私はこのピンチを乗り切れる？

乗り切れない？

「カカカ・・・。どうやらもう動く事もできねーらしいな。拍子抜けだぜ」

ウルフィーは、その禍々しく尖った鉤爪を再びペロリと舐めた。

「あっけねえ。こんな雑魚相手に、わざわざ俺が出向く事もなかったんだ。こんなクソ雑魚小娘にやられたなんぞ、ドラクラの奴も全く情けねえ。どうかしてるぜ」

よく喋る奴。

それでも私の身体はまだ動かない。
あとの位で動く？

「さて、うだうだもしてらんねえ。さっさと始末しちまおう」

ウルフィーが私の傍らに立った。

「じゃあな。潔く、死ね」

鉤爪を高々と振り上げる。

「うが!？」

その瞬間だった。

ウルフィーが小さな悲鳴を上げた。

奴の背から、白い煙が立ち上る。

焦げたきな臭い臭いが漂ってくる。

私は目撃していた。

私にトドメをさそうと、奴が鉤爪を振り上げた瞬間、突如として奴の背中を真っ赤な火球が襲ったのだった。

「・・・・・・・・」

ウルフィーは白煙を上げたまま、その場で沈黙していた。

「つてめえ!!!ばばあ!!!」

くると振り返ると、ウルフィーは絶叫した。

「どこに目えつけてやがる!!!この老いぼれが!!!目ん玉腐っちまったのか!?ちゃんと狙って打ちやがれ!!!」

怒り心頭。

両手を振り上げ、地団駄を踏んで喚き散らしている。

その様は子供同然だ。

「このばばあ!!!聞いてんのか!？」

「うるせー小僧だね!悪かったわいな!流れちまったんだからしか

たないだろーがね！」

「つてめー！なんだ、その言い草は！！」

魔女は未だに聖を火球で牽制しつつ、それでもこちらを向いてウルフィーの相手をしている。

「だから悪かったって言うてるーが！しつこいよ！」

「つてめー、イッチ！あとで覚えとけよ！」

ようやく気が納まつたらしく、ウルフィーは舌打ちをして腕を下ろした。

なんとも子供じみたやりとりを聞き終え、私はある事に気付いていた。

この状況に、活路を見出すにはこれしかない。

私は指先に力をいれた。

動く。

あのくだらない会話が時間稼ぎになった。

やるしかない。

ウルフィーが再び振り返るその前に。

私は出来るだけ音を立てないよう心がけ、ゆっくりと立ち上がった。

「あつ！てめー！」

まだ完全に立ち上がる前に、ウルフィーはこちらに振り返り、私は奴とバッチリ目が合ってしまった。

「あつ」

私は小さく声を漏らし、そして小さく笑みを浮かべた。

音を立てずにショーテルを一閃。

ウルフィーの足元を薙いだ。

「ちっ！」

その剣はあっさりとかわされたが、そんなのは想定内。

ウルフィーが剣を避けるために一瞬後退した瞬間を見計らって、私は一気にその場を後にした。

ウルフィーに背を向け、私はロビー内をレストランの方へ向かって

駆け抜けた。

背後には、グングン迫り来る気配。

私はレストランの入り口の三メートル手前で立ち止まる。

ウルフィーが立ち止まった私に襲い掛かろうと、踏み切る気配を感じる。

私はその場から二歩だけ、更にレストラン側へ踏み出した。

ウルフィーは、最初に私が立ち止まった位置に照準を合わせて踏み込んでいた為、先ほど私のいた地点へと着地した。

「があー!!」

小さな爆音と、悲鳴が私の耳へ届いた。

ウルフィーが着地したと同時に、奴の右半身をロビー奥から飛来した火球が襲ったのだ。

ピンゴ!

私は振り向きざまに、ウルフィーの胴を薙いだ。

ウルフィーは身軽に後退し、その剣を避けようとしたが、私の切っ先は奴の腹部を浅くだが捕らえていた。

「っ!!」

声にならない声が、牙の間から洩れ出るのが聞こえる。

「っめえ……」

齒軋りが聞こえる。

ウルフィーの右半身は、毛が焦げて縮れ、またもやくすぶった白煙を上げていた。

「どうしたの?そんなに焦げちゃって。また流れ弾にでも当たった?」

私は敢えて挑発するように、茶化したような声で奴に言葉を投げかけた。

「いい気になるなよ。たまたま流れ弾が当たっただけじゃねえか。てめえの剣なんざ、俺に掠っただけじゃねえか！」

ウルフィーが言い終えるか、終えないかの内に、私は再び走り出していた。

今度はそこからロビーの奥側へ。

つまり、聖と魔女が戦っている方向。

しかし、真っ直ぐそちらへ向かっているのではなく、微妙に迂回するコースを取っている。

ウルフィーもすぐに反応し、私に平行して走ってくる。

が、ウルフィー本人は気付いてはいないが、奴が走っている場所は、聖・魔女の交戦するフィールドと、私の間に位置しているのだ。

私はウルフィーに視線を悟られぬように、最小限の目の動きで聖と魔女の動きを確認する。

丁度、ウルフィーの左後ろ辺りで、聖が火球を避けるのが見える。

あと二メートルくらいか。

私はそこから二メートル進んだ場所で一瞬足を止めた。

ウルフィーが、すぐさま私に襲い掛かろうと踏み切った。

その鋭い鉤爪が私の肉に突き刺さるうかというその刹那だった。

ぼううん！！！！

また再び、ウルフィーの背に火球が直撃したのだった。

奴の鉤爪は、私に届くことなく、その場に崩れ落ちていった。

「つてめえ……このばばあ！！！！」

立ち上がりながら咆哮し、ウルフィーは魔女の方へ振り返った。

「さっきから何度も何度も！！てめえ！俺の邪魔がしてえのか！！！！」

その声は、怒りを通り越したのか、震え、上ずっていた。

「何言つてんだい！？おまいがあたしの火球の軌道に入ってきたんだろーが！」

「何だと！？こらあ！！！」

「うつさいんだよ！この犬っころが！おまいはその小娘にいい様に誘導されてるだけだろーがね！よく周りを見るんだね！！」

あーあ、魔女め。

正解を教えちゃいやがった。

私は一人で軽いため息をついた。

「・・・なんだと？」

ウルフィーがゆっくりとこちらを振り返った。

「てめえ、このクソガキ。てめえがわざとこの俺に火の玉を当ててたつてのか？あん？」

狼の顔はあからさまに血が昇っていた。

表情は完全に崩れ、目玉は血走り、牙の間からは涎が滴っている。

どうやらマジで怒らせてしまったらしい。

だが、それすらも計算のうち。

怒らせれば怒らせるほど、私にとっては好都合。

つけ入るなら、この怒りの隙間だけなのだから。

「そんな狡い芸当が、てめえなんざに出来るつてのか？そんなこたあねえよなあ？ああん？」

「さあ、どうだかね？あんたがバカだから、勝手に当たっただけなんじゃないの？」

「っ・・・の、クソガキがあ！！！！！」

（この小娘！身体中グズグズに引き裂いてやる！このまま鉤爪で捕らえて、のどを噛み砕いて、グチャグチャのミンチにしてやる！）

やっぱり・・・完全に頭に血が昇っている。

これでこいつの心が読みやすい。
多分、動きの全てが心理に現れて、単調になる。

私はウルフィーの両腕をすり抜けると、懷を通り抜けて、奴の脇腹から抜け出した。

動き自体が単調だ。

今のこいつだったなら、私の身体能力でも簡単に対応できる。

ウルフィーの背後をとった。

最大のチャンス到来。

このまま串刺しにしてやる。

（なんだと！？小娘、すり抜けやがった！ちきしょう、捕まえてやる。後ろか！？）

ウルフィーが振り向いた。

私はその動きを無視して、奴の脇腹にショーテルを突き立てた。

「バカが」

ウルフィーの声が、私の背後から聞こえた。

私は戦慄した。

全身に鳥肌が立つのを感じた。

「遅いんだよ、ガキ。お前が突き刺したのは、俺の残像だ」
なんてこった。

動きは単調だけど、速度自体は変わらない。

やっぱり私の身体能力ではまともにやり合うなんて不可能なのか？

ウルフィーの腕が、私の襟首をガツチリと掴むのが分かった。

（そうだ、こいつも俺と同じ目に合わせてやる。殺すのはそれからでも遅くはねえ）

私は襟首を持たれ、凄まじい力で引っ張られた。

「ほらよ。てめえはこっちだ」

そう言つて、私を持ち上げたままウルフィーは魔女の方へと向き直り、私を高々と突き上げた。

「おい！イッチ！」

ウルフィーが叫んだ。

イッチ。

それがあの魔女の名前らしい。

「こいつを狙え！」

私は奴の右腕によつて持ち上げられ、的としてウルフィーの右前方に突き出された。

「あいよ」

魔女イッチの指先に、小さな炎が生まれる。

そして、それは次第に膨らみ始め、最後にはバスケットボール程の大きさの火球へと成長していった。

「やめろ！バカ！」

遠くで聖の声が聞こえる。

振り下ろされた腕と同時に、イッチの指先から火球が放たれる。

火球はとんでもない速さで私に迫ってくる。

瞬きをするごとに、その大きさは見違えるほど大きくなって、私を飲み込もうとしている。

もうダメだ。当たる！

私は咄嗟にショールを前に突き出した。

火球がショールの腹に触れる。

私が目撃したのは、ショールに触れた火球がその接点から真つ二つに裂かれる一部始終だった。

「がはっ！！」

またもやウルフィーの悲鳴が聞こえた。

それと同時に、私の身体は奴の腕から空中に開放されたのだった。私のショーターによって分裂された火球は、そこから左右に別れ、私の丁度斜め後方にいたウルフィーの顔面を捕らえたのだった。

マジ？

これには私も驚いた。

まさか火を切れるなんて、思ってもいない。

私は急いでその場を離れつつ、自分の手に握られたショーターをじっと見入っていた。

どういうわけだかは分からないけど、これはいいや。

私にとっては理想的な展開だ。

私がこの戦いに見出した活路。

それは、私と奴がタイマンを張っているわけじゃないこと。

このホテルのロビーという空間には、私とウルフィー、聖とイッチという二組が戦っているが、それはただ単にあいつらが勝手に個別に襲ってきただけ。

この空間自体では、四人がいつぺんに戦っているのだ。

つまり、ウルフィーだけを相手する必要はないのだ。

聖やイッチの動きを見て、フィールドとして利用して戦うべきだ。

それが、私達の实力差を埋める最善の方法なのだ。

火球を私の剣である程度操作出来れば、これ以上の武器はない。

このフィールドは、やっぱり私に味方している。

「うぐぐ・・・」

流石のウルフィーも、顔面への直撃はダメージが大きかったらしい。顔を手で覆い、その場に跪いていた。

私は用心のため、その場から更に飛び退いて、ウルフィーとの距離をとった。

奴のダメージも半端ではないと思うが、私のダメージもかなり大

きい。

かろうじて動けてはいるが、内臓に喰らったダメージは長引くし、じわじわと効いてくるもんだ。

次、もしもボディにダメージを喰らったりしたら、そこでK.Oは必至。

慎重に慎重を重ねて損はないはずだ。

「ちくしょう……このド畜生が！！おいイチ！！てめえ、その火の玉をなんとかしやがれ！！」

もう何度目のシーンだろう……。

こうやってウルフィーがイチに当り散らすのは。

「なんとかって、どうすりゃいいんだい！？冗談じゃないよ！」

イチの抗議も当然だろう。

なんせイチ自身も、あの聖を相手にしなきゃならないのだから。

聖と戦いながら、こちらの状況も確認して戦うなんて、いくらなんでも負担が大きすぎるだろう。

「うつせー！バカたれが！とりあえず何とかしやがれ！水でも雷でもなんでもいい！火以外ならなんでもいいから、何とかしやがれ！」

「全く、勝手なことばかり言ってるんじゃないよ！このボケが！これでどうだい！？」

そう言ってイチは指先に、再び何らかの力を集中し始めた。

「喰らえ！！」

放たれたのは、氷の塊。

イチは、炎から氷へと攻撃方法を変えたのだ。

またもやバスケットボール大にまで膨れ上がったの氷の弾丸が、私に向かって飛んでくる。

私は内心ほくそ笑んだ。

これを待っていたのだ。

氷はあくまで固体なのだ。

明らかに炎より扱いやすい。

私は両手でショーターの柄を握りなおすと、身体を横に向けて顔の横で剣を構える。

氷が私の目前まで迫った。

私はタイミングを計ると、腰を回転させて思い切りショーターを振り抜いた。

そう。

野球のバツティングのスイングのように。

「うりゃあ！！！」

ジャストミート！

私は身体のひねりと、ショーターの角度を調整する。

狙うはライトスタンド、高度な広角打法が要求されるぞ。

私は手首がぶれないように力を込め、慎重にショーター振り抜く。

私に弾き返された氷の弾丸は、一直線にライトスタンドに。

というか、ウルフィー目掛けて吹っ飛ばされていた。

「な、なにぃー！！！！？？？」

突然の出来事。

しかもウルフィーと私の距離はほんの数メートルしか離れてないのだ。

いくら奴でも、この距離、しかもこんな意外な出来事に、反応できるわけがない！！

ゴッ！！！！

私が打ち返した氷の塊は、見事にウルフィーの腹を捕らえた。

必死にその氷を受け止めようとするウルフィー。

「ぐううう・・・」

しかし、そんな事はさせない！

私は一気にウルフィーの元へと走り寄ると、氷の塊の上から思い切

リショートルを叩きつけた。

「うつつああああ!!!」

氷の勢いと、私の剣の威力。

その相乗効果は絶大だ。

さすがのウルファイも耐えられずに、身体が浮き上がり始めている。

「ぐつつうつ・・・負けるか!!」

必死で耐えるウルファイ。

ここまで来ると、その根性は尊敬に値する。

だが、私はそれで手抜きはしない。

私も全力で勝たせてもらう。

それが礼儀だ。

「これで」

私は思い切りショートルを振り上げた。

「終わりだー!!!」

私はありったけの力を込めて、剣を振り抜いた。

「ぐああああ!!!」

悲鳴と共に、ウルファイの身体は浮き上がる。

「ぐああああ・・・」

凄まじい勢いで、ウルファイを氷の塊ごと吹き飛ばした。

私は気持ち良くなって、昔マンガで読んだ台詞を引用して、こう言
ってやった。

「アリーヴェ・デルチだ。（さよならだ）」

続く。

第二十三話「決戦の入り口」

えてして、人には「向いている」「ことと、「向いていない」「ことがある。

それはスポーツだったり、音楽だったり、勉強だったり、日々の生活の中に無造作に溢れているものだったりする。

私達は、常にそれらのことを考え、向いていれば取り組み、向いていなければ避けて通る。

しかし、私達は誰もが心の奥底では知っている。

普段は避けて通る道に、敢えて足を踏み入れることで広がる世界があることを。

そこに待っているのは挫折かもしれない。

こつぴどく打ちのめされ、もう二度とこの道に足を踏み入れないと心に誓うかもしれない。

だが、肝心なのは結果ではない。

無論、結果が伴うからこそ、私達は充足感を得ることが出来るのは否めない。

しかし本当に肝心なのは結果ではない。

挑戦する心なのだ。

それは自分を超えることに繋がる心。

そしてそれは、運命にも当てはまる心。

私は肩で大きく息をしていた。

渾身の力を込めて振り抜いた一撃。

氷の塊を抱いたウルフィーが、私からぐんぐん遠ざかっていくのが見える。

私は内心ほくそ笑んでいた。

ウルフィーは、華麗とは程遠い、弾丸のような勢いで空を裂いていた。

「ウルフィー!!」

イッチの叫び声が聞こえる。

奴がロビー反対側の壁に激突する瞬間。

奴は抱いていた氷をついに腕で砕き割ることに成功した。

見事に身体をひねらすと、まるで体操選手の10点満点の演技かのように華麗に壁に着地した。

鉤爪を荒々しく大理石に差込み、ウルフィーは壁に垂直にしがみついていた。

「ぐううう・・・」

禍々しい呻き声が聞こえる。

「やりやがったな・・・。この俺に・・・」

焼け焦げた毛皮が、ところどころ凍りつき、鋭い光を放つ。

その様相は、おおよそこの世の生物とは思えない異様さを発していた。

「殺してやる・・・。殺してやる・・・。殺してやるぞ!」

ウルフィーが壁から鉤爪を引き抜いた。

次の瞬間、奴は大理石の壁の上から消えうせた。

「ぐあっ!」

ウルフィーが悲鳴を発した。

たったの数秒。いや、それ以下の短い時間だった。

奴は壁から既に数メートルも移動した場所にいた。

今度は床に叩きつけられて、だが。

「なんだと!？」

まさに驚愕。

奴は首をあげ、ぶんぶんと振り回し辺りを見回す。
その姿は滑稽以外の何物でもなかった。

もはや運命は私達を中心に回り始めている。

運命とは、こうやってすぐに表情を変えてしまうのだから。

ウルフィーが見上げた先にあつたのは、一組の長くて細い足。

「立ちな」

短く言った。

長い黒髪が風にたなびく。

聖はウルフィーを見下ろしていた。

私はそつと切っ先を持ち上げ、その首筋を静かに指し示した。
ビクリ!

身体が大きく脈打つ。

「どうしたの?おばあさん。そんなに驚いて」

それは赤ずきんちゃんの言葉。

「お、おまい・・・いつの間に?」

イッチが小さく囁いた。

「それが分からなかったのなら、お前の負けだ」

それは一瞬だった。

私がウルフィーを吹き飛ばした方向は、イチチを少しかすめる位置。私は、ウルフィーの陰に隠れ、イチチの死角へと接近した。

同時に聖は、イチチの隙をついて、ウルフィーを追っていった。非常に簡単な話だ。

私達は先ほどの攻撃を機に、それぞれの対戦相手を変更した。それだけ。

そして、そんな簡単なことに気付けなかったイチチとウルフィー。その時点で、彼らの敗北は確定しているのだ。

「うおおおおお!!!」

ウルフィーが咆哮した。

立ち上がり、聖に向かい襲い掛かる。

相変わらず鋭い拳。

頭に血が昇ってはいるだろうに、全く感じさせない正確な攻撃。左右のコンボをリズムカルに、小気味よく打ち出している。

私がいざんざん苦労した、速くそれでいて力強い打撃だ。

だが相手が悪い。

聖はその全てをまるでダンスでも踊るかのように軽やかに、しかも

全て紙一重でいとも簡単に避けていく。

そう、まるでブルース・リーやモハメド・アリみたいに。
「うおおおおお!!」

その動きにさらにむきになり、手数を増やすウルフィー。
それが仇になった。

手数が増え、拳に無駄な力が入る。

必然的に振りが大きくなった。

ウルフィーの大振りのフックが宙を切った。

聖が動いた。

まるで、本棚から目当ての本をとるかのように。

使い慣れたバッグから、携帯電話を抜き取るように。

自然で、それでいて素早い動きで。

聖の右膝がウルフィーのみぞおちを捕らえた。

声にならない声が洩れる。

膝を引き抜き、聖は左足を軸に身体を翻す。

左足が、力強く床をえぐる。

そのまま身体を反転させ、グッと身体を寝かせる。

そして、身体の左側から右足を大きく放り出した。
そう。

大砲から打ち出される巨大な弾丸が今、全身のバネを使って発射されたのだ。

「ぐう……!!!!」

小さな悲鳴。

聖の後ろ回し蹴りはウルフィーの胴体を見事に打ち抜いた。

ウルフィーの身体が浮かび上がる。

そして、弾かれるように吹き飛ぶと、大理石の壁に深々と食い込んだまま、ピクリともしなくなった。

「おまい、あらしと戦るつもりかい？」

イツチが呟いた。

「あんたとお喋りするつもりはない」

私は冷たくあしらった。

「そうかい・・・じゃあ！」

イツチは私の剣先を振り払うと、大きく間合いをとり両の掌を私に向かって広げる。

「消し飛びなあー！」

小さな火球を包み込むように、イツチは両手を丸くこね回す。

火球は見る見るうちに膨れ上がり、すぐに小さな太陽のように白い輝きを放ち始める。

私は何もせず、立ち尽くしたまま、その過程を見届けた。

真つ白い太陽は、瞳を潰してしまふのではという程の輝きを放ち、イツチの両の掌から弾き出された。

私はゆっくりと剣先を持ち上げると、迫り来る太陽に向かって刀身を差し出す。

綿飴を割り箸で絡め取る時みたいに、優しく太陽を撫で付ける。太陽は私の差し出した刀身に、じゃれ付く猫のように絡みつくと、そのまま私のショールそのものの形へと、姿を変えていった。

「な、なんだってえ!？」

まさに驚愕。

悲鳴じみた声を放つイッチ。

「こういうことが出来るってさ、反則だよね。正直さ」

私は光り輝く刀身を眺めながら、誰にともなく呟く。

「ななな・・・舐めんじゃないよ!このサンピンが!」

イッチが再び掌を広げて力を込め始めた。

「もういい」

私はショールを思い切り振り降ろした。

超高熱の白刃が、イッチへと向かって襲いかかる!はずだった。

が、何も起こらなかった。

刀身は光り輝いたまま。

私はその場で刀身を振り降ろしただけだった。

ま、そんなマンガが何かみたいにやいくわけないか。

「バカたれがあ!今度こそ炭くずみたいに消し飛ぶんだねえ!」

イッチが再び白い太陽を放つ。

私は今度は右足を踏み出すと、イッチとの間合いを詰めると同時に、上段から刀身を振り降ろした。

奴と私の間合いはこれで充分。

奴は剣客じゃない。

奴に間合いは計れない。

だから、奴は私の三メートル以内に留まった。

私の白刃は、イッチの太陽もろともイッチの肩を袈裟切りに切り裂いた。

私達は、再びいつものモールへとやってきた。
もう身体はヘトヘトだった。
休息が必要だ。

「どうかな？これは」

私は鏡面張りの壁を前に、聖に問いかけた。
鏡の中の私は、ミリタリーベースの、ちよつとルーズなカーキのロングジャケットを合わせている。

ボトムスは前回のデニムに乗馬ブーツで問題なさそう。

これに、胸元が大きく開いたボードーのカットソーを合わせたら、
すごい可愛いと思う。

「いいんじゃない？動きやすそうだし」

聖も鏡の中の私に返した。

聖は、ホテルから近いファッションビルに入っているお気に入りの
ショップで、先に買い物を済ませていた。

私と違い、聖は決断が早い。

基本的なセンスがいいんだろう。

聖は店内を一周、ぐるりと見回しただけで、自分のコーディネート
を決めてしまった。

聖の場合、直撃は受けていないかわりに相手が炎を使ったため、服
がところどころ焼け落ちてしまっていたのだ。

聖はゴシック調の重厚な姿見の前で、モデル顔負けのボーシングを
して見せた。

襟自体はダブルのライダースだが、丈がハーフコート程もある、黒
い変形ジャケット。

インナーにはところどころにスカルが混じったヒョウ柄のキャミ。
腿に大きな星型のパッチワークが施され、尻ポケット全体にスタッ
ツが打ち込まれたタイトなデニム。

そのパッチワークにも、キャミと同柄の生地が使われており、本体
のダメージ部分にも内側からヒョウ柄が見え隠れ。

まるで服の下にヒョウ柄のラバースーツか何かでも着ているよう。
はつきり言って、超セクシー。

「じゃあ、これにしょーっと」

私はそのミリタリージャケットに決めることにした。

踝まであるロングジャケットに、紫と黒のボーダーカットソー。

それにタイトなデニムと乗馬ブーツ。

聖とまでにはいけないけど、私もけっこうセクシー。

だと思わない？

思うよね？

いや……無理して返事なくていいよ。

私達は雨海タワーの正面玄関に立った。

雨海埠頭にそびえる、雨海市最高の高さを誇るタワー。

雨海埠頭は、東京湾に面する市最大のリゾートテーマパークだ。

東京湾の対岸に位置する、外資系の世界的リゾートテーマパークに
対抗して建設された、超巨大娯楽施設。

ほんの一週間だけ世界最大の直径を誇った観覧車が目玉の、水族館

との複合遊園地。

港を眺めて散歩でき、クルーザーが展示された大きな公園。
東京湾を一望できる展望台を備えた、ホテル兼ショッピングモール
を備えた雨海タワー。

日本中から観光客が集まる、東京湾を挟んで二強と言われているリ
ゾート施設だ。

その雨海タワーに、ついに私達は足を踏み入れた。
もはや罠だとかんたか言ってられない。

ウルフィーも、イツチもすぐに口を割った。

いや、むしろ負ければそのまま口を割るつもりでやってきたのでは
ないか。

やつらの情報は、ドラクラのそれと変わらなかった。

雨海タワーでクロム・ネフューは待っている。

八神の精神体。

ハデスを捕らえ、ついに破壊神を復活せんとしている。

既に駒は揃ってしまっている。

ドラクラ、ウルフィー、イツチ。

そして最後の一人が既にハデスを拿捕し、クロム・ネフューの元へ
と送り届けてしまった。

破壊神が復活すると、どうなるんだろう。

やっぱり名前通り、破壊するのだろうか。

何を破壊するんだろう。

雨海？日本？世界？

分らない。

でも、分かるのは……

八神を破壊すること。

「行くよ。要」

聖が私より先に一步踏み出した。

そんなことさせない。

それは、聖も同じ気持ち。

いや、私よりも更に強いのかもしれない。

だけど、私だって負けてない。

私が八神を助ける。

私は、聖には負けない。

私も一步踏み出した。

半円式の自動ドアを潜り抜けた先には、天井の高さがゆうに私達の三倍はあろう、ガラス張りのロビーが広がっていた。

「ウェ〜ルカム!!」

ギューーン!!!

下品な声と、ギター音が響き渡った。

「イヤー!!」

ロビーの奥には左右からの螺旋階段が繋がった、吹き抜けの二階が存在する。

その声の主は、その二階の手すりの上に立ち上がり、ギターをかき鳴らしていた。

「今度はゾンビか」

聖がうんざりした口調で呟いた。

「やれやれだわ」

あつ。その台詞、現実で聞くとは思わなかった。

私達の前に立ちはだかったのは、どうしようもなくゾンビだった。ギターを持っているところ以外は。

全身は朽ち果て、ところどころ白骨化している。

目玉は半分流れ出ており、歯もほぼ抜け落ちている。

が、なぜか服装だけはレザーで固められており、一部抜け落ちた髪はデ IPP か何かで逆立っている。

その様相は、まるでパンクロッカー。

今までの三人とは、明らかに一線を画している。

他の連中はこれぞ！というほどの王道的なスタイルを保っていたが、こいつに限ってはゾンビの王道とは決して言い難い。

強いて言うなら、あんなのゲームで見たことあるけど。

「俺の名はゾン！ー！てめーら、今、ココで、ぶちのめして逝かせてやるぜえ！ー！」

「行くよ、要」

聖が鋭くそう言った。

続く。

第二十四話「絶望セレナーデ」

私はまた涙した。

ひとり、自分の愚かさを呪った。

ガラス張りのエレベーターの隅、膝を抱え私は嗚咽を隠さずに泣いた。

「私は自分勝手に、ずるくて、卑怯で……」

声にならなかった。

そう何度も呟いたが、実際に洩れ出た声は、掠れ、歪み、ただの喘ぎに近かった。

だが、私はエレベーターに乗ってしまった。

一階から大展望台までの直通エレベーターは、人々をものの60秒で地上250メートルの大パノラマへといざなってくれる。

私に与えられた時間もたったの60秒だけだった。

もうじき扉は無情にも開くだろう。

私はこの時間が永遠に続けばいいと思った。

自分のバカさ加減にあきれ果てていたかった。

それほどの過ちを、私は犯したのだ。

私達の目の前に、無数の小さな膨らみが現れた。

それはみるみるうちに形を変え、人間ほどの大きさまで肥大すると、ついには人間そのものの形に化した。

それは、いや、それらは私達が映画やテレビで一度は目にした事のある怪物、ゾンビという存在に変化した。

「うげえ」

聖が呟いた。

全身が腐ってただれ落ち、髪も眼も歯も、全てが朽ち果て無くなっている。

ゾンよりもさらに腐敗が進行した、おどろおどろしい物体は、私達の前にゆうに数十は存在していた。

「ヒハハハハ！どうだこれ！俺様の兵隊は！」

ゾンは吹き抜けの二階のガラス塀の上でギターをかき鳴らした。

「イツチの兵隊なんざ目じゃねーぜ！あんな影とは格がちげえ！なんせこいつらは全てが実体、本物の生身なんだからな！まっ、ちつたあ腐ってるが」

影？

ゾンは今、イツチの兵隊は影と言った？

私は考えた。

イツチの使った鎧の兵隊は、確かに中身のないがらんとした影だった。

だが・・・

「てめえらもこいつらの性能はご存知だろうが。一体じゃあてめえらに手も足も出なかったが、今はどうだ？この数を相手に出来るか？」

「あいつ、何言ってるんだ？」

聖が怪訝そうな顔つきで、私の方へと視線を向けた。

私は、私の推理が半ば正しい事を悟り、口を開いた。

「多分、前回の戦いの中に混じっていた。って事だと思う」

「・・・・・・」

聖は間を空けて言った。

「外でやりあった、タフな鎧の事？」

「恐らく・・・・」

私は応えた。

聖には及ばないものの、そこそこの戦闘力を備えた兵隊。少なくとも、瞬殺は出来なかった。

そんな相手が目の前にゴロゴロ転がっている。

そして、もう一つの意味にも気付いた。

「多分、あいつはあの場にいた・・・」

「・・・」

聖も、私と同じ事を考えたのだろう。
みるみるうちに、顔色が変わる。

「まさか、あいつが・・・」

「そう。八神を連れ去った、影」

聖の顔がますます紅潮していく。
前歯が音を立てる。

「あんにやろう・・・」

聖は呟いた。

「おら、どうした！！そつちがこねえんなら、こつちから行くぞ！」
ゾンは高らかに声を上げた。

そして、ゾンビたちは一斉に駆け出した。
はつきり言う。

こんなゾンビじゃねえ。

ゾンビってのは、とろくて単純な動きしか出来ないような、そーゆーもんじゃないの！？

それがどうだ？

あいつら、私達めがけて走ってやがる。

しかもけっこうなスピードで。

私はすぐにポケットからマイクを取り出すと、ギュッと握り締めた。
急激に体温が下がった。

形成されたショーテルは、今までにないくらいに冷たい輝きを放っているように見えた。

頭にきてるのは、聖だけじゃないって事だ。

ゾンビの群れは、私達のすぐ目の前に迫っていた。

本気で速い。

聖の目の前に迫った一体がいた。

私とその姿を目視した時、それは既にただの肉塊に成り果てていた。聖の細長い右足が、ゾンビの顔面を捕らえ、そして打ち砕いた。

その足は真っ直ぐ、頭上のゾンビを指し示していた。

ゾンの表情がニヤリと崩れた。

聖は言葉なき言葉を投げかけ、ゾンはそれに受けて立った。

「いいねえ。だが、はつきり言っててめえらは俺の相手じゃねえ」

ゾンが言い放った。

ゾンビの一体が、聖に襲い掛かった。

聖は左足の軸を力強く回し、そのままその延髄めがけて足を振り下ろす。

いわゆるブラジリアンキックと言うやつだ。

その一撃がゾンビを捕らえた瞬間だった。

聖の姿が消えた。

私は何が起きたのか認識出来なかった。

一瞬の空白。

それが仇になった。

私は自分の身体が浮き上がるのを感じた。

同時に脇腹に鈍い痛みが走るのも感じた。

私の身体はものの見事に吹っ飛んだ。

そして、何が起きたのか悟った。

ゾンビの一体の胸部から伸びた影が、私の身体に突き刺さったのだ。

「ひゃーっはー！」

ゾンの高笑いが耳につく。

私はタワー入り口の大きなガラス製の自動ドアに叩きつけられた。そしてそのままくず折れた。

気付くと、すぐそばに聖がいた。

口から血が垂れていた。

私は戦慄した。

聖は顔面にさっきの一撃を喰らったんだ。

聖が顔面に打撃を喰らうなんて、クロム・ネフュー戦以来初めてじゃないのか？

聖の腫れた頬を見て、私は恐怖を感じた。

そんな馬鹿なことが起こるなんて。

「どうだ！？俺様の实力はよぉ！！」

再びギターをかき鳴らし、ゾンは叫ぶ。

「てめえら、クロム・ネフュー様の邪魔をしに来たんだろうが、はつきり言う。もうここからどこにも行けねえぞ。てめえらはここでくたばって腐っていくだけだ！」

「げほ・・・」

聖が口の端を拭いながら膝を付くのが見えた。

どうやら大したダメージはないらしい。

「舐めんなよ、この煮こごり野郎が。誰がここから動けないって！？」

聖が咆哮した。

心臓が跳ね上がった。

聖の怒鳴り声なんて初めて聞いた。

私の身体は本気ですくみあがった。

「おうおう、威勢がいいな。さすがクロム・ネフュー様が直々に相手をしたくなった程の女だ。一味違うわけだ」

ゾンは自分のただれた腕で、自らの口を拭った。

まるで涎でも拭うような動作で。

「ひはは、マジで美味そうな女だぜ。だが、てめえはボスの獲物だからな。俺様はここでは足止めするだけよ。だが、そうだな・・・」
今度は頭をぼりぼり掻き、なにやら思案しているようだ。

骨がむき出しになった指先が、頭部を往復する度に、抜け落ちた髪や肉片がこぼれていくのが見える。

「一個サービスだ。何でてめえらが俺に勝てねえか、何で俺様がこんなにつええのか、教えてやるぜ」

聖が声を上げようとした。

が、私は彼女の肩を押さえた。

私を振り返る聖。

私は首を振った。

少しでも敵の情報は欲しい。

それに、私にも彼女にも、ダメージを癒す時間が必要だった。

「てめえらが先にやりあったドラクラ、イツチ、ウルフィー、そして俺様ゾン、四人の使い魔ってのはだな、クロム・ネフュー様の力の一部なんだよ。均等にお力を頂戴し、そして更にそれぞれドラクラが直情的な面を、イツチが理性的な面を、ウルフィーが残忍な面を司っている。それぞれ各自が頂いた力を己の能力の何に活かすかを決め、戦闘スタイルを形作る。ドラクラは剣技に全てを注ぎ、イツチは魔術、中でも炎や氷なんかの攻撃的な魔術に、ウルフィーは単純な身体能力に特化した。それぞれ、司る面が大きく影響したスタイルになったわけだ。そしてこの俺様は、クロム・ネフュー様の狡猾な面を司っている。

狡猾ってのは、戦闘においては最強だ。意味が分かるか？最も勝利に拘り、勝つために手段を選ばないからだ」

私は聞きながら納得した。

勝利への拘り。

つまり、奴は自分の力のほとんどを、兵隊のゾンビと遠隔操作の伸びる影に費やしている。

しかもゾンビと影をリンクさせ、先ほどのような多重の同時攻撃を仕掛けてきている。

イチとウルフィーのような別人格じゃないから、連携ミスもないなら、奴を潰す方法はひとつだ。

「ひはは。これで俺様の弱点にも気付いたか？俺は他の連中と違って、自分自身の強化に力を使っちゃいねえ。俺を倒したきゃ、直接俺様のとこまで来ればいいのさ。来れたら、だがな」

ゾンが話している間、ぴたりと動きを止めていたゾンビたちが、再び蠢き始める。

一瞬だけの攻防だが、私は理解していた。

奴の元までたどり着くのは、恐らく不可能。

無数のゾンビ兵を相手にしつつ、縦横無尽に走り回る影も避け、この広いタワーのロビーから半螺旋の階段を昇り二階へ。

どう考えても無理だ。

これは作戦なんてレベルで解決できる問題じゃない。

河川敷の雑草を、カッターナイフだけを使って日が沈む前に刈り切る事。

そんな例えでも当てはめようか。

カッターで雑草は刈れる。

だが、その広さ、数、時間は解決出来ない。

この戦闘、絶望的だった。

「要」

聖の声で私は我に返った。

「あそこだ」

聖は私に視線である方を示した。

ロビー奥、二階部分の下に位置する場所に見えるのは・・・

「エレベーター？」

聖は頷いた。

「あれに乗って上に行こう。あんな奴、相手にする必要ないからね」

私は仰天した。

この状況下で、その選択肢は出なかった。

目の前にそびえる岩山を、私は登る事しか考えていなかった。

というより、この強迫観念を突きつけられた状況で、いとも簡単にその観念を捨てられる判断力。

賞賛に値する。

「多少のダメージは覚悟だ。一気にあそこまで走り抜けるよ。もし二階で奴に捕まっても、本体相手なら問題ない。それにこのタワーのエレベーターは高速仕様だから、さすがにゾンビ供も追っては来れないでしょ」

もはや手はそれしかない。

使い魔を一体残すのは、クロム・ネフューを相手にする事になる場合にとても厄介だが、そうしなければ今ここで私達は全滅だ。

優先すべきは生きて展望台へたどり着くこと。

「固まって走るよ。とにかくエレベーターに乗るんだ。絶対に八神たちを助けるんだ」

聖は立ち上がった。

私も立ち上がった。

多少の痛みはあるが、もう身体は問題ない。

いつでも動ける。

八神を助ける。

聖の想いの強さを感じた。

私だって負けてない。

八神を助ける。

私達は一気にゾンビの群れに突っ込んだ。

前方にいるもののみを狙い、掻き分けるように進んだ。

無数のゾンビが私達に向かって攻撃を加える。

そのゾンビ達から伸びる影もまた、私達の身体に容赦なく叩きつけ

られる。

服は破れ、身体の至る所に傷が出来る。

それでも止まらない。

でたらめな数の衝撃が、次々と私達の体力を奪っていく。

私達がロビーの中央を通り過ぎた辺りからだった。

ゾンビたちの動きが変わりだした。

直感した。

「バレたか」

聖の声が耳に届いた。

周囲を囲んでいたゾンビ群が、次々と前方に先回りを始めたのだ。

「まずいよ！聖！このままじゃ」

私は悲鳴を上げた。

この絶望的な状況。

私は完全に取り乱していた。

「く、つそがあー！」

聖が再び咆哮した。

聖は手近にいたゾンビの足を掴んだ。

「要、伏せる！」

私はとつさにその場にしゃがんだ。

聖はゾンビを思い切り持ち上げると、その場で回転を始める。

手にしたゾンビをブンブン振り回し、周囲の群れを次々に蹴散らし
ていく。

私の頭上を、振り回されているゾンビが何度も何度も通り過ぎる。

その度に、そいつの肉塊がどんどん飛び散り減っていくのが分かる。

「うりゃあー！」

掛け声と共に、聖はゾンビの足を放した。

吹き飛んだゾンビは前方の群れをなぎ倒しながら、ついには全ての
腐肉が分解して無くなって消えた。

「急げ！」

私達の目の前には、エレベーターまでの道がわずかながら現れたの

だ。

私も駆け出した。

聖が先行し、エレベーターのスイッチに触れた。

すぐに扉が開く。

聖は乗り込むと、操作盤を抑えながら私が到着するのを待っていた。ゾンビの群れは、仲間の肉塊など意にも介さず、再び私達に迫り来る。

「要！早く！」

聖の声が響いた時だった。

「あつ！」

私は叫んだ。

聖が振り回したゾンビの肉塊が床を汚染している。

その腐った肉に、私は足を捕られたのだ。

私はその場に倒れ込んだ。

ゾンビの群れは既に眼前に迫っている。

ダメ！もうダメ！

「要！」

聖がエレベーターから飛び出した。

「聖！」

私は寝そべったまま、彼女の名を呼んだ。

聖が膝について、私の脇に滑り込んで来た。

「要、早く！立てる！？」

彼女の問いに私は首を振った。

ゾンビの腕が、聖の肩や、髪に掴みかかるのが見えた。

そして、一瞬の思考もなく、聖は私の腕を持ち上げると、私の身体を全力で放り投げた。

私はエレベーターの中に叩きつけられた。

「聖！」

操縦者のいなくなったエレベーターの扉は既に閉じかけていた。

私は急いで立ち上がり、扉へと駆け付けた。

聖の身体は無数のゾンビに捕らえられ、もはや彼女の顔と腕だけしか望むことは出来なかった。

そしてエレベーターの扉は、聖の姿を、私の目から隠してしまった。

私は、強い重力に引つ張られ、その場にへたり込んだ。

聖が用意していた、操作盤は既に大展望台だけを目標としていた。

エレベーターは、すぐに二階を通り過ぎ、事もなく展望台を目指して昇っていった。

私は、叫んだ。

続く。

第二十五話「決戦ラウンド1」

無機質な音を立て、エレベーターの扉がゆっくりと開いた。永遠に時が止まればいい。

それでも、そんな気持ちにはお構いなしに扉は開いた。

強烈な突風が扉の隙間からなだれ込んだ。

私の身体は無力にも突風に跳ね飛ばされた。

ガラス張りのエレベーターの内壁に叩きつけられる。

まるでこのまま真つ逆さまに落ちていくのではという錯覚に襲われた。

私は扉の外を凝視した。

私はすぐにはその光景を理解できなかった。

夢魔クロム・ネフューだ。

戦っている。

例の触手を伸ばす。

以前、聖とやりあった時とは比べものにならないスピード。クロム・ネフューの身体が浮いた。

触手に引っ張られ、ロケットみたいに跳びあがる。

そして床に叩きつけられた。

立ち上がれずにいるところを、思い切り踏みつけにされる。床にひびが走る。

轟音と共に床が抜けた。

クロム・ネフューを踏みつけた相手と共に、そのまま階下へと消えていった。

明らかに押されていた。

あのクロム・ネフューが、苦戦を強いられている。

私はゆつくりとエレベーターの外に出た。

辺りは、彼らの交戦の影響で、荒廃しきっていた。

床も壁も亀裂が入り、激しく破壊され、展望台に付き物の売店や洗面所は見るも無残だった。

瓦礫がいたるところに散乱し、戦いの激しさと、どれだけの力を持った者同士の戦いなのかという事を物語っていた。

階下からは未だに轟音が響き、その度に地上250メートルの展望台は大きく揺れた。

その戦闘のスケールに、私は圧倒されていた。

私はゆつくりと、クロム・ネフューを踏みつけた者の姿を思い浮かべていた。

それは丁度人間の大人、男性と同じほどの大きさだった。

上半身裸で、ところどころ破れたデニムを身につけているだけ。

しかし人間とは違う。

真っ白な髪が激しく逆立ち、襟足から同じような毛が首筋、肩と背中、そして胸板までを覆っていた。

左目から頬、胸板、しかも心臓の真上と、腹部には梵字にも似た奇妙な紋様。

なにより人間との相違点は、尾てい骨あたりから、真っ白な尾が生えていた。

八本の尾が。

あれはなんだ？

分からない。

分かっているのは唯一つ。

奴があゝの夢魔クロム・ネフューを圧倒しているのだ。

私は気が遠くなった。

（破壊・・・壊す・・・壊す・・・総てを壊す・・・壊す・・・壊す・・・）

圧倒的な破壊衝動。

そこはありとあらゆる感情で埋め尽くされていた。

憎悪も、憤怒も、狂気も。

限りなく感情に溢れ、破壊を求めている。

あまりに邪悪で、混沌として。

私はその場で立ったまま嘔吐した。

あまりにも激しいその衝動に、私の心は耐え切れなかった。

頭がはち切れそうで、いてもたってもいられなかった。

何なんだ、このあまりにも真つ黒な思考は。

なぜ、ここまで破壊のみを求められる。

なぜ、ここまで無造作に破壊を求められる。

私は考えたくなかった。

もう何も感じたくなかった。

聞きたくなかった。

でも、この流れ込む思考を止められない。
濁流が強すぎて、扉を閉められない。

このままじゃ、私の頭は直にダメになってしまう。

その時、私は物理的な感触を感じた。

頭がはじけた。

私は意識を取り戻し、後ろを振り返った。

「要」

私は、私の肩に置かれた手に視線を落とした。
浅黒く、筋張った大きな手。

私は視線を上げた。

「海……」

私は無意識に彼の名を口にしていた。

海はにっこりと微笑んだ。

「要ちゃん」

海の後ろから、もうひとつ見知った顔。

「桜……」

私の意識が徐々に鮮明さを取り戻していくのが分かった。

「海君！桜ちゃん！」

私は思わず声を上げた。

そして急いで彼らの出で立ちに目をやった。

パーカーにデニムの海。

桜は大きなVネックのワンピにスパッツ。

あの日、あの時の二人。

白や赤の甲冑は影も形もなく、私が知っている正真正銘の二人だった。

「要・・・」

海が口を開いた。

「俺たちは何もしてやれないみたいだ。すまない」

「え・・・？」

私は聞き返した。

「ごめんね、もう時間がないみたい」

今度は桜が言った。

「なにを・・・」

私が口を開いたその時だ。

「頑張つて、要ちゃん」

「無事に帰って来い」

二人の身体が徐々に薄くなっていっただ。

「え？え？ふたりとも・・・」

私は海の腕を掴んだ。

私の手の中で、海の手は更に薄くなり、すぐに消えうせた。

私は呆然と、その場に立ち尽くした。

私の意識が薄ければ、また先ほどの破壊衝動に精神を蝕まれてしまっただろう。

だが、私の手に残った海の体温が、私に自我を保たせていた。

再び轟音が響いた。

私は振り返った。

爆風が私を襲う。

私は顔を覆いながら、マイクを握り締めた。

体温が下がる。

爆風が止んだ。

私は顔を上げた。

「ちつ。とんだ誤算だ」

クロム・ネフューだ。

広い展望台の中心近く。

瓦礫と化した売店の中に、奴が浮いていた。

その姿は戦闘の影響で、既にボロボロだった。

「くそ。今の力でも、なんとか制御できるかと思ったのに。このままじゃ・・・」

奴はひとり呟き続けていた。

私には全く気付いている様子はなかった。

私は意を決して声を上げた。

「クロム・ネフュー！」

クロム・ネフューの身体が脈を打った。

私を振り返る。

「なんだ、君か」

その口調には嘲りが混じっていた。

「今、君に構っている暇はないんだ。いい子だから邪魔にならない場所で大人しくしてくれるか？」

「クロム・ネフュー。一体ここで何をしてるの？何があつたの？」

「うるさいな。言つたろう？構ってる暇はない」

クロム・ネフューが私に背を向けた。

私は走った。

飛び上がり、クロム・ネフューの背に向かってショーターを突き立てた。

鋭い音が展望台中に響いた。

私のショーターは、クロム・ネフューの足元にあった大きなコンクリート片をスッパリと切り裂いていた。

「今のはわざとはずした。次はないよ」

私はクロム・ネフューの背に向かって囁いた。

クロム・ネフューがゆっくりと振り向いた。

「速いな。いつの間にそんなに強くなった？」

私はクロム・ネフューの正面で、背を伸ばして奴を見下ろした。奴も私のすぐ目の前で、地に足をつけて私を見上げた。

「いいだろう。少しだけお話ししてあげよう」

「当然」

「ここで何があったのか。だったね」

「そう」

「簡潔に言おう。破壊神が復活した」

「さっきの・・・」

「そう。さっきの白い猿が破壊神ハヌマーン」

「八神君は？」

「いない」

「・・・・・・」

「僕は八神君の精神体を彼の肉体に戻した。そして彼の精神は洗浄され、純粋な破壊神が生まれる。・・・・はずだった」

「はず？」

「そう。はず、だ。破壊神とは本来、破壊だけを求める。そこには破壊以外の何もない。破壊の為の破壊だけ。それがどうだ？君もあの感情を味わっただろう？」

「・・・・・・」

「なんだ、あの感情の渦は。あれでは純粋な破壊は埋めない。そしてなにより・・・・」

「あんたの自由にならない」

「・・・・そうだ。僕はあの純白の破壊衝動だけの存在に入り込み、その力だけを手にするつもりだった。しかし、奴は空っぽではなかった。あそこまで不純物の混じった存在には入り込めない。しかも奴はこの僕に襲い掛かってきたんだ」

「いい気味だわ」

「なんとでも」

「なぜそんな予定外が？」

「・・・・知るか」

「何？今の間は」

「するどいね。でも教えてやんない」

「言いたくはないわ。私の心の中を読んでみて」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「ふつ。そういう事もあるかもね」

「私はこの可能性に賭けてみる。邪魔はしないでね」

「それは分らない。これから僕は奴をこの夢幻空間から締め出す。それが邪魔にあたらなければいいけど」

「邪魔でしょ。ちよっと待っててよ」

「断る。じゃあ僕は急ぐから」
「ちよ、ちよっと待ちなさい！」

そう言つてクロム・ネフューは私の前から消えていった。

「おつと、一つだけヒントをやるう。奴は今、とりあえず破壊を求めている。このタワーを壊す事に夢中らしい。じゃ、頑張りな」

クロム・ネフューの声だけが展望台にこだました。

私はすぐに階段に向かって駆け出した。

タワーは段々と揺れが大きくなっている。

展望台の階段からは、ホテルの最上層へと繋がっている。

破壊神ハヌマーンが一体このタワーのどこにいるのか、皆目検討がつかない。

だけど、探すしかない。

爆音と揺れだけを頼りに、クロム・ネフューよりも先に探し出す。クロム・ネフューも私同様、ハヌマーンの意識に触れた経験がある以上、心で探し出すような行為は避けるだろう。

その点では、私とイーブン。

とにかく早く探さなきゃ。

私は階段を全速力で駆け下りていった。

轟音はかなり下層から響いてくる気がする。

急げ。

私は走る。

およそ20階程下った頃だろう。

音が近くなった。

私はその階から、フロアを検索することにした。

エンジ色の毛足の長い絨毯の廊下。

木目調の扉がいくつも並んでいる。

私は聞き耳を立てながら、廊下を駆けていった。

扉をいくつ通り過ぎた頃だったろう。
わたしは3015号室の前を通り過ぎた。
直後だった。

爆音と共に、背後の扉が破裂した。

私は反射的に止まろうとしたが、自分の勢いと爆風によって私はその場に突っ伏した。

急いで上半身を持ち上げると、目いっぱい振り返った。

私の目に飛び込んできたのは、白い猿。

私はそれを始めて間近で目撃した。

先ほどは遠めだったし、短い時間しか見れなかったから分からなかった。

でも、今はよく見える。

「やっぱり」

私は確信した。

ハヌマーンが吼えた。

私は咄嗟に耳を覆った。

何て大きな声だ。

衝撃で室内のガラス窓が碎けるのが見えた。

耳をふさいでいなければ、鼓膜がぶっ飛んでいたところだ。

ハヌマーンはゆっくりと周囲を見回すと、おもむろに両腕を振り上げる。

その腕が、絨毯の床に衝突した瞬間だった。

衝撃波。

一瞬で足場は瓦礫と化し、吹き飛んだ。

まるで爆弾だ。

私の身体はその衝撃波で軽々とふっ飛ばされた。

ありえない威力だ。

私の身体はまるで風に舞う紙くずみたいに、何メートルも何メートルも先に飛ばされていった。

こんな経験初めてだ。

生まれて初めて、人間はこんなに飛ぶことがあるんだと知った。

この異常な世界に来てからも、何度か身体が自由が利かなくなるくらいに飛ばされたことがあった。

でも、それでも、ここまで飛ぶことはないだろう。

戦争を題材にした映画を観たことがあるだろうか。

爆撃機から投下された爆弾を近くで受けたシーンなんかで、こんなことが起きていた。

それは全部フィクションで、CG映像の作り出した虚像だと思っていた。

私はついに赤い絨毯の上に着地した。

それから、何度も何度も転がった。

私は面食らっていた。

なんだ、これ。

ありえないわ。

これが神か。

今まで存在すら信じていなかったものの力。

せつかく出会えたのに、これじゃあ何もしようがない。

私は破壊神の顔を思い出していた。

白い毛、紋様。

だがあの顔は紛れもなく、

「八神君」

私は壁に背中をつけ、逆さになったままの姿勢で足の間から廊下を眺めて思案した。

続く

第二十六話「狸と狐」

第二十六話「狸と狐」

私は思案を巡らした。

問題を整理しよう。

ゆつくりと、そして素早く。

まず、ひとつ。

破壊神と八神。

クロム・ネフューの表現から推測するに、破壊神とは恐らく

「宿主の精神を完全に塗り替え、宿主の肉体のみを残して具現化し、純粋なる破壊のみを生み出すもの」

そして今の破壊神は

「不純物の混じった、不完全な破壊を生み出すもの」

不純物。

混沌。憤怒。憎悪。

これらの感情。

完全に破壊神に精神を塗り替えられてないから？

まだ、宿主の精神が残っている？

だから、不純物という形で、破壊神の存在に歪みを生じさせた。

つまり、まだ八神は消えてない。

ふたつ。

その八神を、どうやって破壊神から引き剥がすか。

ん……逆か。

どうやって八神から破壊神を引き剥がすか。

八神の肉体を乗っ取っているだけなら、存在そのものは八神のはず。そして精神が残っているのならば、八神はかなりの割合を破壊神の中で占めているはず。

身体が50%だとして、精神は10%？

もつと少ないかも。

でも、それでも破壊神の大半は八神なはず。

破壊神が八神の精神をデリートして、破壊神たるのなら・・・

破壊神の精神をデリートすれば八神たるはず。

引き剥がす。

いや、デリートするのか。

答えはそれしかない。

どうやって・・・。

クロム・ネフューは、八神の精神を引き剥がし、そしてまた注入する事でデリートしようとした。

何故？

宿主の精神が抜けた時点で、八神の肉体には破壊神しか残らなかったはず。

なのに何故その時点で破壊神は目覚めなかった？

これは推測にしか過ぎないが・・・

八神の精神は、破壊神が活動する為の餌。

つまり、八神という栄養源がなければ、破壊神は自体は八神の肉体を操れない。

これが正しければ、八神の精神は正確にはデリートされるのではなく、破壊神の栄養源として存在し続けるはず。

要は、どちらが主軸なのか。

というだけの話なのではないか？

だとすれば、今表面に出てきている破壊神の精神を弱らせる事が出来れば、もしかしたら八神の精神がもう一度表面に出てくる事も可能なのでは？

そう、それしかない。

しかも、既に八神の精神は破壊神に歪みを与えている。抗っているんだ。

中で。

だったら答えは簡単だ。

破壊神の精神を弱らせ、八神をサポートすればいい。

風邪と免疫みたいなものだ。

そう、これは病気なのだ。

八神は病気を患っている。

私は八神に薬を投与する。

それだけなんだ。

みつつ。

どんな薬を投与する？

問題はそこだ。

どうしよう。

全く分からない。

破壊神を弱らせる薬？

なんだ？

分からない。

それを探りたいんだけど・・・

よつつ。

クロム・ネフューが破壊神を、どこか分からないけどどこかにやろうとしている。

異空間？異次元？

分からない。

だけど

そしたらこの私の計画も全ておしまいだ。

結局は、何度考えても答えは一緒。
クロム・ネフューよりも先に破壊神を捕捉して、どうにかして精神を弱らせる。

この先がどうしても出てこない。
しかも加えて大問題発生。

目の当たりにした破壊神の力。

あんな強力なもの、私の力じゃ捕捉も何もあつたもんじゃない。
たまたま奴の興味の対象が私ではなかったから良かったようなものの、もし私がターゲットだったとしたら、私は既にただの肉片と化していただろう。

もう、方法はこれしかない。

私は大きく深呼吸した。

「よっ」

私は腕で身体を少し持ち上げると、両足をそつと床につけゆっくり頭を持ち上げた。

股の間から見ていた逆さまな景色より、いくぶんか正常に見えた。

私は覚悟を決めなくてはならなかった。

ホテルの通路には、先ほど破壊神の空けた大穴がぱつくりとその口を開いたままだ。

鉄筋コンクリート作りの内壁が剥き出しになっている。

太い鉄骨が無残にも捻じ曲がって、ぽつきりと折れていた。

張り巡らされた水道管が裂け、煌く水のしぶきを溢れさせていた。

私はその光景を眼下に、再び大きく深呼吸をした。

カルキの臭いが鼻をついた。

（聞こえる？聞こえる？）

私は尋ねた。

（聞こえる？クロム・ネフュー）

私は耳を澄ました。

（……要ちゃんか？）

応えた！

クロム・ネフューだ。

（ああ、クロム・ネフュー。良かった）

（いい度胸じゃないか。この状況下でこの僕にコンタクトをとろうなんて。精神をやられたか？）

（全然。正気よ）

（……何が目的だい？）

（簡潔に言っわ。取引をしましょう）

（……どういう事だ？）

（今、私の前に八神君の身体がいる）

床の風穴は、数階も貫かれ、何重ものの口を開けていた。

その末端、そこにさらに破壊を進める八神の姿があった。

（……ちえ。先を越されたか）

（そうみたいね。そこでだ。私はこの情報をあんたに提供する。代

わりにあんたは奴を捕縛する。そして私に引き渡す)

(それが取引かい?)

(そう。悪い話じゃないでしょ?)

(やっぱり君はやられてるな。それが取引になるとでも?)

(ならない?)

(無論だろう。僕は君にその情報を貰わなくても、直に破壊神を見つけるだろう。そして君が取引を持ちかけたように、今、現時点で奴を捕縛できる能力を持つのは僕だけ。それに、君が僕に提供する情報はたったのひとつ。僕が提供する条件はふたつ。釣り合わないとは思わないか?)

(・・・思わない)

私は言い切った。

(何故なら、私が八神君の身体をあんたから守るから)

(・・・なんだと?)

(忘れた? あんたは聖を・・・。私はあんたを許さない。その上、八神君をあんな風にしたのもあんただ。私はあんたを心の底から憎んでる。私にとって、最も大切なものをふたつも奪ったんだ。もう私自身がどうなったって構いやしない。あんたを潰せるなら、破壊神だろうがなんだろうがなんだって利用してやる)

クロム・ネフューの声が途絶えた。

いや、沈黙しているのだろう。

(いいだろう。その条件、飲んでやる)

(流石。冴えてるじゃない)

(それで。今どこにいる?)

(まだ教えない。私自身がもっと近付いてから、また連絡する)

(おいおい、信用してないのか?)

(当然。通信終了)

(おい!)

クロム・ネフューが何かを言いかけたが、私は無視して心を閉じた。

私の額には汗の粒が無数にできていた。

それを一気に手の甲で拭い、大きく息を吐いた。

一世一代の化かし合い。

今それが始まった。

破壊神は、床を砕くのを止め、手近な壁を殴りつけ始めていた。

今、私がいる階から四階下層、26階にいる。

この一流ホテルの天井の高さは目算で二メートル半。

床の厚みを大体一メートルとして、私と破壊神の距離はおよそ十四メートル。

階段まではおよそ三十メートル。

この風穴を下りる時間と、階段を使う時間。

早いのはどっち？

確実に階段だ。

だが、破壊神から目を離していいのか？

それは駄目だ。

今頃クロム・ネフューは血眼で破壊神を捜しているはず。

もし奴が先に見つければ、この取引は全くの無駄。

私は腹を括らなくてはならない。

覚悟は出来てる？

「出来てる！」

左足を思い切り踏み切ると、風穴へと飛び込んだ。

私のいた位置から、穴の逆側を目指して。

赤い絨毯が迫り来る。

「うっ!!」

肺から空気が無理矢理押し出された。

両手を付き、極力衝撃を押さえたが、身体を屈めすぎて自分の膝で思い切り胸を打ちつけた。

苦しい。

三メートル以上も飛び降りた経験、私にはない。

足にも衝撃が走った。

痺れるような、突き上げられた感覚。

私はその場で転げた。

これをあと三回も繰り返すの？

私はすぐに立ち上がった。

今度は鉄筋に手をかけ、一度身体を垂らしてから手を離れた。

さっきまでいた場所の真下に着地した。

今度はうまく着地できた。

この建物は、3階から10階までがショッピングモールとなっており、11階から15階にレストランスペースや映画館が備わってい

る。

その上の階層がホテルとして使われている。

ホテルには、大体大きな宴会場やイベントスペースが設置されてるものだ。

そんなごたぶんにもれず、このホテルにもそういった広い空間の設備が容易されている。

確か、このホテルには要人や著名人が会見を開いたり、金持ちが披露宴を行うような非常に大きな部屋があったはずだ。

そう確かそれは、20階だったはず。

その広間なら、クロム・ネフューが破壊神を捕縛するのにちょうど良く、しかも私がそれを監視するのにも都合がいい。

近くに障害物があると、もしもの時に対応が遅れる恐れがある。

私の計画を成功させるには、広い空間が必須条件。

逃げるのは、六階分。

破壊神を誘い出す。

私は最後の鉄骨から手を離れた。

難なく、赤絨毯に着地した。

目を上げる。

そこには、白い背中が。

必死に壁を砕いている。

その姿はまるで、夢中になって玩具で遊ぶ子供のようだった。

六階分。

逃げ切れるか？やるしかない。

「八神君！！」

私は破壊神の真後ろで、声を張り上げた。

私は八神の左側に回りこんだ。

覚悟は出来てる？

出来てる！！！

私は破壊神に向かってショートを振り下ろした。

ごめんっ！八神君！

切っ先が破壊神の頬をかすめた。

私は全力で剣をひき、上半身を両腕で覆った。
歯を力いっぱい食いしばり、拳を握り締める。

「ドーン！！！」

身体が浮いた。

腕が、骨が軋んだ。

内臓が踊っている。

脳みそがずれる。

私は破壊神の拳を真正面から受け止めたのだ。
なんて衝撃。

コンクリートの床をぶち抜くパンチ。
腕が使い物にならなくなった。

私は廊下を、弾丸のように飛んだ。

途中で天井にぶつかった。

いや、天井なのか、壁なのか、床なのか、それも定かではない。
とにかく何かにぶつかり、再び何かにぶつかり、そのまま私の身体
は転げていった。

ごろごろと。

私は必死に手足をしまいこみ、なるべく衝撃を抑えて転がるよう努
めた。

転がる勢いが弱まった。

私の脳みそも三半規管も、もはや完全に機能を失っている。
身体が止まった。

私は目を開いた。

世界が回っている。

それでも、私は自分の視覚を酷使して、目の前にあるものが何かを
理解した。

階段。

読み通りだった。

私は実に、三十メートルも廊下を転がって来たことになる。
それが目的だった。

破壊神との距離をとるには、敢えてあの爆弾みたいなパンチを喰らう以外に方法はなかった。

そして、私は敢えてそうなるように剣を振るった。

私は廊下を振り返った。

逆さまに見えたが、廊下の奥に破壊神の姿を認めることが出来た。
走っている。

私に向かって。

敢えて剣を振るい、頬に傷をつけて。

それによって、破壊神の興味を私に向ける。
読み通りだった。

続く！

第二十七話「決戦ラウンド2」

私は必死に立ち上がった。

両腕が使えない。

肘から先の感覚がない。

一瞬だけ目をやった。

左腕から、見慣れない、赤白い何か突き出ているのが見えた。
無視して立ち上がった。

階段に一步踏み出す。

目が回る。

踏み外した。

私の身体はくず折れ、階段を滑り落ちた。

踊り場の壁にぶつかった。

それでもすぐに立ち上がった。

今度は手すりに乗った。

そのまま滑り降りる。

うまくいった。

私の身体は、うまく赤絨毯に着地した。

いける。

私はその要領で、更に階段を降りていった。

段々と、頭が元に戻っていった。

視界が鮮明になり、回転もスムーズになる。

破壊神はまだ追いついてこない。

大丈夫。

早く、もっと早く。

私は両腕を使わず、時にはお尻で、時にはお腹で手すりを滑った。

やられていたのは腕だけらしい。

足は全く大丈夫。

身体も、頭も。

私の両腕は砕け、骨が皮膚を突き破っていた。

でも、不思議と痛みはなかった。

それどころではないから。

頭上から、轟音が響いてきた。

破壊神だ。

私を追う音。

恐らく、奴は階段を下っているのではなく、破壊しながら降りていくのだ。

頭は段々と冴えを取り戻し・・・ただけではない。

冴えは更に鋭さを増す。

アドレナリンが体中を駆け巡る。

（クロム！クロム！！）

これが本当の声だったら、私は未だかつてないくらい大声で怒鳴り散らしているだろう。

（クロム！！！！）

（なんだ、うるさいな）

（クロム！今から八神君の身体を誘導するから！）

（なんだい、クロムって）

（クロム・ネフューなんてまどろっこしい！クロムで充分よ！）

（どこに誘導するんだい？）

（20階の大広間よ！あと二階降りれば着く！）

（また急だな。二十階か。分かった）

すぐに声が聞こえなくなった。

私は21階の踊り場に足を着いた。

「っふあ!？」

すぐ上。

天井を、破壊神が砕き割った。

追いつかれた!!

30階で喰らったのとは比べ物にはならないほどの衝撃波が私を襲った。

そりゃそうだ。

声も出やしない。

私は再び無残にも吹き飛ばされた……はずだった。
目の前に、壁がなければ。

私の身体は壁に打ち付けられた拳句、巻き起こる衝撃波に押さえつけられ、ピクリとも動かせないままへばりついていていた。

衝撃波が止み、私はだらしなく床に這いつくばった。

あと一步。

もう一步で計画の場所だったのに。

畜生・・・。

血。

血が水に混じると、とても広がる。

口内に血が混じると、まるで大量に出血したように錯覚する。

それは、よだれに血が混じっているからだ。

そして、血の臭いもまた広がる。

破壊神の壊した天井、床には、無数の水道管が張り巡らされていたのだ。

その何本かが裂け、派手に水を撒き散らしていた。

私の身体も、溜まっていく水に浸され、既にずぶ濡れだった。

そして、身体の下敷きになった腕も、その水に体温を奪われていた。私の血が水に溶け、階下へと伝っていくのが見えた。

この幸運に感謝しなくては。

不自然な血が、私の居場所をクロム・ネフューに伝えるはずだ。

血と体温を水に奪われ、私の意識は朦朧とし始めていた。

クロム・ネフュー。

どうか気付いて。

そして私は一つの事実気付いた。

このホテルの絨毯は赤い。

笑った。

もうダメ、私は死ぬ。

なんだかよく分からない。

けど無性に可笑しくて、私は笑ってしまった。

体中が軋んで、笑ったたびに激痛が走った。

だけど、笑わざるにはいられなかった。

よく気がついた。

さすが。

「いぎぎ……」

破壊神が、歯軋りの音を立てた。

その身体には、白く硬質な牙によって固く締め付けられていたのだ。

「ったく。何をしてるのかと思えば」

「く……をム」

私の声は、もはや発音になっていなかった。

クロム・ネフューは階下から例の牙とも触手とも言えないものを無数に伸ばし、破壊神の身体をガツチリと絡めとっていたのだ。

「バカか、君は。破壊神相手に本当に逃げ切れると思っていたのか？」

そう言うのと、クロム・ネフューは破壊神の身体を思い切り引き寄せた。

「があああ！！」

そのまま背後の大広間に、放り捨てた。

扉を派手に破り、破壊神は広間の中央まで飛ばされていったが、ヒ

ラリと空中で体勢を立て直すと、見事に床に着地をした。

「さて、こっからが本番だ。と、言いたいが……」

クロムが私に振り向いた。

「取り引き、まだ続行？」

足の指すら動かせない私に向かって、クロムがそう囁いた。

「もち……ろ……ん」

私は出来る限りの笑みを浮かべ、そう囁き返してやった。

「ははは」

そう笑うと、クロムは私から顔を背けた。

「ま、取り引きどころの話じゃないな。僕も気を引き締めなくちや。君はしばらくそこで寝ときな。全て終わらせてやる」

そう言くと、クロムの身体は一瞬で掻き消えた。

思った時には、広間内に轟音が響き始めていた。

私は、両手を付かず ゆっくりと立ち上がった。
上手くいった。

両腕は、相変わらずピクリとも動く気配はなかった。

だが、それ以外は全てが良好だった。

天井からの衝撃波。

危うく直撃を喰らうところだった。

だが、運のいいことに。

本当に運のいいことに、私はその衝撃波の死角的なスポットに入り込んでいたらしいのだ。

確かに壁には叩きつけられた。

が、その実ソフトに押し付けられていただけに過ぎなかったのだ。天井が抜けた衝撃で、クロムは階段で異変が起きたことに気が付くだろう。

そこで敢えて、身動きのとれない振りをした。

多分、私が動けないと思えば、クロムはいい気になって好きなように振舞うだろう。

破壊神とも、自分の好きなようにやりあうだろう。

そして異界だか異空だかに送ろうとするだろう。

あそこまで強力な相手を、そう簡単に異界だか異空だかに送れるのか？

そこ。

狙いはそこだ。

多分、そんな簡単にはいかないはずなんだ。

じゃなければ、展望台でとくにやってるはず。

やるなら、充分に弱らせてからだろう。

そして、私が動けないと思っていれば、奴は周囲に注意も払わなくなるだろう。

そこを一気にかっさらう。

それまで、私は傍観者に徹する。

そして少しでも体力を回復しなければ。

私はゆっくりと階段を降りた。

大広間では、激しい攻防が行われていた。

正直、私には理解不能な世界だ。

とりあえず、見たままに実況してみよう。

クロムが触手を伸ばす。

破壊神がそれを掴む。

触手が力なく垂れ下がった。

クロムの姿は消えていた。

クロムが破壊神の死角に現れた。

破壊神が手に持った触手を引きちぎった。

クロムの触手が生えていた辺りから、何かの液体が噴き出した。

クロムが再び消えた。

破壊神が触手を口に入れ、噛み砕いた。

そして口から吹き出した。

猛スピードで空を切ると、急旋回して明後日の方へと飛んでいった。

ある場所まで来た時、宙が歪み、そこからクロムが現れた。

牙の破片が顔面に突き刺さっていた。

クロムはその牙を慌てて抜き取ると、腹部の口に放り込んだ。

途端に、クロムの胸が大きく膨れ上がった。

まるでゲップのように、黒煙を吐き出した。

そのゲップと同時にだった。

破壊神の背を、真っ黒い牙が貫いていた。

そしてゲップは空中で大きな獣の姿に変わり、破壊神へと襲い掛かった。

背を貫かれたままの破壊神。

獣が眼前に迫った。

瞬間、破壊神が吼えた。

私はその場にしゃがみ込んだ。

両腕が使えないから、耳も塞げない。

両肩の間に頭を挟み込んだ。

破壊神の咆哮により、このフロアにあったガラスというガラスが全て弾け飛んだ。

花瓶も、窓も、装飾の鏡も。

獣があつという間に跡形もなく消え失せた。

よく分からない。

本当に不可解な戦闘だ。

何が起きたのかも理解できない。

こりゃ、迂闊に近付くのは命取りだ。

私は広間に足を踏み入れることなく、真っ直ぐその向かいの部屋に入った。

そこは、パーティー用の給仕室だった。

瓶に入ったお酒やら、ジュースやらと、食器類が置いてある部屋。

そして、こういう場所にはあるはずだ。

私は明らかに食器用ではない、木製の戸棚の扉を開いた。

ビンゴ。

木製の箱を取り出した。

緑の十字マーク。

開けると、包帯や赤チンみたいな消毒液が一通り揃っていた。

私は、消毒液とガーゼ、包帯を取り出し、給仕用の小さなシンクへと移動した。

その後、手近にあった大きな気のスプーンを取り出した。

サラダビュツフェなんかで置いてある、あれである。

「ふー」

私は大きく息を吐き出した。

シンクの間隙に手を挟み込み、足をゆっくりとシンクにかけた。

歯を食いしばって、思い切り引つ張った。

「っー!!!」

体中から汗が吹き出た。

半端ない激痛。

それでも引つ張り続けた。

鈍い音がした。

次の瞬間、白く見えていた骨が、皮膚の中へと引き込まれた。

私はその場に突つ伏した。

体中で呼吸をした。

汗はシンクに水溜りを作るほど流れ出ていた。

痛みの余韻が、まだ腕を支配している。

私はもう片方の腕をシンクの間隙に突つ込むと、もう一度足に力を込めた。

「うつうつうつ・・・」

また鈍い音が全身を走った。

そしてまた同じように、シンクに突つ伏した。

全てが左腕のリピート。

全身から力が抜けてしまった。

骨の飛び出した隙間に消毒液を流し込むとその上からガーゼを押し

当てた。

沁みる。

それでも、さっきの骨折を戻した時よりは万倍もマシな痛みだ。その上から木製のスプーンをあてがうと、包帯でグルグル巻きにしきつく結んでやった。

口でする作業は実に疲れる。

これで騙し騙しは動かせるだろう。

妙な疲労感を引きずって、私は冷蔵庫のそばへと近付き、中からオレンジジュースの瓶を取り出した。

栓が開けられない。

私は必死に栓にかじりついた。

数分の格闘の末、オレンジジュースは私の乾ききった喉を潤してくれた。

いきなり冷たい飲み物を飲んで、お腹を下さないだろうか。固定された両腕を見下ろして、私は少し不安になった。

続く

第二十八話「誤算」

私は息をつくと、右手でマイクを握った。
途端に激痛が走る。

あそこまで派手に骨折していれば当然か。

私は更に追加で包帯を取り出すと、マイクを握った右手の上から、ぐるぐる巻きにして固定してやった。

これで最低限の装備は整った。

大広間の戦闘は激しさを増していた。

本来なら、豪華絢爛な飾りつけと、着飾った金持ち達、味の想像すらも出来ないような料理に彩られ、離婚率の極めて高い結婚式が行われる、そんな広間だったはず。

それがどうだ。

展望台や、他のフロア同様、ここも今や瓦礫の廃墟。

しかし、破壊の神といっても、思っていたほど強力ではないんだなあ。

私のイメージでは、神様の力があれば、こんなタワーどころか、街のひとつやふたつ、一瞬で壊せそうなものだが。

ソドムとゴモラの伝説や、バベルの塔なんかを読んでいる限り、神様の破壊というのは非常に強大だった。

だが、あの破壊神はどうだろう。

自分の拳でせかせかと破壊して歩いている。

それでも本物の破壊神なの？

多分、そこも八神の精神が抵抗している証拠のひとつなんじゃないか。

これは私の推論に過ぎない。
だが、かなりの的を射ているはず。

クロムが傷ついていた。

そして、八神も。

ふたりがどれだけの死闘を繰り広げたのか。

私には一様には想像できない。

奴らの戦闘は、前にも述べたが私の理解の範疇を大きく超えていた。
だが、それぞれが大きく消耗しているのだけは分かる。

クロムの小さな身体は血みどろに染まっていた。

自身のものなのか、八神のものなのか。

そして破壊神、いや八神の身体にも至る所に傷ができ、肩で大きく
息をしていた。

どちらが優勢なのかも、私には分からない。

その未知の領域に、私は今足を踏み入れようとしていた。

クロムが動いた。

更に触手を伸ばした。

そのスピードは格段に落ちている。

八神君がその触手を再び掴んだ。

瞬間、八神の身体が跳ね上がった。

何かに身体中を貫かれたかのように、痙攣を繰り返している。
その感じには見覚えがあった。

プラズマだ。

私たちをこの夢幻空間に引きずりこまれた、あのプラズマだ。
破壊神の身体が、一瞬だけだがゆらめいたように感じた。

これは・・・

私は動いた。

クロムへ。

いや、クロムの繰り出した触手へ。

あのプラズマ、八神を異次元へと送り込むプラズマなんじゃないのか？

私達と同じように。

それはさせない。

私は固定したマイクを振り上げると、触手へと思い切り振り下ろした。

体温が下がる。

そして、バターでも切ったような、少し硬い感触が、私の腕へと伝わった。

触手が真つ二つに裂けた。

張り詰めた糸が跳ねた音と共に、クロム、八神、双方の身体が反動で後ろによろける。

「何を・・・」

クロムの呟きが

「もう少しだったのに！」

怒鳴り声に変わった。

「っ！」

だが、私はそんな事に構っている暇はなかった。

右手への衝撃は、すぐに苦痛へと変わってしまい、私はその場に突っ伏していたからだ。

とんでもない痛みが、私の右腕を支配した。

骨折した腕を酷使してはいけないんだよ、まったく。

私は脂汗にまみれ、悶絶寸前になりながらも、必死に痛みに耐えていた。

「聞ってるのか！この小娘！」

それでもクロムは私に怒声を浴びせかけていた。

何だこいつ！

血も涙もないのか！！

私は内心毒づくと、ゆっくり立ち上がった。

そして、

「うつさいのよ！！このクソガキ！！痛いんだから、ちょっとは労わりなさいよ！！」

内心よりも更に激しく毒づいてやった。

足元のコンクリート片をクロムに蹴飛ばした。

ガン。

見事な音をたて、コンクリート片はクロムの額に直撃した。

「いつてーな！この野郎！なにすんだ！」

「いい気味よ。ちょっとは人の痛みを知りなさい」

「うがぁぁー！！」

私はよろけて、再びその場に突っ伏した。
いけね、八神君のことすっかり忘れてた。

てへ！

振り返ると、両腕を振り上げて咆哮する八神の姿。それはまるで獰猛な猿そのものだった。

ガラスを吹っ飛ばすその咆哮も、今や私を転ばせる位にしかなかった。

私は立ち上がると、クロムの方へと駆け寄った。

そのままクロムを通り過ぎ、背後へと回り込んだ。

「ちよつと、クロム」

奴の肩に手を置き、ちよつとだけ前に押し出した。

その肩からは、体温が伝わってきた。

「・・・あんた、取り引きを忘れたわけじゃないでしょーね」

「そりゃ覚えてるよ。ただ、君が立ち上がってくるとは思わなかったから、無視しようとしただけ」

「どうどうと言ってんじゃないわよ」

私はクロムの肩をグイッと押し出した。

「ほら、約束だからね。早く捕まえて来てよ」

クロムは浮き上がると、天井付近まで飛び上がり、八神の上空を旋回した。

そして、腹部の口腔から、無数の液体を降らせ始めた。

八神は上空を見上げ、その液体を振り払っていた。

その液体の一部を、八神君の拳が捉えた。

「があ！！！」

八神が声を上げた。

その拳の先からは、白い煙が上がっていた。

拳が溶けている？

そうか、あれは酸なんだ。

私が気付いた時には、八神の身体のおちこちは、無数の酸によって煙を上げ始めていた。

「うううう・・・」

八神が走った。

周辺を覆う酸の雨。

その中の、もともとも雨の層の薄い場所を狙って。
それは、

「があああ！」

私の方だった！！

破壊神が私の方へと突撃してくる。

その速さといったら、もはや人智の範囲ではない。

私が走つてくると認知した時には、八神の姿は私の視界のほとんどを遮っていた。

まじ？

私には目を瞑る暇すらなかった。

だからこそ、何が起きたのかがよく分かった。

私の目の前に、等間隔の何か白いものが突然飛び出した。

その何かに、八神の身体は思いつきり激突した。

隙間から、腕を伸ばしている。

私はとつさに一歩退いた。

「檻？」

私は何が私を八神から救ったのかを知った。

やっと腕が通る程の感覚をあげ、床から白い牙のようなものが八神の周囲を取り囲んでいた。

身動きも取れないほど狭い檻が、八神を閉じ込めていた。

「これは・・・」

「どう？これで満足かい？」

クロムが檻を挟んで、私の反対側へと降り立った。

「こんなに簡単に捕まえられるもんなの？」

「簡単って言うけどねえ、これは今までの積み重ねでこいつをこころまで消耗させられたから出来た事なんだよ」

「ふーん」

「ふーん。じゃねえよ。ちょっとは感謝しなよ」

クロムが地団駄を踏んだ。

「んで、ここからは・・・」

「無視すんな！！」

うるさい夢魔だこと。

「んで、ここからは私に任せてくれるんでしょうね？」

私は完全無視で話しを続けた。

「ダメだ！ありがとって言うまでダメ！」

仕舞には駄々をこね始めたよ、こいつ。

「これは取り引きよ。お礼も何もあるわけないでしょーが！」

私はぶち切れ気味に一喝してやった。

これでこいつも黙るだろう。

普段大人しい子を怒らせるとおっかないんだから。

「・・・むう」

案の定、クロムは大人しくその場で沈黙してくれた。

「さて・・・」

私は八神に少しだけ近付いた。

牙の格子を掴み、口から鋭く尖った犬歯を覗かせながら、私を威嚇していた。

それはまるで檻に入れられた猛獣そのものだった。

だが、実際の猛獣のように、怯えや困惑はないように思えた。
憤怒。

今の八神からは、その感情しか感じられなかった。
それでも、私は話かけた。

「八神君。聞いて、八神君」

「があ！」

八神は牙の格子に噛み付いた。

「大丈夫、何もしないよ」

私は右手に固定されていたマイクの結び目をほどいてみせた。

「大丈夫。落ち着いて」

こういう時は、優しく、ゆっくりと話しかけるんだ。

動物と接する時は、みんなこうする。

私に敵意がないと悟れば、きっと大人しくなるはず。

「大丈夫。私はあなたの味方。いじめたりしないから」

「ぐううう・・・」

うなり声を上げながらも、八神は格子から口を離してくれた。
いける！

私の作戦は有効だった。

このまま、段々と近付いて、破壊神を手なずけよう。

そうすれば、きっと八神君の精神への糸口が見えてくるはず。

「そう、落ち着いて。私は仲間だから。お話ししましょ」

私は更に一步檻へと近付いた。

八神の逆立った毛が、段々と落ち着きを取り戻してきた。

うまいうまい、私。

「うう・・・」

八神の表情が、柔らかくなる。

そのまま格子に手をかけ、私に向かって手を差し伸べてきたのだ。

「ありがとう、安心して」

私はその腕に、自分の手を重ねた。

体温が伝わってくる。

「あっ!？」

私は息を漏らした。

でも、息が吸えない。

私の顔に牙の格子が激突した。

いや、私の顔が牙の格子に激突したんだ。

八神の腕が、私の首をがっちりと鷲掴みにし、私を檻に引き寄せたのだ。

「要ちゃん!!」

クロムの声が広間に響いた。

八神の爪が、首筋に食い込む。

八神の顔が目の前に。

その目は血走り、息も荒く、殺意に満ち満ちていた。

罨？

演技？

私は戦慄した。

こんなことが・・・こんなことがあっていいのか!？

騙された!

甘くみていた。

ただの動物と同じに見ていた。

そんなわけではないのに。

相手は神だぞ。

私は、私は・・・

「畜生!」

クロムの声が聞こえる。

瞬間、八神の身体をプラズマが包み込んだ。

「手を放せ！この猿が！」

異次元へと飛ばすプラズマ。

私を避け、八神の腕を覆う。

そこには明らかな境界線が見てとれた。

クロム……

私を助けるつもり？

八神の爪が、私の皮膚をついに破った。

あと少して、私の血管を、筋肉を、脊椎を握りつぶすだろう。

八神の身体がゆらめき始めた。

八神が異次元へと飛ばされると、私の首が握りつぶされるの、どちらが早いだろう。

答えは……

「かはっ！」

私は血を吐いた。

指が、八神の指が、私の中へ。

目が、見えなくなっていく。

私が死ぬのが先だったらしい。

「………！」

クロムが何か叫んだ気がした。

でも、聞こえない。

何を言ったのか分からなかった。

意識が遠のいていく。

ガオン！

八神の腕が、目の前で吹き飛んだ。

私は反動で後ろに飛ばされた。

私は見た。

一陣の旋風？

いや、竜巻。

突如飛来した激しい竜巻が、私を掴む八神の腕を引き裂いたのだ。

それは、回転しながら私たちの間に入った。
蹴り。

回転した音速のドロップキック。

私は叫んだ。

「聖！！！」

腕を引き裂いただけでなく、そのまま牙の檻すら貫いて、聖はもつれるようにその場に八神を組み伏せた。

八神を取り巻いていたプラズマは聖すら覆い始めている。

「聖、早く！」

私は必死に立ち上がろうともがいた。

「早くしないと！」

聖も異次元に飛ばされる！

胸中で叫んだ。

声にならなかった。

聖の身体がゆらめき始める。
聖が私に振り返った。

ニヤリ。
笑った。

そして、ふたりはその場からいなくなった。
煙が消えるように。

「ひじりいいい！！！！」

続く

第二十九話「決戦ラウンド3・終幕」

「聖　！！！」

手を伸ばした。

私は必死に。

だがそこには、私の求めるものは何も、なかった。

「・・・・・・・・」

私は身体を震わした。

いまだかつて、ここまで怒ったことはなかった。

怒りが私の身体を、心を支配しているのが分かる。

どうにもできない。

この怒りをコントロール出来ない。

いや、したくなかった。

「クローム！！！」

叫んだ。

力いっぱい。

喉が潰れるくらいに。

「何だよ。でかい声だして」

クロムが応えた。

何事もなかったように、平然と。

その態度が、私の怒りに更に油を注いだ。

「何を・・・何をした!？」

私はクロムに向かい、ショールを振りかざした。

その剣で、やつを指し示した。

腕が、震えていた。

もう痛みも何も感じない。

包帯が真つ赤に染まっていた。

マイクを握る拳の隙間から、どす黒い血がしたたっていた。
が、そんなことすら気にならなかった。

「何をつて・・・」

クロムが口ごもった。

「あんた、あんたは・・・取り引きを・・・」

怒りのあまり、私の言葉はほとんど言葉になっていなかった。

「仕方ない。ああしていなければ、君は死んでいた」

「!!!」

その言葉に、私は戦慄した。

クロムのした事は、クロムのした事は・・・

私は首を振った。

そんなの認めない。

認めたくない!

「聖を、聖まで巻き込むことなかった!」

私は絶叫した。

「聖は私を助けに来たんだぞ!それなのに、あんたは聖を巻き込んだ!消えてしまった!」

「・・・だから、仕方がなかった。間に合わなかったんだ」

「うるさい!!!聖を返せ!八神君を、返せ!」

分かってる。

私がどんなに我儘を言っているのか、それは分かっている。

でも、でも、こう言わなければ。
私の心は……。

「駄目だ。もう僕にそこまでの力は、ない。ふた리를呼び戻す力はないんだ」

クロムが力なく呟いた。

その声を聞いて、私の心は潰れそうになった。

もう一度首を振った。大きく。

「返せ！！！！」

その時だった。

広間の壁際、空間が激しく震えた。

空気が動いた。

私、そしてクロムの身体を大きくよろめかせた。

私は目を大きく見開いた。

今まで、何もなかったその空間に、口が開いていた。

どうなっているのか、理解は出来なかった。

だが、その空間の口には見覚えのある姿が浮き上がっていた。

「聖！八神君！」

私はすぐにその姿の主の名を叫んだ。

そう、その空間の隙間に映し出されていたのは、聖、そして八神の姿だったのだ。

「これは……？」

私は空間の隙間に歩み寄った。

そして、聖の顔に手を伸ばした。

だが、私の手は何の感覚も感じることはなかった。

何の感覚もなく、私の手は聖を通り越した。
聖の顔の真ん中を通って。

「恐らく、破壊神の力が次元に何らかの作用を与えたんだろう。次元同士の壁に薄い部分が出来ている。姿だけが見えるくらいの」
クロムが私に向かってだろう、説明をしてくれた。

私は聖の顔から腕を引き抜いた。
その途端だった。

聖の姿が消えた。

「なに？」

私は数歩、後ずさった。

そこで、初めて何が起きているのかを理解した。

八神が、聖を攻撃していた。

でたらめなパンチのラッシュが、聖を襲う。

聖はがっちりガードを固め、華麗なステップでその全てを避けていた。

いつまでたっても終わりのないラッシュ。

常識では考えられないスタミナ。

いくら聖でも限界が訪れる。

そのうち、パンチの一発が、聖のガードを崩した。

ガードの空いた隙間に、八神のパンチが突き刺さった。

が、聖は身体をひねると、そのパンチを見事に避けてみせた。

そして、カウンターで、ハイキックを放った。

聖の蹴りが、八神の即頭部を捉えた。

音は聞こえない。

映像だけが、私の脳に流れ込んできた。

聖の口が動いた。

八神が吼えた。

すかさず聖は右足を引き、そのまま左足を軸に回転して、背後から

後ろ回し蹴りを繰り返した。

八神の腹部に、見事に突き刺さった。

八神の身体が浮いた。

更に右足を引く。

その反動に合わせて、左足を蹴り上げる。

華麗な蹴りが、顎をかち上げた。

が、八神はよろけもしなかった。

どんなに弱っても破壊神。

そういうことだ。

聖は遠のいて、脱力した。

八神が再び叫んだ。

今度は、聖はガードすらしなかった。

衝撃波が聖を襲う。

突風に吹かれたように、聖の髪が、ジャケットがなびいた。

聖の頬に、首筋に、手に、裂け目が走った。

そこから血がしたたった。

それだけじゃなかった。

聖の目から、涙がこぼれた。

聖の口が再び動いた。

今度は分かる。

声は聞こえなくても、何を言ったのか。

八神君。

それから、聖は一切の抵抗を止めた。

八神は破壊神そのものだつた。
聖に何度も何度も拳を打ちつけた。
倒れるたびに、聖は立ち上がった。
何度倒されても、聖は抵抗もせず、ただ立ち上がる。

「クロム、これは……」

「分からない。きっと、聖ちゃんなりの考えがあるんだろう」
私と共に静観していたクロムが、私の問いに応えた。

「このままじゃ、聖が死んじゃう。クロム、私をあそこに連れていって！」

私はクロムに詰め寄った。

何とかしたい。

何とかしなきゃ。

私はクロムの肩に手を乗せた。

「言つたろう、駄目なんだ。駄目だ。もう、空間を移動する力は残ってないんだ。君をあそこへやることも、出来ない」
「じゃあ、どうすれば!？」

「……僕を殺せばいい」

「なに？」

「僕を殺せば、あの空間も、そしてこの夢幻空間も消えてなくなる。ふたりと、君は元の世界に戻される」

「元の世界に？」

「ああ。僕にやれるのはそこまでだ」

私は困惑した。

元の世界に？

ふたりとも、私も。

それって、破壊神も元の世界に？

それに、殺すって。

私が、クロムを殺す？

「もう、それしかないだろう？ 君にも分かっているはず。何かを求めらるなら、障害と戦わなくちゃならない時がある」

「……」

「それが今じゃないのか！？」

クロムが私の胸倉を掴んで、そう怒鳴った。

「腹を決める！ 自分が正しいと信じる！」

私は完全にクロムに打ちのめされていた。

自分でも、自分の我儘が分かっていた。

クロムに見透かされていた。

私は、自分が恥ずかしかった。

「おい、あれ……」

突然クロムが驚いたような声で呟いた。

「え？」

クロムが指を指していた。

私はその先に視線をやった。

聖の腕に、ギターが握られていた。

壊れたはずの、聖のリッケン620だ。

そう、ウルフィーやイチとやり合った時に、一瞬だけ現れたあのギター。

それが、再び聖の腕に。

「あれって」

私が呟いた瞬間だった。

映像だけの聖の腕の中で、ギターがその形状を変え始めたのだ。

そう、私のマイクと同じように。

ボディーが裏返し、内側からバイクのエンジンのようなパイプがめくれ上がってくる。

ネツクの先にはポツカリと穴が生まれ、聖の右手の傍には、小さな鉤爪のようなものが生まれていた。

変化が終わったそれは、まるで。

「ライフル？」

私は口に出した。

ギター型の、ライフル。

その形状はエンジンの様でもあり、それでもライフルであった。

「どうなってるの？」

「あれは、きつと君のマイクと同じだ。時折あるんだ。自分達の世界では発揮しきれない力が、僕らの世界の力に影響されて、突然発揮されることが」

「あれが、聖の力？」

「それは分からない。君らの力なのか、それともマイクやギターといった物の本当の力なのかは」

「あれ、どうなると思う？」

聖はライフルを脇に抱えると、腰を落とし、銃口を八神君へと向けた。

聖の手にはピックが握られていた。

そして、弦を一度だけかき鳴らした。

その振動に呼応して、銃口に光が集まっていくのが見えた。

「要ちゃん。ゆっくりしている暇はない。早くしろ」

「え？」

「早く僕を殺せ！」

「何を、言ってるの？」

「あのライフルはやばい。異次元にいても、とんでもない力を感じる。あの銃、破壊神を殺すぞ！」

私は聖の姿から目を離せなかった。

「早く僕を殺すんだ！そうしないと、間に合わなくなるぞ！」

聖の口元が動いた。

何を言ったのか、耳では聞こえない。

でも、私には伝わった。

何を言ったのか。

「八神君、辛いだろうね。今、聖が楽にしてあげるから。でも、安心して。すぐに私も八神君のところへいくからね」

私はクロムの顔を見下ろした。

私は、どうしたらいい。

私の目には涙が溢れて、とめどなく流れて

でも、止められなかった。

どうしよう。

どうしたら。

八神が聖に襲い掛かる。

聖の目の前まで迫っていた。

「早くしろ！」

クロムが私に怒鳴りつける。

聖が引き金に指をかけた。

その目には、私同様に涙がとめどなく溢れ出てきている。

私は、何も言わずに、マイクを握り締める。

クロムの顔は、涙で滲んでいる。

八神の腕が、聖に触れようとする。

その時だった。

聖は引き金を引いた。

私はショーターを全力で振り下ろした。

とんでもない閃光が八神君の身体を包み込む。

ショーターがクロムの小さな身体を真つ二つに切り下ろす。

そして、閃光は私達の全てを、包み込んでいった。

私の意識は、すぐに消え失せた。

続
く

第三十話「おかえり」

心地よい日差しの中、私は深い眠りについていた。

暖かな、穏やかな日差し。

秋の匂い。

私は寝返りを打った。

気持ちいい。

ふと、私は目を覚ました。

眠っている時に感じた日差し。

私はその中で、横たわっていた。

背中が、痛い。

硬い感覚が、すぐにこの寝起きの感覚を、すこぶる悪いものに変えてしまった。

ここは、板だ。

板張りの床だった。

私は身体を起こし、目を開いた。

「よお、要」

ステージの上に座っていたのは、

「八神・・・君」

だった。

聖を膝の上に抱きかかえ、その艶やかな髪を撫でながら。

なんの変哲もない学校の制服をまとった、和宮八神そのものだった。
白い毛も、たてがみも、紋様も、尻尾も、何もかもなく、私が知つ
てる本物の八神の姿がそこに。

「や、八神君！！！」

私はその場に飛び起きた。

そこは、体育館だった。

あの日、あの時のままの体育館。
ステージの上には、私たちの使っていた楽器がそのままにセットさ
れたまま。

八神は、そのステージに腰掛け、聖を優しく抱きかかえていた。
私の傍らには、海、そして桜が、同じように寝そべって、本当に気
持ちよさそうに眠りこけていた。

ここは、私たちは、

「帰って、来たの？」

私は八神に尋ねた。

「ああ。そうだ」

八神はにっこり微笑んだ。

ああ、この感じ。

八神の笑顔。

私は、久しぶりに心からの安堵感を味わっていた。
帰ってきたんだ。

私たちの世界に。

「うん……」

八神の膝の上で、聖が小さく声を上げた。

「おう、聖」

八神が、彼女の手を優しく握った。

「ん……、おはよう……」

聖が八神の膝からゆっくりと起き上がった。

「聖」

私は聖の傍へと歩み寄った。

「要」

聖もステージを降り、私の方へと歩を進めていた。

私達は、がっちりと抱きしめ合った。

「頑張ったね、要」

聖が私に囁いた。

「聖も、頑張った」

私も、返した。

もう、ふたりとも泣いていなかった。

それから程なくして、海と桜が目を覚ました。

私達は皆で互いに喜び合った。

不思議なことに、私達が目を覚ましたのは、プラズマが起きて、ク
ロムネフューの夢幻空間へと誘われたあの日。

その時間からたったの二時間しか経過していなかったのだ。

雨はすっかり上がり、私たちを午後の優しい日差しが包み込んでい
た。

それぞれが、自身の体験を全て記憶していた。

私達五人が命がけでやってきた冒険。

私達の話は、尽きる事がなかった。

私の腕も、首も、何事もなかったかのように、完治していた。

それどころか、初めから怪我なんてしてなかったんじゃないかとす
ら感じる。

楽器を整理することもなく、私達は話し続けた。

何故、私たちは元の世界に、何事もなく戻ってこれたのか。

八神には全ての記憶が残っていた。

というよりも、八神が私達を戻してくれた、と言っても過言ではな
い話だった。

私がクロムを切りつけ、聖がライフルを放った瞬間。実は、聖の方がタイミングが少しだけ早かったのだ。

聖と向き合う事で、八神は破壊神の中で必死に抗ったそうだと。聖を傷つけまいと。

その中で、八神だけの力では克服する事が出来なかった。そして聖の放った閃光。

これが、破壊神の魂を打ち抜いたらしいのだ。

破壊神を封じ込めた八神は、破壊神の力を自分のものにする事に成功した。

その瞬間、私がクロムに切りつけた。

だが、何故かクロムを滅ぼしても、空間は元に戻らなかった。ただ、空間は限りなく不安定になった。

八神は破壊神の力を使い、聖を連れてその空間を打ち破った。

そして、私も救い、夢幻空間すらも破壊し、元いた私達の世界へと戻ってきたのだ。

聖が八神を救い、八神が聖と、そして私を救った。

私は、何だかとても満足した気分になった。

それから・・・

二日後、私達の学校の体育館で、私達はG I Gを行った。

予定では、昼の一回だけのG I Gだったはずが、あまりの盛況ぶりに、急遽夜の部すらセッティングされた程だった。

体育館は超満員。

数百人が会場にひしめいていた。

軽音部が2バンド、15分位づつ前座を勤め、私達が30分程のG I Gを行う予定だった。

だが、あまりのアンコールの嵐で、1時間を超えるG I Gとなった。そして急遽の夜の部。

大満足のG I Gとなった。

会場では、今回も参戦していた夏に出会ったひじラーふたり組とも再会した。

聖そっくりの出で立ちは相変わらず。

その姿を初めて見た聖は、その姿にしばし絶句していたものの、実はまんざらでもなかったらしく、ネクタイの結び方なんかをつっけんどんだが教えてやっていた。

海も桜もその光景に大爆笑。

が、内心では自分達も、あんなファンを持つ事を目標にしたらしい。今回のG I Gの成功によって、私達の評判は回復、いやうなぎ登りだった。

文化祭での成功で、今までとは違ったファン層を開拓できた。

しかもその評判を聞きつけた色んなライブハウスが、私達の出禁を続々と解除してくれていた。

夜の部を終え、私はひとり会場を抜け出し、校舎の屋上へとやってきていた。

夜の風は冷たかったが、G I Gの直後で上気しきっていた身体は、全く寒さを感じなかった。

舞台衣装だったTシャツ一枚だが、むしろその風が気持ち良かった。首から提げたタオルで、髪をくしゃくしゃにしながら頭を拭いた。

それから、金網に背を預け、その場に腰を降ろした。

たった二日の出来事だった。

私はひとり、夢幻空間での戦いを振り返っていた。

星空を見上げた。

雨海の街は、残念ながら星空を見るには向いていない、不夜城にも近い都市だった。

こんな時、煙草でもふかしたらとっても絵になるんだろうけど。代わりに私はチューインガムを膨らませた。

パン

ガムフーセンが私の顔にへばりついた。

「ははは！」

聖が声を上げて笑った。

「ちょっと、潰さないでよ」

いつの間にかやってきたのか、私にすら気が付かなかった。

「ここ、いい？」

言いながら、聖は私の隣に腰を降ろした。

「終わったね、文化祭」

聖がしみじみといった感じで呟いた。

「そうだね」

「なんか、この何日かが嘘だったみたいだね」

「うん、私も今、同じ事思ってた」

「ははは。あんなに何回も死にかけるなんて、思ってもみなかったね」

「ほんとだよ。もうあんな経験、二度としたくない」
「あたしも」

私達は、しばらく沈黙した。

その静寂を先に破ったのは、聖だった。

「八神ね、バンド抜けるって」

「やっぱり、そうなんだ」

私はため息をついた。

八神は、この夏から本格的に野球に力を入れ始めていた。

他の部員と甲子園に行くためには、バンドとの両立は難しくなり始めていたのだ。

何度かそういったミーティングは重ねていて、今回のG I Gが彼のラストG I Gになっていたのだ。

「要、あんたはどうするの？」

私も元々は八神に誘われて入っただけ。

八神がいなくなれば、私もバンドに未練はなかった。
と、思っていた。

今までは。

夢幻空間から戻ってから、ずっと考えていた。

「私ね」

聖がこちらを振り向くのが分かった。

私も彼女に顔を向けた。

夜の闇に包まれた聖。

聖は今も、美しかった。

「バンド、続けようと思う」

「いいの？」

「うん」

聖は再び押し黙ってしまった。

代わりに聖の手が、私の手に添えられた。

そして、私の手を握った。

私も、彼女の手を握り返した。

パン！

パン！パン！

私達の目の前で、季節はずれのロケット花火が破裂した。

私達はお互いの手を握ったまま、フェンスの外を覗き込んだ。

中庭の真ん中で八神、海、桜の三人が大量の花火を持って私達に手を振っていた。

私も聖も、三人に手を握り返した。

「行こう！」

聖が言った。

「うん！」

私は目いっぱい笑顔で返した。

それからすぐに冬が訪れた。

私は変わらずバンドに、勉強に精をだす毎日を送っていた。私達の生活は何も変わらず、前のまま過ぎてゆく。

その日も、私は自転車にまたがり学校への坂道に挑まんと、手袋をはめ、マフラーで口を覆い隠した。

門を出る前に、郵便箱に封筒が入っているのを見つけた。

取り出すと、宛名には「大和 要さま」と書かれていた。

へー、私宛の手紙か。

珍しい。

私は封筒を裏返すと、差出人を見た。

「書いてないじゃん」

よく見ると、切手すら貼っていなかった。

私はその不思議な手紙をバッグに押し込むと、勢い良く自転車を漕ぎ出した。

今日もまた、一日が始まる。

第一部

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1961d/>

THE MARVELOUS APES

2010年10月10日14時30分発行